特63
892

十返舍一九著

東海道膝栗毛

上編

袖珍文庫發刊の主旨

明治の文明は漸く膚淺の境を脱せんとして居る。米を食ひ肉を食へば生きて居られると云陋劣な時代は去つて、書を以て靈を養はねば生きて居れぬと云風上の時代に入つた。明治の文明が眞に輝くのはこれからである。

現下の讀書界は一方に泰西の奔放なる新思想を味ふと共に一方に自國過去に於ける産物を新しき眼を以て親ひつゝある。この後者の要求に應じてこゝ數年來盛んに古書の飜刻が起つた。祝すべくはあるが、その飜刻書はいづれも大冊で裝釘も立派である爲に高價であり、且つ大抵は豫約出版法を取るが爲に購讀が手輕く出來ぬのが缺陷である。

泰西にはカッセル、レクラム等云書肆があつて、どんな名著でも極めて簡素な小冊子にして極めて廉價に販賣する。屋根裏に住む貧書生でも自由にこれを

明治43.10.
内交
自國過去

購讀し、紳士も携帶に便なるを喜んで旅行でもする際は必ずこれを袖にする。

弊院が袖珍文庫を發刊するのは日本のカッセルとして立つたのである。古典と云はず輕文學といはず、雅といはず俗といはず、韻文といはず散文といはず過去の日本が產出したる文藝作物の一切はもとより、必ずしも本邦を範圍とせず漢籍中必讀のものをも選み、必ずしも文藝を範圍とせず經世修養其他の書をも選み、いづれも二十五錢均一の袖珍本に裝釘して、弘く讀書界に提供し、以て現下の缺陷を補はむとするのである。その假名漢字の鹽梅等に留意して現代の讀者諸彥に便した事、校訂を最嚴密にした事などはこの文庫の特色と自信する。

明治四十三年六月

三敎書院主識

開題

東海道中膝栗毛は十返舍一九が享和二年から文化六年迄の間に書いた八編十八冊の滑稽小說である。膝栗毛と云ふ名、彌次喜多と云ふ名は、物心知つた者は誰でも知つて居る。この書が非常に歡迎された爲に、膝栗毛以後に版元は一九に旅費を自由に給して金の草鞋、江の島みやげ等同趣の作を成さしめたと云ふ。膝栗毛以前に斯う云ふ道中風俗の描寫と滑稽と結び附けたものは淺井了意の「東海道名所紀」である。一九は旅行好きであるのとこの名所記の行つた道に進んで見ようと思つたのとが本書着想の所因であらう。膝栗毛は方言風習等土地々々の特色を活寫して居る。

滑稽の趣向には狂言落語等から平氣で取つたのも多いが、又その獨創の部の中には一九自らの實際の經驗らしく思はれるのも尠くないやうである。早起して月に浮かれて其儘上方へ三月も旅行した事や、鏡餅や精靈棚を繪で描いて濟ました事や、賀客を風呂へ入れて置いて自分其客の禮服を着て年禮に歩いた事など一九其人が滑稽其者であつた事を示してゐる。

道中膝栗毛發端序

鬼門關外莫道遠、五十三驛是皇州といへる山谷が詩に據りて、東海道を五十三次と、定めらるゝよしを聞けり。予此街道に毫をはせて、膝栗毛の書を著す。元來野飼の邪々馬といへども、人喰馬にも相口の版元、太鼓をうつて賓弘めたる故、祥に乘人ありて、編數を累れ、通し馬となり、京大阪および藝州宮島までの長丁場を歷て歸りがけの駄賃に、今年縱五篇、岐蘇路にいたる、彌次郎兵衛喜多八の稱異國の龍馬にひとしく、千里の外に轟きたれば、渠等が出所を問ふ人あり。依て今その起る所を著し、東都を鹿島立の前冊とし、おくれ走に曳き出したる、馬の耳に風もひか

さぬ趣向のとつて置を、棚からおろして如斯。

于時文化甲戌初春

十返舍一九志

略解

或人問、彌次郎兵衛、喜多八は原何者ぞや。答曰、何てもなし、彌次唯の親仁なり、喜多八これも駿州江尻の產、尻喰觀音の地尻にて生れたる因緣によりてか、旅役者花水多羅四郎が弟子として、串童となる。されど尻癖わるく、其所に尻すわらず、尻の仕廻は尻に帆をかけて、彌次に隨ひ出奔し、俱に戯氣を盡す而已。此書兩士が東都神田の八丁堀に店借し居たりし中のことを著し、終に旅行の發起とする所以の馬鹿らしきことを、作者が寢酒の飲料に、餘計の著述をなすものならし。

道中膝栗毛發端

東都　十返舍一九編

武藏野の尾花が末にかゝる白雲と詠みしは、昔々、浦の苫屋、鴫立澤の夕暮に愛でゝ、仲の町の夕景色を知らざる時の事なりし。今は井の内に鮎を汲む水道の水長にして、土藏造りの白壁建ちつゞき、香の物桶、あき俵、破れ傘の置所迄、地主唯は通さぬ大江戸の繁昌、他國の目よりは大道に金銀も蒔きちらしある樣に思はれ、何でも一かせぎと心ざして出かけ來るもの幾千萬の數限りもなき其中に、生國は駿州府中、栃面屋彌次郎兵衛といふもの、親の代より相應の商人にして、百二百の小判には何時でも困らぬほどの身代なりしが、安部川町の色酒にはまり、其上旅役者花水多羅四郎が抱への鼻之助といへ

るに打込み、この道に孝行ものとて、黄金の釜を掘出せし心地して悦び、戯氣のありたけをつくし、果は身代に迄途方もなき穴を掘明けて留度なく、尻の仕舞は若衆と二人、尻に帆かけて府中の町を駈落するとて、

借金は富士の山ほどある故にそこで夜逃を駿河ものかな

斯く足久保の茶なることを吐きちらし、頓て江戸に來たり、神田の八丁堀に新道の小借家住居し、少しの貯あるに任せ、江戸前の魚の美味に豊島屋の劍菱明樽はいくつとなく長家の手水桶に配り、終に有金を呑みなくし、是では濟まぬと鼻之助に元服させ、喜多八と名乗らせ、相應の商人方へ奉公にやりしが、元來才はじけ者にて、主人の氣に入り、忽ち小錢の立まはる身分となり、彌次郎は又國元にて習ひ覺えたりしあぶら繪などを書きて其日ぐらしに春米の當座買、たゝき納豆、淺蜊の剝身、居ながら呼込んで喰つて了へば、びた錢一文も殘らぬ身代、田舍より着つゞけの布子の袖綿が出ても洗濯の氣を付ける者もな

く、是はあまりなるくらしと、近所の削り友達が打寄つて、さるお屋敷におす奉公勤めし女、年かさなるを媒して、彌次郎兵衛にあてがへば、破鍋に綴蓋が出來てより、狼の口開いた樣な綻もふさぎてやり、諸事手まめに人仕事などして、彌次郎を大事にかくる樣子、此女房の奇特なる心ざしに、彌次郎夜も早く寢て、隨分機嫌をとり暮しけるが、うか〳〵として早十年計りの星霜をふりけれども、薯蕷饅にならず、相替らぬ貧乏、されども屈託せぬ氣性にて、売酒落に洒落散らし、近邊の怠惰者どもの遊び所となりて、五合徳利の寢姿、流し元に絶えず、べこべこ三味線のおと不斷味噌桶の蓋をあくる間とてはなかりける。(あるじ彌次郎兵衛は不在と見え、女房おふつ流しもとにあすのしかけしてゐると、裏店の女房おちよま、細帶前垂にて、たなッ尻をふつて裏口よりさし覗き)おちよ「モシおかみさんえ、御無心ながち醤油が少しあらば、どうぞ貸しておくんなせえ、ホンニ夕は大分お賑やかでござりやした、わつちらが所の

生醉どのか御覽じやれ、まだ歸りやせんわな、此間の晩、夜更けて路次の戸を破れるやうに叩いたとつて、大屋さんのおかみさんが、あの口で御大層に小言を云ひなすつたが、わつちらが所の野呂馬どのも、のろまなれやア、あの又おかみさんもあんまりぢやアござえやせんかえ、ナント店賃の一年や二年溜つたとて、一生遣らずにおきやアしめえし、それを嚇しくいふ位なら、溝板の腐つた所も、どうそするがいゝぢやアれえかえ　そして犬の糞も各自の内の前ばかり淩つて、長家のものは何だと思つてゐるやら、ノウおくんさん、（と向ふのうちの鼻しゆへ水を向けかけると、あがり口に片足下して子どもに乳をのませてゐる女房やがておりて出かけて）おくん「モシナ、あんまり大きな聲をして、そんなことをいひなさるな、奥のおけんつうが今手水にいつたよ、アノおしやべりも又大屋さんのおかみさんへいつそ追從ばかり云つて、長家のことをどうめえツた、かうめえツたと、いゝ苦勞性ぢやアれえかえ、それに聞きなせえ、此

間からあそこの内へ來てゐた居候は、アノかみさんの妹だといふこつたが、ナニあれがお屋敷に奉公して居たもすさまじい、ちよつと見ても知れてありやす、あれやア、おえれえ番狂はせものだとよ、一昨日もどこか下谷のお屋敷へ目見に行くとつて、つくり立つて出ていつたが、ナアニよその隱居樣へ妾に行くので、支度金が七兩來たとさ、いやぢやアれえかえ、あの顏で妾も氣が強い、わつちらもこの額の禿がなくて、耳の際の疾瘤がもう少小いと、妾にでも出て支度金をとらうものを、ハヽヽヽヽ、おかみさん彌次さんはまだかえ、オヤオヤ、噂をいへば影がさすと、ソレ旦那がお歸りだ、（と二人はおのがうちへ引こむと、彌次郎立かへりて）彌次「エヽこの畜生めは、願にかけておらが所の裏口に寢てゐらア、おふつ、茶はわいてあるか　ふつ「オヤおめえ酒ばかりでおまんまはまだかえ　彌次「知れてあることさ、居酒屋へは寄つたが、居飯屋へは寄らなんだ　ふつ「そして喜多八さんの所から何で度々呼びに來るのだえ　彌次「お

れに金を貸してくれろとつて　ふつ「オヤ馬鹿らしい、どうしたのだえ　彌次「あいつめが假宅へてもはまつたさうで、親方の金をちつとばかり遣ひ込んだといふことだ、其尻が割れると、しくじるは當然だが、こゝでしくじつては理窟のわりい事があるといふ、なぜだと訊いたら、あそこの番頭めが此間痢氣が天窗へさしこんで、それなりにあたまがしやつきりとなつて死んだといふ事だ、それに親方は年寄の癖に美しい若いかみさんをもつて、腎虚してもう今日か明日かといふ位、これも今にめでたくなるは必定、さうすると喜多八めがその後家を受合つて手にいれる仕やうがあるといつたが、なるほどさう行けばあいつめはおかまを起こす咄だが、そこではおいらもわりい事はなし　どうぞこゝでしくじらされえやうにしてえものだが、仕方がねえ、時に飯にしよう、何ぞ菜はねえか　ふつ「先刻のむきみ殼汁さ　彌次「オヽ拔身が喰はれるものか、しかしこいつもきらずとあればきづけえなしだ、(と此内日も暮れたるに、行燈をともし、

彌次郎茶漬を食ひかゝる時、年の頃五十あまりの侍、旅裝束にて)　侍「イヤ卒爾ながら駿河の府中からおざつた彌次郎兵衛殿は爰元でおざるかヤア　ふつ「ハイこつちらでござりますが、どつちからお出なさいました　侍「イヤハイ氣づかひな者ではおざんないヤア、(と三十近き女を連れて這入り、膠をかくるを見て、彌次郎肝をつぶし)　ゃじ「コレハ兵太左衛門さま、妹御を連れて何として御出府でござります　兵「あんとしてとア曲がないこの妹めを貴樣の所へ嫁入につれて參つたのでおざるヤア、斯ばかし申しては合點が參るまい、きさま國元にて、これなる身どもがいんもうとのお蛸と密通をせられたといふこと、跡にて聞いて腹立はいたしたれども、たんだ一人のいんもうとがこと、どうした緣でがな貴樣でなくては添はぬと申すゆゑ、不憫におもつて堪忍の胸を撫で、すいた男に添はせずと思ひきはめ、わざ〳〵めし連れて參つておざるヤア、此上からは隨分といんもうとめを不憫がつてやつて下さい、まづ祝つて冷酒でなりと

盃をさせずに、サア〳〵はやく〳〵　ふつ「オヤ〳〵おめえさんは、どなたかは知られえが、何處の國にか、めつさうな、總體男といふものは、女に逢つて二世の三世のと眞實らしくいひかけて欺して見るは女をおとすお定まりの口上、それをまんまことにして駿河からわざ〳〵其男に添はさうとつて、連れておこしなさるといふは、馬鹿氣きつてゐるぢやアござりませんか、又妹御も妹御、滿足な男でもあることか、わたしは仕かたなしに添つてはゐますけれど、色が黑くて目が三角で、口が大きくて髭だらけで、胸先から腹ぢうに癬がべつたりで、足は年中鷄瘡でざら〳〵して、イヤまた寢た時寢息の臭い男　彌次「ヤイ〳〵〳〵こいつめが亭主を羅利骨灰にしやアがる　ふつ「オホ、、、、、それでも男といふものは廢られえもので、女とさへいやア、眼一でも鼻缺でも、たゞば通さぬ氣性、さだめし念比しられた人も邂逅にはありましたらうが、あんまりこのもしい男でもござりませんから、お前さんがたのやうに跡を追つて來

た人は一人もござりません、この狹い内に女房が二人三人あつたら、大屋から根太がたまられえ、店を明ろと追出されるでござりませう、人の知られえうちに早く連れてお歸りなされませ　兵「エレハイ、最前から、つべらこべらと此女中よくしやべるが、其の方は先何者だい　ふつ「アイ、わたしかえ、彌次郎兵衛の女房でござりまする　兵「アニ女房だい、見たくでもないヤア、これ彌次郎兵衛、お身女房を持つたか、エレ〳〵是非に及ばない、縄をかゝれ、國元へ引いていかずに（と、懷中より早縄を取いだし立ちかゝれば彌次郎やつきとして）彌次「ナニ縄をかゝれとアどう言ふ理窟、わつちが女房を持ちやア、縄をかゝらにやアなりやせんかえ、とはうもれえ、モシエ鰺切を二本さしなさつたとつて、それが恐しいものでもござりやせんはな　兵「イヤお身、がいにかさ高にお出やるな、コリヤよくきけ、今度いんもうとを召し連れたれば、家老中の指圖に依て罷越したぞ、其譯といふは、相役の横須賀利金太かたより、此いんもうとを婦

妻に貰ひたきよし、媒をもつて申しこした、身にとつては過分の聟ゆゑ、早速に同心して結納まで受け納さめた所に、いんもうとめは一筋にこなたと夫婦の契約をしたうへは、たとへ親兄弟の差圖でも、ほかへ縁につかずことアいやだといふ、身共魂消まいものか、アヽせず事がないと八、それから其利金太方へ使をつかはし、彌次郎兵衛と申すものと、いんもうとめが密通をいたせし事、神もつて存ぜず、夫ゆゑ結納も受納いたせし所に、いんもうとめは密通の男ならでは添はないと申す、しかれば、妹が首を切つてこなたへ持參仕らう、それにて御一分をたてられ、御了簡頼み入ると申遣せしに先方も諸親類はじめ傍輩どもへ兼てこたな妹御を妻に申受ける筈と吹聽せし上は、世間體へ對し申譯のない仕合せ、女の首ひとつ受けたとて何の役にもたゝぬ事、此上は其元とうち果ずより外分別なし、明晩安倍川原に於て勝負を決せずとの返事、元來身どもゝ覺悟のまへ、いかにもと挨拶せし所に、家老中より双方を召され、年來御

主人の御知行を頂戴いたし居ながら、私の宿怨もつて討果さんとは殿へ對して第一不忠、妹が兄にかくして夫を持ちしをしらずして、利金太に契約せしを不届とはいひがたし、いまだ婚禮もせないうちの事、互に一分のすたる事はない筈、自今以後、兩人意恨をすてゝ御奉公を大切に勤められよ、また妹おたこ事は、假初にいひ約束せし男の外、他へ縁さ付くまじとは、まことに貞節のいたりと、殿にも不愍に思召され、下地より馴染たる男に添はせよとの御意、ありがたくお受け申して、それより是まで罷越したる所、さきの男今女房を持ちをるゆゑ、すご〳〵と妹めを召連れ歸りましたと、アニハイ兵五左衛門ともいはるゝ侍が、生煩さげて歸られずかヤア、サア妹めを妻にいたせばその通り、いやだといへば是非とも縄をかけて國元へ引つれ、家老中へ此段を披露し、一旦約せし利金太かたへおのれを渡さねば兵五左衛門武士がたゝない、サアせずことがないと諦めて縄をかゝれ、但しは踏み付けてめしとらずかヤア

彌次「ハア成程さうおつしやればきこえましたが、しかしそれはおめえさまの方の得手勝手、たとひこの身は三枚におろされ、切刻まれて擂辛にせらるゝ共、我を大切にして艱難辛抱する此女房を捨てゝ、妹御を女房に持たれるものか、しかたがねえ、どうとも御勝手になせえまし（と、覺悟して兩手を後へまはせば、兵五左衛門立ちかゝり、すでに彌次郎をいましめんとするを女房おふつすがり付き）ふつ「モシ〳〵段々の樣子を承りますれば御尤な事、去ながら現在夫が縄目にかゝり、永の道中に耻をさらし、お國で若しも命に拘はることや抔あつては、わたしの悲しさ、モシ今おまへの云ひなさるには、たとへ此身はどうなつても艱難辛抱した女房は捨てられぬといひなさつたが、わたしには千倍、もうなんにも云ひませぬ、わたしには暇を下さりませ、あの妹御は駿河からの馴染とあれば、わたしよりはさきの事、添はうとおつしやるも無理ではない、サア斯わけていふ上に、暇をもくれず、お侍樣の手にかゝる了簡な

ら、先づわたしからさきへ死にます（と泣く〳〵ながしもとの庖丁を取つてひれくり廻すを彌次郎おさへて）彌次「アコリヤ〳〵何をする馬鹿ものめが　ふつ「イエ〳〵それでも　彌次「ハテさて、それ程に思ひ詰めた事なら、しかたがねえ、ちつとの間暇を取つて親分の所へでも行つてゐてくれ、大事の女房を今去らうなどゝは夢にも思はねえ、はかねえ別れをするも、みんなおれがわりいからだ、（とさすがの彌次郎も女房の手まへ氣の毒さに、かたかげへ招きていろ〳〵に欺しつ賺しつ、いひ含め硯箱取出し、三くだり半を書きてやれば、貧乏人のきさんじさ、着の身着たまゝ櫛笥に風呂敷包一つ引つかゝへて涙ながら、しほ〳〵として出てゆくと、兵五左衛門大小を取つてほうり出し）兵「ヤレ〳〵重荷なおろした、ナント彌次さん、わしが仕打は妙でありませう　彌次「駿河ものゝ詞、おそれ入つた、田舍侍の出立、いかな後家の質屋へ見せても、百石取とは直打する男を、棒手振の芋七にして置くは惜しいもの、それに此又矢場のお蜻が

田舍娘の身振妙で有つた、皆おれが自作の狂言で、二人を賴んで女房に一ばいくはせ追出したも、あの陰氣ものに飽き果てたからの事、一ッには急に十五兩といふ金が無ければなられえ事で、芋七貴樣へふつと咄したら、きさまの云ふには、ソリヤ幸の事がある、さる所の隱所が內の腰元に手をつけ孕ました故、聟や娘の手前知れぬ先にとて、表向いとまを出して、請人の所へ內證で預けて置かれたが、どうぞ腹の子ぐるめに金拾五兩つけて片付けたいと、わしが賴まれて居るから、調度よいが、しかし女房のある上べはどうもと、談しについて、おれもその十五兩がほしい最中、たとへ腹には鬼の子が宿つてゐようが、金さへ持つて來れば、年增女房に飽きた所、こいつは妙だと、此狂言をかいて、貴樣たち二人を賴んで、まんまと上首尾にやりはやつたが、彼持參金のしろものは、いよ〳〵急に來る筈か、どうだ〳〵 いも七「イヤくる筈とも〳〵、おめえも金が急ぐといふ、先でも腹が落ちさうだから、一刻も早いがいゝと、せき

こんで居られるから、そこで今夜更けてから、そつと駕でこゝへ向けて來る筈にしておいた、ちよつぴり酒でも出さにやアなるめえが、內に取つたのがありやすか 彌次「ヤア〳〵今夜來るのか、エ、それはまた早急な、それと知つたら、今日髮月代でもしておかうものを、ドレちよつと髭はかりでも剃つて來よういも「ア、コレ〳〵、今頃どこに髮結床があるものだ、そんな事よりか酒の支度でもするがいゝ、コレサおめえ何をまご〳〵する 彌次「イヤ何もしれえが、ちよつと爪でも取つておかう いも「ナニ埒もねえ、そんなことはしれえでもいゝぢやアねえか 彌次「イヤそれでも十本みんなとらずとも、せめて二本の爪ばかりはいも「ハゝゝ、おきやアがれ大笑ひだ、(と此內俄にそこらを片付るやら、火鉢に消炭をおこしかけ、ねずみいらずから五合徳利を取り出し、まづ待ち受けにしらふてはをかしいと、三人鼻つき合せ飲みかけてゐる折から、表口にいき杖の音カツチ〳〵 いも「オヤもう來たさうな、(とかどの戸をそつとあけて飛んで出

て）オツトこだ〳〵、駕の衆御ん餞〳〵、コレ一杯飲んでござれ、（と有合せのはした錢をやつて、かごの者を早速追ひかへし、乘つて來た女の手をとつて伴ひ這入り）いも「サア嫁御のお出だ、お盃〳〵」彌次「コレハいかいお世話」いも「サア、お壺さん、其處へすわりなせえ、そこでおめえから一ツ飲んで御亭主へさしなせえ、お蛸お酌〳〵、コレヤア四海浪靜にといひてえが、謠は知らず、あした來て潮來でもやらかしませう、（と此内だん〳〵杯もすみ、夜も更けたるに）おたこ「いも七さん、わつちらア、もうおひらきに致しやせう」いも「ソレ〳〵、此せまい内に長居はおそれだ、コレおつぼさん、今夜はゆるりと休みなせえ、又明日お目にかゝらう、（と暇乞し、おたこもろ共立出づれば、彌次郎送るふりして表にたち出で）彌次「コレ芋七、持參金の沙汰がないが、どうする」いも「そこはぬかられえの、今のさき駕から出た時、そつと聞いたら、あしたの畫時分、隱居の方からくる筈に間違はないといふことだ、ソリヤノ請合氣遣なしに、今

夜はしつかり樂みなせえ、（と彌次郎が背中を一ツくらはせて出てゆく、彌次郎門口をしめて）彌次「コレヤア寒くなつた、時に茶漬でもくはれえか」おつぼ「イ、エ、よろしうございます」彌次「そんならもう寢ようか」つぼ「お床を取りませう」彌次「オイ〳〵おれが出してやらう（と戸棚より破れ蒲團にかいまきなど取り出す所に表の戸をトン〳〵〳〵）彌次「エ、今頃にだれだ〳〵、（といひつゝも、さては今追ひ出した女房此事をかぎつけてや、ふりこんで來るならんか、但しはおやぶんいさくさをいひに來たか、何にもせよ見つけられては面倒なりと、今の女房に向ひ小聲にて）彌「コレ〳〵ひよんなことがある、此長屋の作法で、長屋のものが嫁をとると、長屋中のものが來て、共よめの尻をさすつて見るが定法、今そなたの來たことをどうして知つてやら、それでさすりに來をつたに違ひはない、そなたは懷妊のよし、同じくはまだ今宵は來ませぬといつて、見せたくれえが、どうであらう」つぼ「オヤ〳〵わたしはいやだのふ、殊にたゝの身では

なし、知らないお人に此臀を撫でさせる事はいただれえ　彌「そんなら何處そへ隱してえものだが、此通り二階はなし、オツト有るぞ〳〵、究屈ながらちつとの間此處へ〳〵、(と賣殘しのあき半びつあるを幸、蓋をあけて、かのおつぽを入れ、もとの如くふたしておき、やがて表のかけがれをはづし、戸をあくれば、案に相違して喜多八せきこんで飛び込めば)　彌「ヤア喜多八か、エ、今時分にどうして來た　喜多「イヤもう〳〵内に落着てゐられやせぬ、此間からおめえに頼んだ十五兩の金の事明日は店おろしにかゝるゆゑ、是非〳〵明日の朝迄わつちが遣ひ込んだ穴を埋めておかねばなりやせぬ、それが出來れえと、忽ち百日の説法屁一つ、おめえのいふには隨分心當りがあるとな、算段してやらうといひなさつたによつて、じつと待つてゐたが、今もつて沙汰がないから、あんまり氣遣さに、寢所からそつとぬけて來やしたが、いよ〳〵そのかれは出來やせうかれ　彌「知れたことよ、あしたの晝までにはきつと出かしてやる、そこへいつ

ちやア男だ、なんぼこんなにしみつたれな暮して居ても、さあといへば拾兩や拾五兩の目くされがれ、工面せうといつたがせうがにやア、ちげえはれえから落着て居さつし　喜多「そいつはありがてえ、其かはり百倍にして此恩を返しやす此間からいふ通り、番頭は亡なる、親方も今に目出度なりやすから、跡で後家御を手に入れさへすりや、すぐにわつちが旦那さま、どうか芝居の敵役が云ふ樣なこつたが、是ばつかりは遣なし、極々内々の所は、もう出來かゝつてゐやすから、今が大事の所、こゝで拾五兩の金がれえと、しくぢつて虻もとらず蜂もとらずだから、どうぞお頼み申しやす　彌「おれも手めえを思ふは身を思ふだから、其咄の通りにいきさへすると、互ひの爲だ、明日の晝時分には耳を揃へて拾五兩きつと間にあはせてやるぞ、(と此咄のうち、はんびつのふたを内よりおしあけて)つぢ「モシ〳〵どうぞして下さりませ、腹が痛くて、どうやら産さうになりました、ア、苦しい〳〵、(とむせうにうめき出せば、彌次郎大きにう

ろたへ）　彌「エ、そいつは困つたものだ、コレ／＼喜多八、手めえ子を産む女の手傳をした事はねえか　喜多「ナニとんだことを、イヤかみさんか、いつの間に孕んだのだ、さつぱり知らなんだ、隣のかみさんでも、起して來て頼むがいゝ　彌「イヤ／＼ちつと譯があつて、隣へも沙汰なしに、こつそりとやりてえ、マアそこへ湯でも沸してくれ　喜多「それは承知だが、なぜまたあんな究屈な所へかみさんを入れて置いたのだ、サア／＼出なせえ／＼、（とはんびつの中から女の手をひつぱりて、引き出さんとしけるに、おつぽ、喜多八を見て）つぽ「ヤアおまへか、嬉しや／＼、わしが産月を心元なさに、此處まで尋ねて來て下さりましたか（としがみつくに、喜多八びつくりした顔、彌次郎不審晴れず）彌「コリヤ喜多八手めえこの女とちかづきか　つぽ「ハイわたしは此喜多八さまのご家にお飯たきをいたしてをりましたもの、いやだといふを無理無體、喜多八さまに口説かれまして、ツイ逢ひましてかうした身になりました故、お暇をもら

ひ親許へ歸りましても、物堅い親、うちへは入れず、喜多八様のもらひ分にて、親の手前を引きとられ、餘所の内に預けられてをりましたが、此事親方さまの耳に入らぬうち、わたしに拾五兩の金をつけて外へ片付たいとの相談、わたしは迚も斯なるからは、いつ迄も離れぬ氣でゐましたけれど、それではあなたのお爲になるまいと得心づくで思ひ切り、心にそまぬこゝへ嫁入して來ましたのでござります、（と苦しい中に涙半分、彌細のはなし、彌次郎さもをつぶし）彌「ヤア／＼そんなら親方のうちの引負拾五兩なくては償はれぬといつたは、引負ではなくて、この女を片付代の十五兩か　喜多「さやう／＼　彌「エ、おきアがれ、このべらぼう野郎め、よくおれをとんだ目にあはせやアがつた　喜多「ナニとんだめにあふものか、金さへ借られえけれやア、いゝぢやアねえかえ　彌「いゝとは何のことだ、コレ其金ゆゑにおらア女房をさらけ出して了つて、今夜からひとりで寢にヤアなられえは　喜多「その代りまた若い女房を讓つたから申分は

あるめえ　彌次「たはことつくしやアがれ、あの女の面がふためとも見られるつらか、いめえましい野郎めだ、(と眞黑になつて腹を立て、一つ二ついひ募りて、彌次郎こらへず、喜多八にぶつてかゝる。喜多八もやつきとなつて、からかつてゐるうち、おつぼは、しきりにむしがかぶると見え、ウン〳〵うなつて苦しがるをもかまはず、こなたには、やみくもと摑み合うてゐるうち、夜あけてなかうどの芋七、商賣物の買出しに行くとて、こゝのうちへおとづれたるが、何やらうちには、ばつたくさ、音して、女のうめく聲も聞ゆるにぞ、いも七これはと外より戸を明けんとするにあかず、叩いてもあけざれば、やにはにそとより引ッはづして這入ると、彌次郎見るより)　彌「ヤアいも七か、よくもよくも此野郎めと馴合つておれをはめたな〳〵、合點しねえぞ、すまねえぞ〳〵　いも「ナニはめとは何の事だ　彌「なんの事だもすさまじい、太え奴等だ、(と又いも七にとつてかゝるを、いも七腹を立て、小力のあるにまかせ、彌次郎をねぢふ

せる、北八とりさへてもきかず、ごつたかへして、煙草盆を踏みくだくやら、土瓶の茶をぶちまけるやら、三人やみらみつちやに騷ぎたつるもの音に、近所隣の人々、おひ〳〵かけつけ、かれこれとりさへるうち、おつぼは、そこらをのた打まはり、苦みたるが、つひに血をあげて目をまはしたふれる)　喜多「ヤアヤ〳〵おつぼどうした〳〵、コレ芋來てくれ、可愛さうにどうかしたさうな　いも「コリヤ目をまはしたのだ、コレ〳〵水だ〳〵　喜多「おつぼヤアイ〳〵　隣主「おつぼ樣とはだれの事だ、モン爰のかみさまはえ　いも「コノ目をまはしたがかみさま　隣「ハア彌次さんおめえのおかみさまか　彌「アイわつちが女房のやうでもあり、又ないやうでもあり　隣「ハア聞えた喜多八さまのかみさまか　喜多「アイわつちの嚊のやうでもあり、又ないやうでもあり　隣「マアなんにしろ、どつちのだか知れないおかみさまヤアイ〳〵　いも「コリヤつめたくなつた、もういけねえ　喜多「エ、いぢらしいことをした、彌次さん醫者を呼びにやつて、くんなせえ

な　隣「わたしが元宅さんでも呼んで來てあげませうか　彌「その序にお寺へも行つてもらひてえな、（と此内醫者が來るやら灸をすゑるやら、よつたかつて、さま〳〵にして見れども、むざんやおつぼは顔の色かはり、さつぱり息は絶えたる樣子に、喜多八思はず泣きいだし）喜多「かわいや只の身ではなし、今の騒に血があがつたのだらう、しかたがれえ、時に彌次さん、おめえも腹が立つたらうが、どうぞ了簡して、この取始末をしてくんなせえな　彌「おれをばいろ〳〵な目にあはせる　喜多「なんぼ勘當同然にした女でも、斯なつては親の所へも知らせずばなるめえ、誰をやつたものだらう　いも「ソレヤアわしでもいつてやらうが、全體是はどう言ふ譯か、さつぱり分られえ、おらが新道の肴屋に預つてゐた女、餘所の隱居の妾だが、片付けたい世話してくれろと頼まれたから、こゝの内へ仲人したが、今聞けばおめえの女房とはどうした理窟だ　喜多「マア〳〵あとでわかる、其肴屋といふはおいらが親方の所の出入、預けておいたは

やつぱりおいら、マアそれよりか早く親の所へ知らせてえ、それもその肴屋まで知らせると、親の内へあそこから知らせてくれろ　いも「そんならいつて來やせう、（と、芋七は出て行く、近所の人々手傳ひて、そこら取片付け、めい〳〵悔みをのべ、挨拶して、皆々一先歸ると）喜多「なんにしろ、わつちは一寸いつて來よう、昨宵そつと出た儘だから、あとはいゝやうに頼みます、（と紙入から金二歩出して彌次郎に渡し、出かけんとする所へ、傍輩の與九八來り）與九「オヤ喜多八どの爰にか、親方がとう〳〵今朝がた御臨終なされた　喜多「さうだらうとも　與九「それに付いておかみ樣がおつしやるには、喜多八に暇をくれる、あれは平生心ざしのみだらなもの、旦那どのが死なれたら猶の事女の主と侮つて、どのやうな不埒をせまいものでもないから、早々請人の所へ引渡してやれとのこと、それはと傍からさま〳〵取做を云つて見たが、どうでも貴樣はかみ樣へなんぞいやらしい事でも云つたと見えるさうかして、日頃からいけすかれえ面の

皮の厚い男、顔を見るもいやだと、きさまの事をわるくいつて、七里結界いやだ〳〵と云つてござるから、しかたがれえ、モシ彌次郎兵衛さまは貴方か、只今お聞きの通りでござりますから、喜多八殿は是でお渡し申ます　彌「承知致しました、コレ喜多八、あの通りだが、それでいゝか　喜多「イヤもう善くても悪くてもしかたがれえ、しかしその筈ではれえつもりだに　彌「くれ〳〵もいめえましい業さらしな野郎めだ、いつその事何も角もぶちまけようか　喜多「アヽコレ〳〵謝つた、拜む〳〵　興九「また折を見て訴訟のしかたもあらう、なんにしろ今日は内が取込でゐるから、又そのうちに（挨拶とそこ〳〵にして與九八は出てゆくと、引ちがへて、いも七立かへり）いも「サア〳〵親元へは知らせて來たが、是から、買ものをせずばなるめえ　喜多「御苦勞〳〵、迚ものことにわつちと一しよに來てくんれえ、（と彌次郎にわたした二歩をとつて、いも七を引連れ、早桶そのほか入用の品をとゝのへて來ると）　彌「オヤ手前氣のきかれえ、序に酒も買

つて來ればいゝ　喜多「それをぬかるものか（と早桶の中から一升徳利に鮪のさしみを取出し、まづ飲みかけてゐる所へ、合長家の者もだん〳〵大ざかもりとなり、酒もあとから買ひ足して殘らず生酔となり、卷舌にて）いも「サア〳〵このけんきで元氣で佛を桶へさらけ込んでしまはう、時に寺は何處だ　彌「馬鹿アいへ、おいらが内に寺があつてたまるものか　喜多「そいつはつまられえ！彌「かまふことアれえ、何でも持出しさへすれやア、どこかしら寺があるだらう　喜多「それだとつて、葬禮をかついで寺町を呼ばはつてあるいたとつて、買手はあるめえ　いも「イヤそれも面白からう、わしは寺町へばかりあきなひにゆくが、呼やうが町とは違ひやす、マア今頃のしろものなら、死でいこ〳〵（新大根）ゆうれんさう（菠薐）艸）や、ばけぎ（分葱）や〳〵、卒都婆の干物に石塔のたちうりなぞはよく賣れるから、葬禮も買人がありませう、ハヽヽヽ　喜多「かわえそうに酒落所ぢやアれえ、サア〳〵はやく片付けてくんなせえ、（と生酔大勢寄つてたかつて、むだ

やら酒落やら、出ほうだいな事しやべりながら、佛を桶の中へ納めて、香華を手向ける所へ、おつぼのて〻おや、涙をふき〳〵たづれ來りて)「アイゆるさつしやりまし、わしやハアおつぼの親でござらア　喜多「是はようこそ、先こちらへ　親「ヤレ〳〵愛いことをしをりました、わしやサア田舍もんでござるから、義者ばつて、むけちなくぼい出しましたが、こんなになるべいたア、思ひをりませなんだ、ドレ〳〵娘はどこに居をります、ちよつくり面サア見せて呉れさしやりまし　彌「エ〻おめえ、もうちつと早く來なさればいゝに、モウ桶の中へさらけ込んで了つたものを、のう芋七　芋「イヤ併しとつさんの身では見たいは道理〳〵、どうりよ狐の子ぢやものをと、けつかる、ハ〻〻〻〻、さらばお開帳致さうか、(と棺桶の繩をとき蓋をあけて見すれば、おやぢ眼鏡をかけ、つく〴〵と見て　親「コリヤ、ハアちがつたアもし　彌「ナニちがつたア、何がちがひやした　親「佛がちがひ申した、此佛にやア首がござらない、そしてわしの娘は女でこ

ざるに、コリヤハア男の死人と見え申して胸毘がはえてござらア　芋「ナニ首がないとは、ドレ〳〵ほんにコリア首がれえ、彌次さんおめえどうした　彌「ナニおいらが知るものか、そこらにやア落ちてはれえかえ　親「ヤレハア此衆はとんだ人達だ、サアうらが娘はどうさつせえた、死んだのなんのと嘘ばつかし吐ツしやる、サア娘をこゝへ出しなさろ　彌「出せとつて外にやアれえ、途方もれえおやぢめだ　親「コリヤハアすまない〳〵　喜多「なる程とつさんのいふのは尤だ、何にしろ首が無くちやアつまられえ　親「インネ〳〵、田舍もんでこそあれ、うら頭百姓もしたもんだ、お家主どのへ斷つて、えずい目にあはせてくれべい、(とだん〳〵聲高になり、やかましくいふ故、そばに居あはせし人々、色々なだめても一向きゝいれず、大屋樣がこの樣子を委細にきいてかけつけ)　大や「扨〳〵今聞きましたが、大變な事でござる、何にいたせ、死んだものゝ首のないといふは、(と早桶の内を覗き見て)「イヤ〳〵親父どの氣遣ひさつしやるな、

首はあります　親「あるとは何處にあります　大や「コリヤ佛を逆さまに入れたのでござるハ、、、　親「ハアそれで落着ました、コリヤどなたも御太儀でござる（とこれより夜に入つてそうれいをなし、あとれんごろに弔ひけるが、さてしも喜多八は折角しんぼうせし親方の内を出されて、又彌次郎のかたに居候となり、互につまらぬ身の上にあきはて、いつその事まんなほしに、二人連れで出かけまいかとの相談をなし、友だちに頼みて金子を借りうけ、先づその年はめでたき春を迎へて、きさらぎのなかばより伊勢參宮とおもひたち、東海道へと出かけ〻る）。

かゝまだちの狂歌

難波江のよしあしくとも旅なればおもひたつ日を吉日とせん

道中膝栗毛發端　大尾

道中膝栗毛發端跋

春の日の長旅も、馬士唄の竹に雀色時の泊には、奇妙希代の滑稽を吐きて、衆人の頤に釣匙を掛けさせ、彼佐々木梶原が生唾磨墨より遙に勝り、千里の駿足も及ばざる膝栗毛と題せし、その發端の書を閲して、感稱の餘り跋文を與うて、智裏の傷れるほど、底を無性と拂きしに、原來三文の貯は偖おき、一文不智の僕なれば、諺にいふ蟷螂が斧、猿猴が月、されども犢尾蒼蠅の譬のごとく、此ひざくり毛の尻尾に執付き、唯意氣なりをひッかく事しかり。

小舶街　旭亭一桃

道中膝栗毛初編序

箱根八里の長持唄には、猛き宰領の心を和らげ、竹に雀の馬士唄には、鬼殺を爛せしむ。是その歌の徳利酒、呑めや謡の旅衣、都をさして行がけの駄賃帳を繰返し、筆の建場に雲鬢の、息杖をしてえいやらやつと、書編りたる東海道、五十三次の紀行に、無滑稽と方言の二割増、重荷に僻言夷曲歌、それが中にも唯一夜、鮓の飯盛押かけて、商ふ戀の箱枕、そのあらましを宿帳の帖となしたるは、空尻の殻無體なる、ほんの噺の問屋場もどき、ハイ頼みます〳〵と、この本の鹿島立に序する事しかり。

維時享和二歳壬戌孟陽吉旦

千返舍一九誌

東海道中

膝栗毛初編

富貴自在冥加あれとや、營みたてし門の松風、是に通ふ春の日の麗さ、げにや大道は髪のごとしと、毛筋程もゆるがぬ御代のためしには、鳥が鳴く吾妻錦繪に、鎧武者の美名を殘し、弓も木大刀も額にして、千早振神の廣前にをさまれる豐津國のいさをしは、堯舜の古へ、延喜の昔も、目前見る心地にな。いざや此とき國々の名山勝地をも巡見して、月代にぬる聖代の御德を藥罐頭の茶呑ばなしに貯へんものをと、玉くしげふたりの友だちいざなひつれて、山鳥の尾の長旅なれば、腮のあたりに打がへのかれをあたゝめ、花のお江戸を立ち出づるは、神田の八丁堀邊に獨ずみの、彌次郎兵衛といふのうらくもの、食客の喜多八もろとも、朽木草鞋の足もと輕く、千里宵の貯へは何貝となく、蛤のむきみしぼりに對の浴衣を、吹きおくる神風や伊勢參宮より足引の大和め

ぐりして、花の都に梅の涙速へと、心ざして出行くほどに、早くも高なはの町へ來かゝり、川柳點の前句集を思ひ出せば

高なはへ來て忘れたることばかり

とよみたれ共、我々は何一つ心がゝりのこともなく、獨身の氣散じは、鼠の店賃いだすも費と、身上殘らず風呂敷包となしたるも心やすし。去ながら且那寺の佛餉袋を和らかにつめたれば、外に百銅白腹を切つて往來の切手をもらひ、大屋へ古借を濟したかはり、御關所の手形を受取り、ふめるものは見たふし屋へさづけて金にかへ、がらたく物は店うけにしよはせて禮を受け、漬菜のおもしと、すみかき庖丁は隣へ殘し、ちぎれたれども繩すだれと油壺はむかふへ讓りて、何一つ取殘したるものもなく、まだも心がゝりは酒屋と米屋の拂ひをせず、だしぬけにしたれば、嘸や恨みん、氣の毒ながら、是もふるきうたに

きゝの世にかりたをなすか今かすかいづれむくいのありとおもへば

打わらひつゝ、彌次郎兵衛また狂詩を口ずさむ

雖レ非二亡命一可二奈何一　借金不レ報擽レ尻過
夫居本貫掛乞衆　將三是川向成二干戈一

打興じて、程なく品川へつく。彌次郎兵衛

海邊をばなどしな川といふやらん

と難じたる上の句に、喜多八とりあへず。

さればさみづのあるにまかせて

いと面白く歩行ともなしに、鈴が森に至り、彌次郎兵衛

恐ろしや罪ある人のくびだまにつけたる名なれ鈴がもりとは

大森といへるは麥藁細工の名物にて、家ごとに商ふ。

飯にたく麥藁細工買ひたまへこれは子どもをすかし屁のため

それより六郷の渉をこえて萬年屋にて支度せんと腰をかける　萬年やの女「お早う

ございやす　彌「二膳頼みます　喜多「コウ彌次さん、見なせえ、今の女の尻は去年までは柳で居たつけが、もう白になつたア、どうでも杵にこづかれると見えるそしてめんよふ、道中の茶屋では床の間にひからびた花を活けて置くの、あの懸物を見れえ、なんだ　彌「アレヤア鯉の瀧のぼりよ　喜多「おらア又鮒が素麺を食ふのかと思つた　彌「コウむだを云はずと、早く喰はつし、汁がさめらア　喜多「オヤいつの間に持つて來た、ドレ〳〵（と奈良茶をあり切り、さら〳〵としてやり）　彌次「もうおはちが零落した　喜多「又さきへいつて、うめえものをしてやらう（とそれより二人は錢を拂ひ、こゝをたちいで〻ゆくに、向ふよりお大名の行列、さきばらひの男、一人は六十位のおやぢ、一人は十四五の奴、いづれも宿の人足なり）　先拂「したアに〳〵、かぶりものを取りませうぞ　喜多「かけおちものは下座をしれえでもいゝと見える　彌「なぜ　喜多「ハテかぶりものは通りませうぞといふは　先拂「馬士、馬の口を取りませうぞ　喜多「馬の口も取りはづし

ができるかのハ、、、、　先拂「あとの人せいが高いぞ　彌「おいらがことか、高い筈だ、愛宕の坂で九文龍とかたをならべた男だ　喜多「しやれなさんな、とんだめにあはうぜ　彌次「アレ見やれ、どれもいゝ奴だ、まきばしよりで、豪勢に尻が並んだは、何の事はれえ葭町新道の土用干といふもんだ　喜多「オヤ〳〵弓をかついでゐる人の笠を見れえ、頭と延引してゐるぜエ　彌次「そしてアノ羽織の長さは、暖簾から金玉がのぞいてゐる　喜多「殿様はいゝ男だ、さぞ女中衆がこすりつけるだらう　彌「べらぼうめ、色々なことに世話をやくは、あなた方だとつて、やたらそんなことをしてつまるものかえ　喜多「ナゼ、それだとても、お道具を見れえ、アノ通りに立ちづめだは、ハ、、、、サアお駕が通つたらいかう（とたつて過行ると、宿づれに）　馬方「親方かへりだから、乘つてくんなさい　彌「安くば乘るべえ　馬方「さか手でいかう、じば（二百）で乘つてくんないと、（馬の値段も相談が出來て、彌次郎も喜多八もこゝより馬に乘ると、二匹ならべて曳き

いだし、鈴の音しやん〳〵〳〵、馬ヒン〳〵〳〵　むかふよりくる馬かた「へエ寄生め早いな　あちらの馬かた「くそをくらへ　さきの馬かた「うぬ尻でもしやぶれ、（とこれがこのてあひの挨拶、互にあくたいをいつて義理をのべ別れる、彌次郎をのせたる馬かた「コレ伊賀よ、きのふ手めえと飲んでゐた野郎は、アリヤ上の宿の房州だな、（このてやひ常に名をいはずに皆國所の名をよぶ、喜多八をのせたる馬かた大道にひよぐりながら）「せんどのばんげにな、アノ房州めがかゝあがな、うら（我）が親かたの脊戸口にばりをこいてゐたと思へ、あに（何）がシヤア〳〵といふ音をきくと、うらも氣がわるく成たもんだで、こいつなアかまふこたなえ、ぶつちめてやらうと思つて、打くらつた元氣で、いきなりにうぢよ（腕）ヲれぢやアげ（捻上）て、そこへぶつたふしたとおもへ、さうするとかゝあめがきもをつぶしやアがつて、コリヤアあに（何）ヲするとぬかしやアがつたから、エヽあによヲするも犬の糞もいるもんかえ、擲てしめるのだ、だまつてけつかれとい

ふと、あにがアノづうたえ（骸）たから、ひどえ力のある女よ、コノ野郎みやアと、おりよヲつゝこかしやアがつたんで、エヽどうしやアがると、横ッ面ア一つぶんなぐつて甌の壁へおつ倒して、のつかゝつたと思へ、（まだ小言を吐しやアがるから、うらが親方の子にやらうと思つて、もちよヲ買つて來がけだから、そのもちよヲ二ッ三ッかゝあめが口へねぢ込んだら、むちやくちやくらやアがるから其内にぶつちめた、さうすると最つとくれろといやアがつたんで、うらもそこらア探廻して馬の糞たア知らずに、あいつが口へ押込んだら、むによ（胸）ヲ悪がつて、はらア立ちやアがるまいか、うらもあんまり可愛さうだんで、とうゝゝ燒杉の下駄ア一つおつたふれたはな、いまくしい、（此はなしに二人も大きに興を催し、はや神奈川のぼうはなへ着く）夫より二人とも馬を下りて辿り行くほどに、金川の臺に來る。爰は片側に茶店軒を並べいづれも座敷二階造　欄干附きの廊下　棧　などわたして、浪打際　景色　いたつてよし　茶やの女か

どにたちて「お休みなさいやアせ、あつたかな冷飯もございやアす、煮たての肴のさめたのもございやアす、蕎麥の太いのもあがりやアせ、溫飩のおツきなのもございやアす、お休みなさいやアせ、(二人はこゝにて一はい氣をつけんと茶屋へはいりながら) 彌「喜多八見さつし、美しいたへもんだ 喜多「ハ、アいかさまいゝ娘だ、時に何がある、(と喜多八そこらを見廻し、肴が指圖して酒をいひつげる、娘前だれで手をふき〳〵、しほやきの鰺をあたゝめ銚子盃をもち出) 娘「これはお待遠さまでございやした 彌次「おめえの燒いた鰺なら甘からう、(と、娘フ、ンとわらひながら、表の方を向いてよびながらゆく 娘「お休なさいやアせ、奥がひろうございやす 喜多「奥が廣い筈だ、安房上總まで續いてゐる 彌次「喜多八見さつし、此肴はちとござつた目もとだ、(と打かへし見て)

ござつたと見ゆる目もとのおさかなはさては娘が燒きくさつたか

喜多八是をきゝて同じくこじつけ、

味さうに見ゆる娘に油斷すなきやつが燒いたるあぢのわるさに

彼是と興じて爰を立出で、いろ〳〵道草を喰ふ驛路の氣さんじは、高聲には なしものしてたどり行くほどに、此宿外れより十二三才許の伊勢參り、後になり先になりて 伊「旦那樣壹文くれさい 彌次「やらうとも、てめえ何處だ 伊「わしらア奥州 喜多「おうしうは何處だ 伊「かさに書いてあり申す 彌次「奥州信夫郡幡山村長松、ム、、はた山か、おいらも手めえたちの方に居たもんだ、はた山の興次郎兵衛どのは達者でゐるか 伊「興次郎兵衛といふ人さア知り申さない、興太郎どんなら、わしらが隣さアにあり申す 彌次「オ、その興太郎よ、其又うちにのん太郎といふ年寄の爺樣がある筈だ 伊「ちゞいはあり申す 彌次「そして興太郎殿のかみさまはたしか女だつけ 伊「おかつさまア女でござり申す、能く知つてゐめさる 彌次「今ちやア何といふか知られえが、おいらが居た時分は名主どのは熊野傑三郎といつてな、そのかみさまが内に飼つておいた馬と色

事をして逃げたつけが、どうした知らん　いせ「それよさア、よく知つてゐめさる、庄屋どんのおかつさまア、内の馬右衛門といふ男とつツばしり申した　きた「イヤ妙々　彌次「コリヤ小僧よ、なぜ後へさがる、草臥れたか　いせ「わしは空腹てなり申さない　彌次「餅でも買つてやらう、來い〳〵、（と五文餅五つ六つ買つて遣りながらいよ〳〵圖に乘り　彌次「なんと小僧よく知つてゐるだらう　いせ「アイ〳〵、（と餅をしてやる、この内連れの伊勢參り、これも十四五の前髪、あとから呼びかける「オヽイ〳〵長松ヤイ〳〵　やつとのいせ參「きさいの〳〵　いれ「うぬしやア、もちよ（餅）ヲおれにもくれさい　いせ「先へ行く人に買つてもらへ、あん（何）でもあの衆が國さアの咄をするを、オイ〳〵と云つてゐると、直に買つてくんなさるはちやア　つれのいせ「オイうらも買つてもらふべい、（とかけだして彌次郎に追付き）わしにも、もちよヲ買つてくれさい　彌次「てめえはどこだ（と、かさのかきつけを見て）ハヽア是も奥州下坂井村、コレ手めえの村に與

茂作といふ親仁があらう　いせ「先づもちよヲ買つてくれさい、さうせないけれやア、こんたのいふことがあたり申さない　彌「おきやアがれハヽ、ハヽ、ハヽ、喜多「こいつはかつがれた、ハヽ、と打笑ひてゆく程に、はや程ケ谷の驛に着く。兩側より旅雀の囮に出しておく留女の顔は、さながら面をかぶりたるごとく眞白に塗りたて、いづれも井の字がすりの紺の前垂をゞたるは、扨こそ古へ爰は帷子の宿といひたる所となん聞えし。旅人をのせたる馬士怠けたる聲にて　馬士「ふじの人穴、馬でも這入る、なぜにお方にや穴がない、ドウ〳〵　とめ女「馬士どんおとまりかな　馬士「イヤ旦那は武藏屋だが、お前の顔を見たら、ソレ此畜生めがとまりたがらア、ソレ〳〵　馬「ヒヽヒン〳〵、（と行過ぎると、またあとより旅人二三人）　とめ女「もしおとまりかえ、（と引とらへて引ばる）　旅人「コレ手がもげらア　とめ女「手はもげてもようございます、おとまりなさいませ　たび人「ばかアいへ、手がなくちやアおまんまが食はれねえ　とめ女「おめしの

あがられれえ方がおとめ申しちやアぬか、と（やう〳〵にふり切つて行くと、又あとより來るは旅僧）　とめ女「おとまりかえ、（旅僧此女の顔を見て）イヤもちつと先へ參らう、（とこの跡より來るは田舍道者）　とめ女「おとまりなさいませ　田舍「はたごさアは安かア、とまりますべえ　とめ女「おはたごは二百ヅヽ、　田舍「イヤ〳〵さうは出し申さない、そんだい湯はぬるくてもよくござる、平はついぞかへて食つたことアござらないが、飯と汁はたつた六七杯ヅヽも喰やアそれでよくござるは、そんだいにや、あしたの晝食はこの柳行李に一ばい詰めてもらへば、もう外になんにも入り申さない、はたごは百十六文ヅヽも出し申さう　とめ女「そんなら外へお泊りなさいませさ　田舍「ハアとめざアいきますべい（とゆき過ぎる）、彌次郎兵衛喜多八此體を見て始終興に入り、彌次又こぢつけるうた、

おとまりはよい程谷ととめ女戸塚前てははなさゞりけり

と打わらひ過ぎ行くほどに、品野坂といふところにいたる。是なん武州相州の境なりと聞けば、

玉くしげふたつにわかる國境所かはればしなの坂より

既にはや日も西の山の端に近づきければ、戸塚の驛になんとまるべしといそぎ行く道すがら　彌「コレ喜多や待たッせえ、咄しがあらア、なんでも道中は飯盛をすゝめてうるせえから、こゝに一つ謀がある、おいらは親仁なり、ぬしやア廿代といふもんだから、親子といつてもいゝ位だによつて、是から泊り〳〵では何と親子の分にしようぢやアれえか　喜多「オヽこれは妙だ、成程それぢやア、すすめれえていゝ、そんならおとつさんといふのか　彌「さうさ、貴樣は諸事を息子氣取りだが承知の助か　喜多「よしよし、さういつて又いいたぼでもあつたら、此むすこをだし抜くめえよ　彌「エヽばかアいはつし、オヤもう戸塚だ、從屋にしようか　喜多「とつさんや　彌「なんだ　喜多「ここぢやアれつからお泊な

せえと云つて引ッ張られえの　彌「ほんにその筈だ、癸はどなたかおとまりと見えて、みな宿屋に札が張つてある　喜多「コウ、むかふの内がいきだぜ　彌「コレあれさん、泊めてくれる氣はなしか　はたごや女「イエ今晩はおとまりで合宿はなりませぬ　彌「なむ三さうだらう、(とだんだん宿を探せども、皆ふさがりてとめぬ故、大きに困りまごつきあるき)、

とめざるは宿を疝氣としられたり大きんたまの名ある戸塚に

それより宿外れに至るに、漸く旅籠屋の合宿なきていに見ゆるあれば、やがてここにたよりて　彌「なんとわしらを泊めてくんなせえ　亭主「お二人かえ、おとまりなされませ、當宿は宿屋は皆塞がりましたが、私かたばかりあたりませぬ　彌「こんなにきれいな内をなぜあてれえの　亭主「私かたは新宅でござりまず、ソレおなべお湯はどうだ、(と此内女盥に湯を汲んできたり、柳行李風呂敷包を座敷に運ぶ)　喜多「コウ彌次さんぢやれえ、とつさん、おめえ草鞋もいつし

よにしておかう　彌「オ、そしておれが脚半もざつといすいておきや　喜多「ナニ脚半をいすげか、(と顔を見ると、彌次郎兵衛目つきで知せる故口ごゝとを云ひながら、脚半を洗ひしまひ)　喜多「あれさん、茶を一つづつくんな、(と下座しきへ通る、女盆に茶を二つもつて來り)　女「すぐにお湯におめしなさいやせ　彌「コウあの女の頬ア見たか、眞中が凹んで、何のことはれえ、ふみけえしの馬蹄石といふもんだ　喜多「それやアさうと彌次さん　彌「それ女が來たは　喜多「オツト、とつさん湯へ這入られえか　(と、此内女盃を持つてくる)　彌「カヤ酒か、江戸ものと見ると、どこでもかうするにはあやまる　喜多「ナゼ、酒を出しやア別に錢をとるか　彌「知れた事よ、(と云ひながら、手拭を取り湯へは入る、女すゝりぶたと銚子をもち出で　女「お一つめしあがりませ　喜多「是は御馳走だ、コウおいらが親父に早くあがらつせえと云つてくんな　女「ハイさやう申しませう、(と立つてゆく、此内彌次郎兵衛湯よりあがりて)　彌「ハヽアなんだ、これやア飲める

は、コレ手めえ早く湯に入つて來や　喜多「イヤ飲んでからいかう　甲「エ、てめえもいちのきたれえもんだ、這入つてきやな、(此内喜多八も湯へは入る)　亭主「是は何もござりませぬが、一つめしあがりませ　弼「イヤ御亭主さん、これでは迷惑だ　亭主「イエ時にかやうでござります、私かたは今迄外商賣をいたして居りましたが、今度旅籠屋になりまして、すなはち今日が店開でござります、あなた方は初めてのお客故、それで祝つて一つさし上げますのでございますから、別に御酒代を頂くのではござりませぬ、お心おきなくめしあがつて下さりませ　弼「イヤ夫は先おめでたい、併し御馳走になつては近頃氣の毒だ　亭主「ナニサ御遠慮なう、今にお吸物もできます　弼次「イヤもうおかまひなさるな　亭主「ハイ御ゆるりと、(といひすてて立つて行く喜多八風呂より出て)　喜多「樣子は殘らずあれにて聞いた、おやかた只とはありがてえ　弼「コレ酒落れずともう一べん湯へ這入つて來や、その内に皆おれが飲んでしまはア　喜多「さうだらうと

思つて湯へは入つてゐても、洗ふそらアれえ、オヤ足はまだ土だらけだ、まよ、サアはじめれえ　弼「もうとつくに始めてゐらア、ドレもう一つ始め直してからさいう　喜多「イヤおいらはこれだ、(と茶碗についで、いきなしにぐつ〳〵とやらかし)　喜多「アヽいヽ酒だ、時に肴は、ハヽア蒲鉾も白板だ、さめぢやアあんめえ、漬生薑に車海老、町暮ぢやアれえ、コウとつさん、此紫蘇の實がいつち美味え、おめえは是ばつかり食ひなせえ　弼次「ばかアいへ、それやア、後へ殘るにきまつたもんだ、時にもう吸物が出さうなものだ　喜多「待ちなよ、(と襖の間から勝手のかたをのぞき)　喜多「出る〳〵、今よそつてゐらア、オヤなむさん、神さまへあげるのだ、イヤア來るぞ〳〵、(と膝を直してゐると、やがて女吸物をもつて出て)　女「お銚子をかへませう、(と持つてゆく、二人ながらすぐに吸もののふたを取つて)　喜多「オヤ赤味噌たアしやれるは、よもや玉味噌ぢやアあんめえ、時に銚子はどうだ　弼「せはしれえ、たつた今持つていつたは　喜多「もう

來さうな物だ（と、此内女がてうしを持つてくると、二人ながらなる口故、あいのおさへのと飲みかけ、だん〳〵酒がまはつて、親子の挨拶も、なんだかむちやくちやと成）喜多「コウあれさん、ちッとあいをしてくんな　女「私は一向たべませぬ　喜多「はてさ、コレさう言はずと、そして今夜おめえとちよつとナ、これがかための盃だ、ノウとつさん　彌次「せがれめはもう酔つたさうな　喜多「ナニ酔つたもきがつええ、アノ親仁のつらはよ、ハヽヽヽ（と捲舌にてしやれる女はきもをつぶしながら、うけた盃をほして彌次郎兵衛かたへさす）喜多「エヽおやぢの斉生め、おもひざしにあづかつたな、コウ女中、後に頼みます、（としなだれかかる。女はあきれてさう〳〵逃げだして行く）　彌「コウきさまアわりい男だ、女の前であんなことをいふなえ　喜多「ナゼ云つちやアわりいか、悪かアいふめえ、おらア、アノたへもんめがをかしな目付をするので、もう親子の縁が切り度なつた、（と此内に膳も出て、色々あれども餘り事長ければここに略す。な

ま中親子の挨拶にて、はたごやの女まことおもひ、何をいつても取りあげれば、今更獨寢の枕さみしく打臥しけるが、夜も更けゆくままに勝手も靜まり、やまの神の小言いふ聲のみ聞えて、此二人寢もやらず、着たる夜着のあかつきかけて千手觀音の利生あらたに痒き所へ、ふすま漏る風の手の届くもうるさく、ほろ酔の酒もさめて、今思ひ廻らせば、獨寢におはちの廻らざるも、めしもりの杓子あたり悪き故にや、假の親子の遠慮ありしは、かへつて烏目の德つきたりとをかしくて、

一筋に親子とおもふ女よりたゞ二すぢの錢まうけせり

斯口ずさみて打笑ひつつかたむけし箱枕も耳の根にいたくも響く夜明の鐘、はや表には助郷馬の嘶く聲「ヒイン〳〵　馬の屁のおと「プウ〳〵〳〵　長持人足のうた人「竹にさあ引　雀はアなアんあへ、オイ〳〵、どうする〳〵、（此内彌次も喜多もおき出れば、やがて膳も出て、ここにもいろ〳〵あれども、あまりくだ〳〵

しければ略す。それより二人はそこ〳〵に支度してここを立出ると、むかふよりつゞいてくるお大名の長持引もきらず）人「はこれさア 引八里イはアなあんあへアッ〳〵どうだか〳〵 喜「彌次さん見れえ、おもさうなものをよくかつぐぜ、アノ尻をふるざまア 彌「あのてやひが尻を振りまはすのを見たら、チトふさいで來た 喜「なぜ〳〵 彌「死だ女房がことを思ひだして 喜「おきやアがれ、ハヽ、ヽ（と、此内むかふよりちよんがれ坊主破れた扇にて手を叩きながら）ぼうず「ヒヤア御はんじやうの旦那がた、壹文やつて下しやいませ 彌「つくな〳〵 ぼうず「とこ〳〵〳〵ふいとこな 喜「コレつくなといふに、錢はねえは ぼうず「ナニないことがござりやしよ、道中なさるお方には無くて叶はぬぜにと金、まだも杖笠錢桐油、なんぼしまつな旦那でも、足一本ではあるかれぬ、其上田町の反魂丹、コリヤさつて屋のしらみ紐、越中ふどしの懸けがへも、なくてはならぬその代り、古いやつは手拭におつかひなさるがお德用 彌「エヽやかましい、ソレやら

う（と、はやみちより一文ほほりだす）ぼうず「コリヤ四文錢とは有難い 彌「ヤ四文ぜにか、なむ三ぼう、三文つりをよこせぼうず「ハヽヽヽ 彌「いめえましい（と、此内はや藤澤につきければ、まづ棒ばなのあやしげなる茶屋に休み）喜「婆さん、團子はつめてえか、チトあつためてくんな 茶やのばゞ「ドレ燒直してしんぜますべえ（と、けし炭の火をかきさがし、灰のたつをもかまはず、あふぎたてる。此うち二人はほこりをはたき〳〵、煙草のみゐると、六十位の合羽を着て、風呂敷しよつたるおやぢ、此店先にたちどまりて）親仁「モシちつとものを問ひますべえ、江の島へはどういきます 彌「おめえ江の島へいきなさるか、そんならこりよヲ眞直にいつての、遊行さまのお寺の前に橋があるから 喜「ほんに橋といやア、たしかその橋の向ふだつけ、いきな女房のある茶屋があつたつけ 彌「ソレ〳〵去年おらが山へ行つた時とまつた内だ、アノかかしは江戸ものよ 喜「道理で氣がきいてゐらア 親仁「モシ〳〵其橋からどう行きます 彌「その橋の向ふに鳥

居があるから、そこをまつすぐに　喜「曲ると田甫へおつこちやすよ　彌「エヽ、手めえだまつていろえ、ソノ道をずつと行くと、村はづれに茶屋が二軒有るところがある　喜「ほんにそれよ、よく腐つた物をくはせる茶屋だ　彌「それやア手めえのいふのは右側だらう、左側の内はいヽはな、去年おらが行つた時、ぴちぴちする鯛の焼もの、それに大平の海老の跳れ出るやつに、玉子と姑慈と大椎茸に、そして　親仁「モシ〳〵わしはそんな物は食はずとようござる、そこから又どう行ます　彌「其處をずつと行當ると石の地藏様がありやす　喜「アノ地藏様は瘡の願がきくさうだ、おらが方のへたなすがあれでなほつた　彌「ほんに瘡といやア、新道の金箔屋のたぬ吉めは、草津へいつたつけが、どうした知らん　喜「あれは大福町に世帶をもつてゐらア　彌「大ふく町といふはどこだ　喜「大ふく町はおいらが通りを眞直に當座町へ出て、判取町から店賃町を通つて、地代屋敷の算盤橋を渡ると、そこが大福町だ　親仁「そんなことよりやア江の島へ行く道を教

へてくんない　彌「ほんにさうだつけ、その地藏さまから大福町をまつすぐにいくとの　親仁「江の島へいくにもそんな町がござるか　彌「イヤ〳〵これやア江戸の町だつけ　親仁「エヽこの衆はお江戸の事は聞き申さない、らつちもない衆だ、ドレ先へいつて聞きますべいと、（ぶつ〳〵こごとを云ひながらゆきすぎる）　喜「ハヽヽヽ（此内あるじの婆、團子を四五くし盆にのせてもつて出る）　彌「こいつは黑い團子だ、（といひながら一くし取あげてみれば、けしずみの火が團子にくつついてゐる故、わざと火のついてゐるをかくして、喜多八の方へさし出して）　彌「コレ手めえ焦げたやつがよからう　喜「ドレ〳〵（と口もとへあてがひ）アヽヽヽヽ、ばあさん、アツヽヽヽ、とんだ目にあはせた、コレ團子に火がくつついて、アアびり〳〵する　彌「ハヽヽヽ、手めえあつたかなのがよからうと思つて、火のついて居たのをやつたは　喜「エヽいめえましい、ペツ〳〵　彌「サアいかう、婆さんおせわ（と、ちや代をおき、ここを出て藤澤の宿へはいると、

兩側の茶屋口をそろへて）茶や女「お休みなさいやアし、酔ない酒もござりやアす、ばり〳〵する强飯なあがりやアし　馬かた「旦那、生きた馬はどうだ、やすくやりませう、馬は達者だ、はれる事はうけ合だ　かごかき「かごよしかの、旦那戻り駕だ、やすくいきませう　客「かごはいくらだ　かごかき「三百五十　客「たかい〳〵、百五十ならおれがかついでいかア　かご「百五十にまけますべい　客「まけるかドレ〳〵此草鞋をそけ（其處）へつけて下せえ　かご「おめえ乘るのかえ、百五十でかつぐといはツしやつたぢやアないか、そんだんで片棒わしがかついで百五十とるのだ　客「ハ、、、こいつはいい、エイ、そんなら二百か　かご「やすいがいきますべい、ナア棒組、サアめしませ（と、かごのれが出來、彌次郎兵衛ここよりかごにのつて出かける）　先ぼう「棒組や、旦那はかたいぜ　あとぼう「しつかりかまへていさしやるもんだんで（と、此内茶やの亭主かごかきの名を呼びながら）亭主「オオイ〳〵梅澤の佐渡屋へちよつくりさう云つてくんさい、此中の新酒はあん

まり水の変やうが少ない、今度から酒をちつと変てよこして、くんさいと云つてくんさいヨ、ソレ何か落ちたア　かご「アイ〳〵（とかつぎいだす）客「コウ、貴様たちやア藤澤か、アノ宿も大分きれいになつたの、問屋の太郎左衛門どのは達者かの　さきぼう「よく旦那は知つてござる、隨分達者でゐられます　客「孫七どのはまだ勤めてゐるかの　さき「アイサア、旦那はなんでも明るいもんだ　あと「べらぼうめ、知つてゐやる筈だ、駕の内で道中記を見ていさつしやるは、ハ、、、（と、此内早くも馬入のわたしにつく。北八ここは何といふ川と人に問ひしに、たゞわたしばとばかりこたへけるを彌次郎聞きて）、

川の名を問へばわたしとばかりにて入が馬入の人の挨拶

此川は甲斐の猿橋より流れ落つる山、やがてむかふにわたり辿り行く程に、此處に白旗村といへるはその昔義經の首こゝに飛び來りたるを祝ひこめて、白はたの宮といへる、今にありと聞きて、彌次郎兵衛

首ばかりとんだはなしの殘りけりほんの事かはしらはたの宮

それより大磯にいたり虎が石を見て喜多八よむ、

此さとの虎は蹴にも剛のものおもしの石となりし貞節

彌次郎兵衛とりあへず、

さりながら石になるとは無分別ひとつ蓮のうへにや乘られぬ

斯く打興じて大磯のまちを打過ぎ、鳴立澤にいたり、文覺上人が刀作と聞えし西行の像にむかひて、

われ〳〵も天窓を破りて歌よまん刀づくりなる御影をがみて

春の日の長欠びに願の掛金もはづるゝばかり、目をすりながら　喜「アヽ退屈した、ナント彌次さん道々謎を懸よう、おめえ解くか　彌「よからう、懸けやれ　喜「外は白壁、中はとん〳〵、ナアニ　彌「べらぼうめ、そんな古いことより おれが懸けようか、コレてめえとおれと連れだつて行くとかけて、サア何と解く　喜「ソレヤア知れたこと、伊勢へ參るととく　彌「馬鹿め、これを馬二ひきと解く　喜「なぜ　彌「どう〳〵だから　喜「ハヽヽそんならおいら二人が國所ナアニ　彌「神田の八丁堀、家主與次郎兵衛店と解くか　喜「エヽおぶしやれなんな是を家が二疋、犬子が十疋と解く　彌「そのこゝろは　喜「ぶた二ながらきやん十もの　彌「おきやアがれ、コレ今度はむづかしいやつを云はう、その代り手めえ解かれえと酒を買はせるがいいか　喜「解いたらおめえ買ふか　彌「知れた事よ、彌「こいつアおもくろい　彌「ちと長いぜ、マアかうだ、おいら二人が、國所とかけて、是を家が二ひき犬ころが十匹と解く、その心は、ぶた二ながらきやんとをもの、サアこれなアに　喜「ハヽヽそんな謎があるものか　彌「べらぼうめ、あれやアこそかけるは、解いて見ろえ　喜「どうしてそれが知れるものだ、彌「知れざア云つてきかせよう、これを色男が自分の帶をとつて、女にも帶をとらせると解く　喜「こうぎにむづかしい、その心は　彌「ハテ解いた上で又解かせ

るから、なんと奇妙か、サア〳〵酒を買へ〳〵　喜「待ちなよ、意趣げえしをやらかさう、おれがのもちつくり長い、マアかいつまんだ所がかうだ、おいらふたりが國所とかけて、是を家が二匹犬ころが十匹と解く、その心は、ぶた二ながらきやんとをもの、これを又色男が自分の帶をとつて、女にも帶を取らせると解く、又其心は解いた上で又解かせるから、サア是ナアニ　彌「ハヽヽヽ、とほうもねえ長い謎だぞ　喜「どうだ彌次さん知れめえがの、これを衣桁のふんどしと解きやす　彌「そのこゝろはどうだ　喜「といてはかけ〳〵　二人「ハヽヽヽ（打笑ひつゝ歩むともなし、いつの間にか曾我の中むら、小八はた八まんの宮を打過ぎ、酒匂川にさしかゝりければ）、

われ〳〵はふたり川越ふたりにて酒匂のかはにメてようたり

（此川を越えゆけば、小田原のやど引はやくも道に待受けて）やど引「あなた方はお泊りでございますか　彌「きさま、小田原か、おいらア小清水か白子屋にとまるつもりだ　やど引「今晩は兩家ともお泊りがございますから、どうぞ私かたへお泊り下さりませ　彌「きさまの所はきれいか　やど「さやうでございます、此間建て直しました新宅でございます　彌「さしきは幾間ある　やど「ハイ十畳と八畳と、店が六畳でございます　彌「すいふろはいくつある　やど「お上と下と二ツヅヽ四ツございます　彌「女はいくたりある　やど「三人ございます　彌「きりやうは　やど「随分美しうございます　彌「きさま御亭主か　やど「さやうでございます　彌「かみさまはありやすか　やど「ございます　彌「宗旨はなんだの　やど「淨土宗　彌「寺は近所かやど「イエ遠方でございます　彌「葬禮はなん時だ　喜「コウ彌次さん、おめえもとんだことを云ふもんだ　彌「ハヽヽヽ、ツイ口がすべつた、ハヽヽヽ（とだん〳〵打つれて、ほどなく小田原のしゆくへ這入ると、兩側のとめ女）女「おとまりなさいませ〳〵（と、よびたつる聲かしましく彌次郎しばらく考へ）

梅漬の名物とてやとめ女くちをすくして旅人をよぶ

（此しゆくの名物ういろう店近くなりて）喜「オヤこゝの内は屋根にでえぶ（大分）でくま、ひくま（凸凹）のある内だ 彌「これは名物のういろうだ 喜「ひとつ買つて見よう甘えかの 彌「うめえだんか、願が落ちらア 喜「オヤ餅かと思つたら藥みせだな 彌「ハヽヽヽ、かうもあらうか。

ういろうを餅かとうまくだまされてこは藥ぢやと苦い顏する

（やがて宿屋へつきければ、亭主さきへかけだして這入りながら）亭「サアおとまりだよ、おさん〳〵お湯をとつてあげろ やどの女ぼう「お早うございます（と茶を二つ酌んで持つて來る、此内下女盥に湯を入れて持つて來ると、彌次郎女の顏を横目にちらと見て、小聲に喜多をよびかけ）彌「見さつし、まんざらでもれえの 喜「あつい今宵ぶつてしめよう 彌「ふてえことをぬかせ、おれが〆るは 喜「ソレおめえ、草鞋も解かずに足を洗ふか 彌「オヤほんに、ハヽヽヽ 喜「エヽでえなじに湯を眞ッ黑にした（と、こゞとをいひながら、脚を洗ひ、すぐに座敷へ

通ると、女、柳行李さんど笠をもちきたり、床の間に置く）喜「コレ〳〵女中、煙草盆に火を入れて來てくんな 彌「オヤてめえもとんだことをいふもんだ 喜「なぜ〳〵 彌「煙草盆へ火をいれたら、焦げてしまはア、たばこ盆の中にある火入のうちへ火を入れて來いといふもんだ 喜「エヽ、おめえも詞とがめをするもんだ、夫ぢやア日の短い時にやア、煙草をのまずに居にやアなられえ 彌「ときに腹がきた山だ、今飯をたく樣子だ、埒のあかれえ 喜「コレ彌次さん、おいらよりやアおめえ文盲なもんだ 彌「なぜ 喜「飯をたいたら粥になつてしまふはな、米を焚くといへばいゝに 彌「ばかアぬかせ、ハヽヽヽ（と、此内女煙草盆を持つて來る）喜「モシあれさん、湯がわいたらへえ（這入）りやせう 彌「ソリヤ人のことをいふ、うぬがなんにも知られえな、湯がわいたら、あつくて這入られるものか、それも水が湯にわいたら、へえりやしようとぬかしをれ（此内又やどの女）「モシお湯が沸きました、お召しなさいませ 彌「オイ水がわいたか、ドレ

這入りやせう（と、すぐに手拭をさげ、風呂場へ行きて見るに、この旅籠屋の亭主かみがた者と見えて、すいふろ桶は上がたにはやる五右衛門風呂といふふろなり。土を以て竈を築きたて、其上へ餅屋のどら焼か焼く如きの、薄ッぺらなる鍋を懸けて、それにすい風呂桶をかけ、周圍を湯の漏らぬやうに漆喰を以て塗り堅めたる風呂なり。これ故湯を沸すに薪多分に入らず、利益第一のすい風呂なり。草津大津あたりより皆此風呂なり。總て此風呂には蓋といふものなく、底板上に浮きて居る故、蓋の代りにもなりて、早く湯の沸くりかたなり。湯に入る時は底を沈めて這入る。彌次郎このふろの勝手を知られば、底の浮いてゐるを蓋と心得、何心なくとつてあけ、すつと片あしをふんごんだところが、かまが直にある故、大きにあしを火傷して、きもをつぶし　彌「アッ、、、、こいつはとんだすいふろだ（と、いろ〳〵考へ、これはどうしてはいるのだと、聞くもばか〳〵しく、そとで洗ひながら、そこらを見れば、雪隱のそばに下駄がある

故こいつ面黑いと、かの下駄をはきて湯の中へはいり、洗つてゐると、喜多八待ちかねて湯殿をのぞき見れば、ゆう〳〵と　じやうるり「おはん涙の露ちりほども　喜「エ、あきれらア、道理で長湯だと思つた、い〳〵加減にあがられえか　彌「コレちよつとおれが手をいぢつて見てくれろ　喜「なぜに　彌「もうぶだつたか知らん　喜「いゝきぜんな（と、座敷へ這入る。此内彌次郎湯からあがり、かの下駄を片蔭へ隱し、そ知らぬ顔にて）彌「サアへえられえか　喜「オットしめた（と、そうそう裸になり、一目散にすいふろへ片足つゝこみ）喜「アッ、、、、彌次さん〳〵大變だ、一寸來てくんな　彌「そうぞうしい、なんだ　喜「コレおめえこの風呂へはどうして這入つた　彌「馬鹿め、すいふろへ這入るに別に這入りやうが有るものか、先そとで金玉をよく洗つて、そして足から先へ、どんぶりこ、すつこつこ　喜「エ、しやれなんな、釜が直にあつて、これが這入られるものか　彌「這入られやアこそ手めえの見た通り今までおれが這入つてゐた　喜「おめえどうし

て這入つた。彌「はて、しつこい男だ、すい風呂に這入るのに、どうして這入つとは何の事だ。喜「ハテめんような。彌「むづかしいことアねえ、初めの内ちつとあついのを辛抱すると、後にはよくなる。喜「ばかアいびなせえ、辛抱してゐるうちにやア、足がまつくろに焦げてしまはア。彌「エヽ埒のあかれえ男だ。（と、心の内はをかしさこたへられず、座敷へかへる。喜多八いろ〳〵と考へ、そこらを見廻し、彌次郎が隠しておいたる下駄をみつけて、ハヽアよめたと心にうなづき、すぐにその下駄をはいて、すいふろのうちへはいり）喜「彌次さん〳〵。彌「なんだ又呼ぶか。喜「なるほどおめえのいふ通り、入しめてみるとあつくはれえ、ア、いゝ心持だ、あはれなるかな石どう丸は、ヅレレン〳〵（此内彌次郎あたりをみれば、隠しておいたる下駄がなきゆゑ、さてはこいつ見付けたなと、をかしく思つてゐる内、喜多八はさすがに尻があつく、立つたり坐つたり、いろ〳〵として、あまり下駄にてぐわた〳〵と踏みちらし、つひに釜の底を踏みぬ

きべつたりと尻もちをつきければ、湯は皆流れて、シウ〳〵〳〵〳〵）喜「ヤアイ救け船〳〵。彌「どうしたヽ、ハヽヽヽヽ、（宿の亭主この音に驚き、裏口より湯殿へまはり、きもをつぶし亭主「どうなさいました。喜「イヤモウ命に別條はねえが、釜の底が抜けて、アイタヽヽヽ。亭「コレは又どうして。底が抜けました。喜「ツイ下駄でぐわた〳〵やつたからさ、（と云に亭主は不思議相に喜多八が足をみれば下駄をはいてゐるゆゑ。）亭「イヤアお前はとはうもない人だ、すいふろへ這入るに、下駄をはいて這入るといふ事があるものでございますか、らつちもないこんだ。喜「イヤわつちも初手ははだしではいつて見たが、あんまりあついからさ。亭「イヤはや、にが〳〵しいこんだ（と、大きに腹を立てる、喜多八も氣の毒さ、こそ〳〵とからだを拭いて、いろ〳〵言譯する、彌次郎氣の毒に思ひければ、中へ這入り、釜の直し賃、南鐐一ペン遣はし、やう〳〵とわびごとして）

水風呂の釜をぬきたる科ゆゑに宿屋の亭主尻をよこした

喜「いめえましい（と、おもひがけなく貳朱一つぼうにふつて、大きにふさぎぬる、其内膳も出てそこ〳〵にくつて仕舞、しやれもむだも一かう云はず、たゞぼうぜんとだんまりなり）弼「コレてめえ何もふさぐことアれえ、大きな徳をしたは　喜「なにが徳だ　弼「かまを拔いて貳朱ではやすい、よし町へ行つてみや、そんなこつちやアれえ　喜「エヽぶしやれなんな、人の心も知らずに　弼「イヤそれでも手めえがそんなにしてゐると、おらア氣の毒な事がある　喜「なにが　弼「さつきの女が後に忍んで來る筈にふづくつておいたから、側で手前が氣を惡くして、猫の事ふさぐだらうと、それがどうも氣の毒だ　喜「オヤ、ほんにか、いつの間に約束した　弼「そんなことに如才のあるのぢやアれえ、さつき手めえが湯へ這入つてゐる時、げんなまで先へおつとめを渡して置いたから、もう手つけの口印までやらかしておいた、なんときついもんか、へ、、、、、さういつ

ても色男はうるせえの、ハヽヽヽ、もう寢ようか（と、手水にたつて行く、此内女來り、床をとる）喜「コレあねさん、おめえおらが連の男に何か約束をしたぢやアれえか　女「イヽエ、オホヽヽ　喜「イヤ笑ひ事ぢやアれえ、これやアないしやうのをだが、あの男はおえれえ瘡かきだから、感染らぬやうにしなせえ、おめへが負つては氣の毒だから云つて聞かすが、必ず沙汰なしだよ、（ひそ〳〵ものでまことらしくいへば、女きもをつぶせし樣子に、北八圖に乘り、「そして足は年中雁瘡で、なんのとはれえ乞食坊主の管笠を見るやうに、所々に油紙の蓋がしてある、それに又アノ男の胡臭の臭さ、その癖ひつツこい男で、かじり付いたら放しやアしれえ、めんよふ、アノかさつかきといふものは、口中のわる臭いもので、おいらもならんで飯を食ふさへいやでなられえが仕方がれえ、思ひ出しても、むしずがはしる、ペツ〳〵（ト、此内はや彌次郎手水より出てくる樣子に）女「もうおやすみなさいませ（ト、さう〳〵起つてゆく、彌次郎座敷へ這

時分、明松がなに入るものか　喜「夜があけてもいゝはな、おめえ買つてとぼせばいゝ、昨宵のかはりに　彌「おきやアがれ　喜「ハヽヽヽヽヽヽ、又こゝに湯本の宿といふは兩側の家作きらびやかにして、いづれの内にも美目よき女二三人づゝ店頭に出て、名物の挽物細工をあきなふ、北八一軒〳〵に覗き見て　喜「オヤ〳〵あらひ粉の看板を見るやうに、顔と手ばかり白い女がゐらア　彌「なんぞ買はう　娘「お土産おめしなさいませ、お這入りなさいやんせ　彌「コウあれさん、そこにあるものを見せなせえ（といふに、娘は又外の客と相手に成つてあきなひしてゐる、勝手より婆ア走り出て）　婆「ハイ〳〵これでござりますか、（婆アでは不承知の顔付にて）彌「それぢやアれえ、コウ姉さんそちらのを見せな　婆「ハイ〳〵これでおんざりますか　彌「エヽそれでもれえ、コウ姉さんおめえの手に持つてゐるのは何だ　娘「ハイ〳〵お煙草入でおざりやんす　彌「コレ〳〵この事さ、時にいくらだ　娘「ハイ三百でおざりやんす　彌「百ばかりにしな

せえ　娘「おまへさんもあんまりな、あなたがたのお薩で斯樣に致して居りますものを、懸値は申しやんせぬ（と彌次郎をじろりと見る、忽ちのろくなりて）　彌「そんなら貳百よ　娘「もうちつとおめしなさつて下さいませ、オホヽヽヽヽ、（と、れつからをかしくもないことを笑つて彌次郎が顔をまたじろりと見る）　彌「そんなら三百〳〵　娘「もうそつとでござりやんす、オホヽヽヽ　彌「面倒ないやんした　喜「ハヽヽヽヽ三百のものを四百に買ふとはあたらしい〳〵　彌「それても惜しくれえ、あの娘はよつぽどおれに氣があつたと見える　喜「おきやアがれ、ハヽヽヽ　彌「それても初手からおれが顔ばかり見て居たは　喜「見て居た筈だ、アノ娘の目を見たか、やぶにらめだ、ハヽヽヽ（こゝに毬栗頭の子共四五人ゐて）　子供「權現さまへ御代參、壹文やつて下されチヤ　喜「ナニ御代參とばなんだ　子供「こんた（此方）しゆのかはりに參るは　喜「ナニおいらが代りに

入り、すぐに夜着をかぶりて）彌「ドレふところをあつためておいてやらう　喜「いめえましい、今夜の様にうまらねえ事はねえ、火傷をして貮朱かねはふんだくられる、そのうへアノうつくしいやつをそばで抱いて寝られて、ほんに踏んだり蹴たりな目に逢ふは　彌「へ、、、、かんにさつし、今夜アちつと受けにくからう、ちくるゐめ、こたへられぬ、ハ、、、、、、コレ北八もうてめえ寝るか、もつと起きて居ねえ、（北八は委細かまはず）喜「ゴウ〳〵〳〵　彌「もう來さうなもんだ（ト、ひとりまじくらして、待てども〳〵音もなし、なま中さき錢をやつて、ぼうにふるかと氣が氣ではなく、こらへ兼てむしやうに手をたゝきたてると、宿屋のかみさま來り）女房「お呼びなさいましたか　彌「イヤおめえではわかるめえ、先刻こゝの女中にちつと頼んでおいた事があるから、どうぞ一寸よこしてくんねえ　女「ハイあなたがたの方へ出ました女は雇人でございますから、もう宿へ歸りました　彌「エヽほんにか、そんならよし〳〵　女「ハイお休みなさ

いませ（ト、勝手へ行く）喜「ハ、、、、、、ワハ、、、、、、　彌「べらぼうめ何が可笑しい　喜「ハ、、、、、、、、、イヤこれで地にした、もう安堵して寝ようか　彌「勝手にしやアがれト、哀なるかな彌次郎兵衞、北八が奸計とは露しらず、二百戀じや恨めじのおしやれが無洒落か、あたら夜を是非なくころりとつッぷしければ、北八可笑しく又一首

ごま鹽のそのからき目を見よとてやおこはにかけし女うらめし

彼是興じて臥したりけるに、早くも聞ゆる遠寺の鐘に、一睡の夢覺めて夜明けゝれば、やがて起き出で、そこ〳〵に支度して立出てけるに、今日は名に負ふ箱根八里、はやそろ〳〵とつま上りの石高道をたどり行くほどに、風まつり近くなりて、　彌次郎兵衞

人のあしに踏めどたゝけど箱根山本堅地なる石だかのみち

喜「コレ〳〵明松を買はねえか、こゝの名物だ　彌「べらぼうめ、もう日の出る

時分、明松がなに入るものか　喜「夜があけてもいゝはな、おめえ買つてとぼせばいゝ、昨宵のかはりに　彌「おきやアがれ　喜「ハヽヽヽヽヽヽ、又こゝに湯本の宿といふは兩側の家作きらびやかにして、いづれの内にも美目よき女二三人づゝ店頭に出て、名物の挽物細工をあきなふ、北八一軒〳〵に覗き見て　喜「オヤ〳〵あらひ粉の看板を見るやうに、顔と手ばかり白い女がゐらア　彌「なんぞ買はう　娘「お土産おめしなさいませ、お這入りなさいやんせ　彌「コウあれさん、そこにあるものを見せなせえ（といふに、娘は又外の客と相手に成つてあきなひしてゐる、勝手より婆ア走り出て）　ば「ハイ〳〵これでございますか、（婆アでは不承知の顔付にて）彌「それぢやアねえ、コウ姉さんそちらのを見せな　ば「ハイ〳〵これでおんざりますか　彌「エヽそれでもねえ、コウ姉さんおめえの手に持つてゐるのは何だ　娘「ハイ〳〵お煙草入でおざりやんす　彌「コレ〳〵この事さ、時にいくらだ　娘「ハイ三百でおざりやんす　彌「百ばかりにしな

せえ　娘「おまへさんもあんまりな、あなたがたのお蔭で斯樣に致して居りますものを、懸値は申しやんせぬ（と彌次郎をじろりと見る、忽ちのろくなりて）　彌「そんなら貳百よ　娘「もうちつとおめしなさつて下さいませ、オホヽヽヽヽ、（と、れつからをかしくもないことを笑つて彌次郎が顔をまたじろりと見る）　彌「そんなら三百〳〵　娘「もうそつとでござりやんす、オホヽヽヽヽ　彌「面倒なこつた　喜「ハヽヽヽヽ三百のものを四百に買ふとはあたらしい〳〵　彌「そいやんした　喜「ハヽヽヽヽ三百のものを四百に買ふとはあたらしい〳〵　彌「それても惜しくれえ、あの娘はよつぽどおれに氣があつたと見える　喜「おきやアがれ、ハヽヽヽヽ　彌「それても初手からおれが顔ばかり見て居たは　喜「見て居た筈だ、アノ娘の目を見たか、やぶにらめだ、ハヽヽヽヽ（こゝに毬栗頭の子共四五人ゐて）　子供「權現さまへ御代參、壹文やつて下されチヤ　喜「ナニ御代參とはなんだ　子供「こんた（此方）しゆのかはりに參るは　喜「ナニおいらが代りに

何れを見ても山家育ち、身代りにする面があるものか、碌な首は一つも無い、イヤ時にアノ鉦はなんだ　■「賽の河原へ來たぞ〳〵

辻堂はさすがにさいのかはら屋根されども鬼は見えぬ極樂

お茶漬のさいのかはらの辻堂に煮しめたやうなりの坊樣

それより　御關所を打過ぎて

春風の手形をあけて君が代の戸ざゝぬ關を越ゆるめでたさ

斯く祝して峠の宿に悅びの酒酌みかはしぬ。

道中膝栗毛初編　終

道中膝栗毛後編序

予嘗て旅の賦を作る、其略に云、土橋を渡つて又土橋を見る、恰も深川にて友を訪ぬるが如く、並木を出でゝ亦並木に入る、殆淺草にて狐に魅さるゝが如し。卷藁に鯱立なせる燒肴には、今井四郎が討死をおもひ、強飯に群鳥なせる蒼蠅には、伊勢平氏の敗軍を歎く。木賃泊の据風呂は、鳧の脚短しといへども膝をこゆる事なく、大井川の歩行渉は鶴の脛長しといへども脇をひやす事しきり也。雲助は裸虫の長として赤裸の境界に終り、出女は萬物の靈として萬客の弄物に老ゆ。見るもの都て意馬の頭を低れ、聞く事皆心猿の腸を斷てり。さるをうきものゝ發語とも知らで、天

地の逆旅に居て獨たのしく、日月の過客にしたがひてそゞろ浮かれありくものは、十返舍の主にして、これが爲に一双の膝栗毛を養ふ。一疋の口の輕尻は撈に一冊子を負て箱根にとどまり、伯樂顧みて本屋仲間の初市に價を倍す。今本馬卅六貫目、中腹に擊る才力を出して、一鞭たゞちに京城にいたる。かばかり迅速のうちに驛路の情態を記して、全篇の功を成す此膝栗毛、一日千里といふべし。

享和癸亥春　　芍藥亭主人　菅原長根題

凡例

○此膝栗毛後篇は、箱根驛より大井川に至つて終る、羈中旅客の滑稽、逆旅傀儡の風色、其雅情を穿つて著す事、初篇に同じ。

○驛々風土に隨つて音律に清濁の差別あり、俚言方語の通稱に異なる事あり、笑ふべきに非ず。古代の詞は却つて田舍に殘れりと徂徠翁の謂なり。たとへば駿遠兩國にて、行くといふを行かずといふは行かんずるなり。酒を呑まず飯を食はずとは、皆呑まんず、喰はんずるなりと「物類稱呼」に見えたり。

○恐しいといふ事を、相州にてはおつかないといひ、駿州にてはゑずいといひ、遠州にてはこはいといふ、同國にて九ツをけゝれつといひ、心なしといふをけゝれなしといふ事は「古今集」に「かひがねをさやにも見しかけゝれなくよこをりふせるさやの中山」とあり。

○おぞいといふは、尾張にて物の惡敷事をいふ、駿河邊にては物事賢き事にい

ふ「和字正濫」にからすてふ大おそどりの歌を、おほおそとつと濁音によませて、あしき鳥の事といへり。おそといふ是也、いは助字也。

○相豆駿遠にてまずいといふは、甘からずの下字をとつて、まずといふ、いは助字なり。

○都て道中箱根より伊勢路までは、馬をおまといひ、又いまといふ。「日本紀」に馬をいまとよませり、仍て相通しておまともいふ。

○なぜといふをあぜといふは、「萬葉」にあぜそも今宵よしろきまさぬとあり。

○うらといふは我等の轉語、おれらをちぢめておらといひ、おら又轉じてうらといふ

○懲くことを相豆にてはたまげるといひ、駿遠におびえるといふ。たまげる「源氏」に魂消とあり。

○なでう、あでうといふ詞は「紫日記」になでう女のまなふみとあり。

○愚なるものを駿遠にてひようたくねといふ。

○相豆に、とてつもないといふ詞は「性理大全」に塗轍と有るなるべし。駿州にはとひやうもないといひ、遠州にはしやうくもないといふ。

○にしといふは主なり、にとぬと通へばなり。

○すわることをかうまるといふは、禪家に久しく座する事を行座といふ、行の字は久しき義なり、仍てかうまるといふ、まるは居の心にて、れまる、かしこまるのまるなり。

○此等の外勝ぐるに暇あらず、只此巻中にあらはしたる詞のみを爰に解く。仍て排設の趣は俚俗の訛言方語のまゝを記して、其をかしみを純にす。

○逆旅、木賃泊の憀慄なる體、六部、順禮、ぬけ參の患苦、雲駕、馬士、護摩の灰等の始末、初篇に漏れたるをこゝに記す。餘は續篇に讓るものならし。

十返舍一九識

東海道中

膝栗毛後編 卷之上

長明が東海道記に曰く、松に雅琴の調べあり、浪に鼓の音ありと、息杖の竹笛を吹けば、助郷の馬太鼓をうつ。膝栗毛後篇の序びらき、ヒヤリ〳〵、てれつく〳〵、すつてん〳〵 狂言調「かやうに候ものはお江戸の神田の八丁堀邊に住居せし彌次郎兵衛喜多八と申す怠けものにて候。扨もわれ〳〵伊勢へ七度、熊野へ三度、愛宕さまへは月參りの大願を起し、ぶらりしやらりと出かけ、れつから急がず候ほどに、えいやつと箱根の驛につきて候 うたひ「玉くしげ箱根の山の九折〳〵、げにや久かたの醴賣や、山椒魚の、名所おほき山路かな

あまさけうりのおやぢ「名物あがらしやいませ、醴飲ましやいませ 喜彌次さんちよつと休みやせう、オイ一盃くんな（と、床儿に腰をかける。おやぢ一杯くんで出す 喜「こいつは黑い〳〵 彌「くろいやうであまいは遠州濱松ぢやアないか

喜「わりい〳〵、コウおめえなぜ飲まれえ。彌「おいらアいやだ、ソノ茶碗を見や、施主の氣がきかれえよ、あさがほなりにでもすればいゝに　喜「さうさ、是ちやア強飯の香の物も奈良漬ちやアあるめえの　おやち「香のもんはござられえがむめぼしよヲ(梅干を)進ぜますべい　(と、皿にある梅干をいだす)　喜「オイ〳〵いくらだえ、サアおせわ　(と、ぜにをはらひ出て行く向ふより來る小荷駄馬ひきもきらず、鈴の音しやん〳〵〳〵)、馬士頭「ふじのあたまがつんもえる、なじよにけぶりがつんもえる、三島女郎衆に、がらゝうちこみ、こがれおちやつたらつんもえたア、しよがへ、ドウ〳〵　(こちらから行く馬かた互ひに行きちがひて)「ヒヤア出羽宿の先生どうだ　向ふよりくる馬方「べらぼうめ、おれが先生なれやアうぬははッつけだア　馬「ヒンヒン〳〵　(又向ふより來るはお大名のお國からお江戸入の女中たち、駕をつらせて四五人連れ、騒ぎつれて來るを見て　彌「オヤ〳〵えらい〳〵　喜「ほんに是は皆生きた女だ、奇妙々々、ナント彌次さん、

つかれえこつたが、白い手拭をかぶると顔の色が白くなつて、とんだいきな男に見えるといふ事だが、ほんとうのことかの　彌「それやアちげえなしさ　喜「よし〳〵　(と、袂からさらしの手拭を出して、ぐつと頬かぶりにすると、通りすがひに女中たち、喜多八が顔をのぞいて見て、皆々笑ひ通りすぎる)　喜「なんとどうだ、今の女どもがおいらが顔を見て嬉しさうに笑つていつたは、どうでも色男はちがつたもんだ　彌「笑つた筈だ、手めえの手拭を見や、木綿眞田の紐が下がつてゐらア　喜「ヤア〳〵これやア手拭ぢやねえ、越中褌鼻褌で有つた　彌「手めえ、夕べ風呂へ這入る時、ふんどしを袂へ入れて、それなりに忘れたはをかしい、大かた今朝手水をつかつて顔もそれで拭いたらう、きたねえ男だ　喜「さうよ、道理こそわる臭い手拭だと思つた　彌「ナニぜんてえ手めえがあたじけれえからこんな耻をかくは　喜「なぜ　彌「木綿をしめるから手拭と取りちがえるは、コレおいらア見やれ、いつでも絹のふんどしだ　喜「それだとつて、家根屋が長

局の葺きかへに行きやアしめえし、きぬを〆ることもねえす、エ、まゝよ、旅の耻はかきすてだ、斯もあらうか。

手拭と思うてかぶるふんどしはさてこそ耻をさらしなりけり

それよりかぶと石をよめる、彌次郎兵衛

たがこゝに脱ぎすておきしかぶと石かゝる難所に降参やして

斯くて山中といへる建場にいたる。爰は兩側に茶屋軒をならべて「おやすみなさいまアし、くだり諸白もおざりやアす、もちよ（餅）みあがりやアし、いつぜんめしよ（一膳飯）チあがりやアし、お休なさいやアし／＼」甲「喜多八ちつと休んでいかう（と、茶屋へは入り、此内の庭につき立てたる籠の前に、雲助ども、蒲團をからだにまきたるも有り、澁紙を着たるもあり、或は寢薦、赤合羽などを着てよりこそり、火にあたりゐると、表の方より竹の煙管をくはへて一人の雲介ずつとは入り「おえれえひやうたくれどもだ、あか熊や、どぶ八

めが、峠まで長持でやつたアな　乙「ひとりのくもすけ「えいは、そんだい（其代）あび手があんどん（四十）にげんこ（五十）はふんだくるべい（この長持といふは六百の事、あびてといふはさかての事也）いま一人「コレそりアえいが、コノ野郎がおー！やらくを見ろえ、しつかり紋付を着やアがつた　さかどもをきてゐるくもすけ「きんによう（昨日）小田原の甲州屋でやらやつと壹枚貰つて着たが、あんまり裾がながくて、お醫者様のやうだとけつかる　丸はだかのくも「野郎めらア工面がえいから、好きな物を着やアがる、おらアこんぢう（此中）内からはだかでゐりやア、がら吉婆アがぬかすにや、古傘をやらうから、ひつぺがして着るとけつかる、べらぼうめ、やらうの猪ぢやアあんめえし、そんなもんが着られるもんかと云つたら、すんならこりよ（是）チ着ろとつて、えいみしろ（能い筵）を一枚うつくれたと思へ、そのみしろを、きんにより（昨日）の晩げに、畑で湯につゝばいるとつて、ひん脱いで置いたら聞きやれ、大事の着物をがらゝおま（馬）にくはれてし

まつたア、いま〳〵しい。(彌次郎きた八このてやひの咄をきいてゐて、大きに興にいり、やがてこゝを立出てゆくと、長坂大しぐれといへるあたりより、旅人壹人、紺の木綿合羽を着て、風呂敷包と柳行李を肩にひつかけたるが、あとに成り先に成り　ねぢ人十吉「あなた方はどこでござります　彌「わつちらア江戸さ

十「私も江戸でございます、あなた江戸はどの邊でございます　彌「かん田さ、

十「神田には私も居りましたが、どうかあなた方は見申したやうだ、神田はどこでございます　彌「神田の八丁堀で、わつちらが内は栃面屋彌次郎兵衛といつて、間口が廿五間に裏行が四十間、角屋敷の土藏づくりで、大層なものよ十「ハアそのうらでございますか　彌「とんだ事をいふ、裏店はなしさ、わつちが所一軒ですまつてゐやす　十「ハアそんなら惣地代で沽券はいくら　彌「こけんは千八百兩　十「おめえ直でございやすか、口錢は何朱でも二ツ割に致しやせう　彌「ゐめえ、何をいふ　十「私は又地面の賣買のお咄しかと存じました　彌「ナニそんな

こつちやアねえ、わつちらア、ちよつと出るにさへ供の五人や十人は連れて歩きやすが、それぢやア氣がつまつて面白くねえから、此男一人連れて不自由して歩くも物好きだれ　十「なる程さやうでございませう、イヤ又あなたのおふくろさまなぞは、私よく存じて居りますが、いつぞや淺草の門跡さまの前でお目に蒐りました時、何か包をさげて杖にすがつてござる樣子、大きにお歳がよりました　彌「ハア夫は大かた寺參りにでもいかれた時でございませう、おめえ御存じとあれば定めて何とか詞をかけられたで御座りやせう　十「私を見ると直に駈けてござつて、何をおつしやるかと存じましたれば、一文やつて下しやいませと　喜「ワハ、、、、ハ、、、　彌「イヤおめえ、おいらをおつにはぐらかすのおもしろえ〳〵、なんとおめえ今宵わつちらと一しよに泊りはどうだ十「ようござりやせう(と、それよりみちすがら互にしやれ合ひ、國澤といへるにいたる。こゝに法花寺といふ寺に、足利武將の建立ありし七面堂あり。彌次郎兵

衞遙に之を伏し拜みて）

足利の武しやうの建てし名にめでゝ七面堂といふべかりける

斯くて三人咄しつれて市の山にいたる。（こゝに毬栗頭の子ども二三人大なる鼈をとらへて持ち歩き遊びぬるを北八見付けて　喜「コウ彌次さん、いゝものが有る、アノ泥龜を買ひとつて、晩に宿屋でやらかしはどうだ　彌「よからう、ナント小僧、そのすつぽんを賣られえか　子供「こんたしゆ、いるならうちくれべい、そんだい、ぜによヲくれさるか　喜「やらうとも、ソリヤおツきな錢をやるは（と、四文ぜに廿四文ばかりぬいてやり、やがてあたりの藁を拾ひ、かのすつぽんをわらづとに入れて引さげ）喜「奇妙々々　十「こいつは面白い、時に日がいらしつた、ちと急ぎやせう（とあしばやに三人たどる）既に其日も暮に近づき、入相のかね幽かにひびき、鳥も塒に歸りがけの駄賃馬、追立てとまりを急ぐ馬士唄のなまけたるは、ほてつばらの淋しくなりたる故にやあらん。（此と

き漸く三島の宿へつくと、兩側より呼びたつる女のこゑ〳〵）「お泊りなさいませ〳〵　彌「エ、ひつぱるな、こゝを放したら泊るべい　女「すんならサアおとまり　彌「あかすかべイ引（とにげるはづみにあんまに行き當る）　あんま「アイタ、、、、眼つぶれが、べら坊め、あんまアげんびき引　せうちうりのこゑ「せうちうは入りませぬか、目のまはる燒酎を買はしやいませ　喜「えいかげんにこゝへ泊らうか　はたごやの女「サアお這入なさいませ、おさんどんおとまりだよ　やどやの亭主「コレハおはやうございます、お連れ様はおいくたり　彌「影法師共に六人　亭「ヘイそれは、ヤレちやア三太郎は居ぬか、お湯をとつてこい、お茶は煮えてあるか、ソレ先お風呂を一つあげろ、お飯もわいた、すぐにお這入りなさいませ（此内三人とも足を洗ひしまひ、すぐに奥へ通る）　やどの女「お湯におめしなさいませ　彌「ドレおさきへまゐらう（と、はだかになりてかけいだす）女「モシそこはかうか（雪隱）でございます、こつちらへ　彌「ホイこれは（と湯殿へ行く）十「とき

にかの藁苞はえ。喜床の間に置きやした、のちの疲酒にこしらへて貰ひやせう

（此内彌次郎湯よりあがると、次に十吉湯に入りに起つ。宿の亭主問屋の下役をつれて、帳面と矢立をもち出づる、これは宿帳とて旅人の國とところをしるすこと也）てい主「御免くださいませ、ハアお一人はお風呂か、宿帳を附けます、あなたがたお國は　喜「ハイわしは泉州　亭主「泉州はどこでございます　喜「せんしう堺、名は天川屋義平といひやす　てい主「へイ、あなたは　彌「わしかえ城州山崎村與市兵衛と申しやす　てい主「扨は與市兵衛様とは貴方か、承り及んだあなたの智さま勘平さまはどうなされました　彌「かん平は三寸になるやならずに死にやした　亭主「ハアそれはお力落し、お輕どのは　彌「ずゐぶん達者でゐます、てい主「そして狸の角兵衛様や、めつぱう彌八様は、たしかあなたの御近所であつた　彌「さやう〳〵　亭主「アノまた猪はどこにゐられます　彌「ハア猪はどこだか　てい主「てんつる〳〵、てんつるてんは、どう致しました　みな〳〵「ハヽヽ、

ヽ　てい「イヤまづ御膳をあげませう　彌「いま〳〵しい、結句あつちにあそばれた（と、此内宿の女膳を持來りならべおきて）「サアおがりなさいませ、コレちやア、おたつどんとゥ、そこの飯櫃ウもつて來なさろ　喜「ときに此處にやアしろものはなしかの　玄「此間木曾街道の追分から來た女郎衆が二人ございます、おさみしかア、お呼びなさいませ　彌「こいつおもしろからう、器量は　玄「がいにえいといふでもおざりましない、マア十人前でおざいます　喜「ハヽヽヽ、十人前のめしもりか、面黑い、呼んでくんな　玄「すんなら只今（といひすてゝたつて行く、此内十吉湯殿よりあがりて）玄「おめえがたア、なにかやぼからぬお咄しだれ　彌「ぬしやアどうだ　十「イヤわたしはアノ内の女に少し咄し合がありやす（と、此内やどの女きたりて）「これは御如才でございます、サアおかへなさいませ、モシ今のが參りました、コレおまいちやア、こゝへ來なさろ、ドレむかひにいかずに（と、女は立つて行く。すべてこのあたりより、駿河遠州か

け川あたり迄は、行かうといふことをゆかずといひ、くはうといふ事をくはずといふ。やがてかの女、襖のかげに覗いて立つてゐるをひつぱり出る）玄「サアく、きなさろく」　めしもりおたけ「アレハアふとつていぎ（一人行）ます、がいにしよびきなさんな　いま一人のめしもりおつめ「どうせハア、出べいとこさア出にやアならない、サアおたけさん、つん出なさろ（と、やう〳〵二人ながら出かけてくる一人は紺の木綿に剣酸漿の紋の付たるを着て、太織縞の帯をしめ、今一人はべにがら色の赤き絲の入りたるたてじまのぬのこに、これも帯は太織の藍天鵞絨紅木綿のふんどしちら〳〵と出しかけ、黒きらをの長煙管を手に持ちて座敷へすわる　喜「サア〳〵爰へ來なせえ時に女中膳は引いて酒にしやせう　玄「ハイ今に出します（と、膳を引てしまひ、銚子、盃、肴を持ちいて）玄「サア一つあがりませ　喜「ドレ〳〵（と、一口飲んで下におくと、女心得ておたけにさす）

お竹「コリヤハアわしにかえ（と、呑むまれして北八へさす、北八飲んでおつめへさす）おつめ「おたつどん、ハアお慮外だもし　喜「一つ飲みなせえ　おつめ「わしらアはあ、がいに飲みましれえ、ヤレさてこの衆はがいにおつぎやることよ

玄「お竹さん、おまいち（前方）のとこちやア、みんなこりよヲ（是を）さしてゐるの（と、おたけがつぶりにさしてゐる銀ながしの五大力の簪を抜いて見る）

お竹「コリヤハアお江戸でも流行るげでの、わしらがとこの金彌さんが野尻の彦十さんに買つて貰つたげて、がいに自慢らしく内ぢうのもんに、びけらかすから、廿四文うつちやつたアもし　玄「おつめさん、おまいの櫛を見せなさろ（と、取りにかゝるをいやがりて）つめ「おらア、やあだよ、ハ、、、（と、顔を背けるを無理に取つて見れば、朱塗の櫛に金粉にて抱茗荷の紋がついてゐる

玄「ばあちやア、コレヤア札の辻の太郎ざゑむ（左衛門）さんの紋所だアよ

つめ「じつちつたかやア（と、ひつたくり、櫛にてたゝく眞似をしてつぶりへさ

す。この二人まことに此間追分から來たと見えて、是は皆あつちの言葉なり。みな〳〵をかしさを隱し、だんまりにて聞いてゐる。こゝにもいろ〳〵あれ共、あまりくだ〳〵しければ略す）玄「もうおそべりなさいませ　十吉「ホンニわしは次の間へ寢やせう　彌「ナニサ、いつ所にこけへ　十「コレハ迷惑な　玄「サアおまい方も着かへて來なさいまし（と、夜着蒲團を運び床をとる。皆々蒲團のうへにあがりゐると、二枚折の小屏風にて間を劃る。此うち彌次郎があひかた來たりて）竹「モウそべらしやりましたか、がいにさぶい晩だアもし　彌「もつとこつちへ寄りなせえ何も遠慮はれえから、ちつと咄しでもしなせえ　竹「わしらが樣なものア、お江戸の衆にやアこつばづかしくて、何も語るべいことアござんなえもし　彌「ナニ恥かしいも氣がつえゝ、おめえもう幾歳だ　竹「わしやハア、お月さまの歳だよ　彌「ム、十三七ツで、二十といふことか、てえぶ（大分）おしやれだの　竹「ホ、、、、わしらアこんじう（此中）追分さアから來て、これのと

この客衆さア、あじやうしたらよかんべいか、なほかしお江戸の衆にやア氣が詰まつて、なりましない、ヤレハア寢づらいこんだよ、そしてがいに後へさがりやることよ、もつとそら（上）へつん出なさろ　彌「オツト承知〳〵（と、よぎをすつぽりかぶり、しばらく無言。此うち北八があひかたのおつめも來りて色々あれどもこれも、くだ〳〵しければ略す。）はや其夜も更けゆくまゝに、助郷馬の鈴の音もたえはて、脊戸になく犬の遠吠、猪を追ふ鳴子のおとまで、吹き送る夜嵐の身にしむばかり、行燈の油も盡きて、いつの間にかは眞ッ闇暗。（こ

時かのつとになしおきたる鐙、床の間におきたる儘、それなりに忘れたるが、やがて藁苞をくひ破り、そろ〳〵はひ出で、ごそつき歩くに、十吉目をさましなにやらんと考へゐるうち、かのすつぽんは北八がよぎの中へはひこむと、北八びつくり目をさまし）　喜「だれだ〳〵（と、あたまをあげると、すつぽんうろたへて北八が胸のあたりへかけあがる。北八キヤツといつて、ひつ掴み、ほ

ふりなげると、彌次郎が顔へばつたり、これもキヤツといつて目をさまし、うろたへてひつつかみ、指先をくひつかれて）彌「アタ、、、、（あひかたお竹も目をさまし）竹「ヤレうつたまげた、あじやうしたえ　彌「火をともしてくれろ、アイタ、、、　竹「あん（何）としたえ（と、さぐり廻す手さきがすつぽんへさはり、バアチヤハアとうしろへ倒れる拍子に、ふすまが外れてともにばつたり、北八むしやうに手を叩き　喜「まつくらでねつからわからぬ　竹「おたつどん〳〵、最前から客衆がうでをたゝかつしやる、早くあかしよ（灯）ヲ持つてきなさろ　彌「早く〳〵、アタ、、、（と、むしやうにうろたへ騒ぐ、此ひまに十吉彌次郎が蒲團の下に入れておきしうちがへの金を盗み、かれてこしらへおきたると見えて、石ころを紙にくる〳〵包みたるをすりかへ、疝卷へ入れて又元の如くふとんの下へ入れおく、一體この十吉は道中の讃醉の灰といふものにて、こんなことをするが商賣なれば、いつの間にかは彌次郎が金を持つて居るを見てと

り、途中より跟けきたりてかくのごとし。この内やどの女房あかりをもちきたり見れば、彌次郎が手にすつぽんがくつゝいて、ぶつても叩いても一向にはなれず、宿の女房あわてゝ　女房「ばやチア、こゝへはどうしてすつぽんが來たやア　喜「ハ、ア盡間のすつぽんが、苞の中から這ひ出たのだな、コイツすつぽんと拔けさうなもんだ　彌「エ、しやれ所ぢやアねえ、アレ血が出る、痛い〳〵　竹「あん（何）だと思つたら、がさだアもし、それやア指を水の中へ入れめさると、ぢつきに放してつん逃げ申すは　女房「ホンニさうしなさいまし（と、雨戸をあける。彌次郎かけ出し、手水鉢のなかへ指をつけると、すつぽんははなれ泳ぐ）彌「ヤレ〳〵〳〵とんだ目にあつた　喜「イヤはや奇妙希代希有けれつ、ちんじちうやう言語同斷なことであつた、ハ、、、（と、そこら取片付け、まだ夜あけにも間もあればと、又も枕を傾けて、しばらくまどろみける中に、きたハはをかしさ半分）

よれたちとれたる側には泥龜もはづかしいやらゆびをくはへた

おなじく彌次郎も痛さをこらへて

泥龜にくはへられたる苦しさにこちや石龜のじたんだをふむ

もはや其夜も明け行けば、寺の鐘も勤行の聲もろともに響きわたり、求食る烏の軒ちかく鳴き渡るに、皆々目さめて起き出づれば、勝手より膳も出て、それ〴〵に支度する內　やどの女「お一人は何處へいきなさつた　喜「ほんに十公はどうした　彌「大かた雪隱だらう、先へやらかせ（と、かまはず飯を食ひかかる。十吉ははやいつの間にかは、裏道より逃げ行きたれば、いくら待つても來る筈はなし。彌次郎あたりを見廻し不思議さうに　彌「コウ北八、あの十吉とやらは何だらう　喜「されば　彌「ハテ合點のいかぬ、アノ野郎が風呂敷包も笠もれえ、大方おいらが寢てゐる內、たつてしまつたと見える　喜「ヤアそんなら何ぞなくなりやアしれえか（と、そこらを見まはし）「何も別條はねえが　彌「イヤ〳〵別條

があるやうだ（と、懷から胴卷を出し、ふるつてみれば紙に包んだやつが、がつたりと落ちる。あけて見れば皆石ころ）　彌「ヤア〳〵〳〵　喜「どうした　彌「どうしたどころか、金が石になつてしまつた、エ、エ、エ、　喜「こいつは大變〳〵

彌「くやしい、今の野郎めにすりかへられた、コレ女中御亭主を呼んでくんな、早く〳〵（と、むしやうにのぼせかへるに、女はさう〳〵たつて行くと、この樣子をきいて、宿の亭主れまきのまゝ駈け來りて）ていしゅ「今承りました、さて〳〵とんだことでござります　彌「イヤきさま御亭主だの、コレ濟まれえぞ〳〵あんな護摩の灰に宿を貸すからにやア、こなたもうはまへを取つたらう、なぜおいらに沙汰なしに先へたゝせた　ていしゅ「コレハけしからぬ、お連樣と存じて泊めたのでございます、今朝たゝしつたも、さつぱり知りませぬ、大方裏道からでも　彌「裏道からも凄まじい、そんなでいくのちやアれえは、なんでもアノ護摩の灰を出せ〳〵、コレエ野郎を見そくなつたか、お江戸でも神田の八丁堀で

栃面屋の彌次郎兵衛様といつちやア、恐らくおれが近付の人に誰知ちぬ者はれえは、わるくふざきやアがると、屋蓙骨チたゝきこはして、合羽干場の地請にたつのだ、足元の明るい内、サアごまの灰めを爰へ出せ、サア出せ〳〵〳〵

亭主「これは御難題、さりとてはお氣のどくな　彌「ナニお氣の毒の人丸さまだ、イヤ四斗樽さまが呆れらア、サア四斗樽めをこゝへ出せ　亭「ナニしとだるとは　彌「イヤサ四斗樽を合點で泊めたからにやア、きさまも一ッ穴の狐だ　ていしゅ「これは無禮な、ナニわしらが四斗樽を泊めませう　彌「泊めれえことがあるものか、昨宵から今の先まで、こゝのうちに寢てゐたは　亭「アノ四斗樽がかえ　彌「オヽサ四斗だろ、イヤ〳〵護摩の灰だ〳〵　亭「コレ彌次さん、マア靜かにしれえ、かわえさうに御亭主の知つたことぢやアれえ、道連れにして來たはこつちが悪りい、どうも仕方がれえと諦らめなせえ　亭主「左様々々、是がわし共が内へござつての合宿ならば、おつしやるも尤だが、何をいふも一緒にござ

つたものを、申さばお前たちの御麁相といふもんだ　亭「違えなしさ、コレ彌次さん、お前力んでもはじまられえ、どうもしやうことがれえはさ、(と、云はれて見れば、彌次郎も成程と思つたところが、つまらず、ふさぎ切つて、だんまりでゐる。しまひつかれば)亭「彌次さん、マア飯でも喰ひれえ　彌「めしもくえぬ、ナントきた八かうだ、府中までいけば、ちつたア算段するあてもあるから、先一文なしで出かけよう、(と使ひ殘りの錢をあつめて、やう〳〵と此所の旅籠を拂ひ、あとにわづかのはした錢殘りたるをたよりに、早々にこゝを出かけ、途々も心懸けて護摩の灰の行衛を尋ぬれども一向知れず。洒落もむだも何處へやら、只うか〳〵と辿りながら)

諺の枯木に花は咲きもせて目をこすらするごまの灰かな

亭「彌次さん、そんなに力を落しなんな、たかだ斯うだ

浮き沈みある世は次第不動尊いのれる甲斐もなき護摩の灰

彌「きたや、おらアもう坊主にでもなりたい　喜「おめえとんだことをいふ　彌「いつそ江戸へ歸らうか　喜「ナニサ、けえる事があるもんだ、柄杓をふつてもお伊勢樣まで行つて來にやアげえふん(外聞)が惡い　喜「それでもモウ、ひだるくて歩かれぬ　喜「ハテ、待ちなさい、こゝに江戸からことづかつて來た十二銅があるから、先へ行つたら餅でも買つて食ひなせえ、(といひつゝ二人ながら杖に縋り、えちら〳〵と行く向ふから、狀箱をかつぎし人足)人足「エイさつさ〳〵〳〵　喜「なんだ、野郎の章駄天樣ア見る樣に、やみと駈けて來やアがる　彌「アヽ、羨ましい、あんなに駈る勢ひだから、定めてお飯もふんだくに食つたらう　喜「エヽ、おめえも乞食じみたことを云ふもんだ　御狀箱の人足「エイさつさ〳〵〳〵　喜「ソレあぶねえこつちへ寄んな　人足「エイさつさ〳〵〳〵　(と、通りすがひに御狀箱の角で彌次郎が小鬢先へ、がつたりとあたる　彌「アイタヽヽヽ　(人足はいさい構はず)「エイこりやさつさ〳〵〳〵　彌「アヽアヽ、痛い〳〵、なんの因果でこんな目に

逢ふか、おらア死に度なつた　喜「エヽ、馬鹿アいひなせえ、ソレ馬が來たア　彌「馬士どん、さきの宿まではまだよつぽどあるかのまと「ナニぢツきにそこだア　彌「いくら程あるえ　まと「たつた三里廿四五丁もあるだんべい　彌「ハツ、アヽ、(と、段々辿り行く程に、やがて釜が淵と云へる所に至りて、斯る中にも、すきの道とて、又一首口ずさむ。されども歌も其身の苦しきまゝなれば)

名を聞いて欲しや黄金の釜が淵口に孝行したき故には

此所にて餅などとゝのへ、少しは腹の蟲を養ひ、互に力を附合ひ、咄ものして漸く沼津の驛につく。こゝにてまづ足を休めんと宿はづれの茶屋へ這入る　茶やの女「おはやうおざいますチヤ、お支度でもしなさいませぬか　喜「イヤあとの建場でうんといふ程食つて來やした(と、此内兩掛を人足に擔がせ、供を一人つれたる侍、お國風の大髻、木綿を片面に染めたる小紋のぶつ裂羽織を着たるが、この茶屋へ這入る　女「お茶あがりませ　士「もう何時だの　女「ハイ八ツても

おざりやしよ　主「よい酒があらば、ちくと出しなさろ　女「ハイ〳〵、三十二文のを上げませうかやア　主「今すこし下直なのはなんぼぢや　女「廿四文のもおざいます　主「然らばソノ廿四文の酒と卅二文の酒と等分に分つて、壹合五勺ばかり出しなさろ　女「ハイ〳〵、（と、勝手よりちろり盃を持ち來り、肴の煮付などいだす）主「コリヤ〳〵、此煮付けよつた肴どもの價な、なんぼぢや　女「三十二文でおざいます　主「こちらは　女「十二文　主「ム、、よい〳〵、コリヤ、傳助わごりよ（我）も一ツのみやれ　供「でん助「ネイ　主「コリヤむかふに火をたきよろ（焚居）をなごどもは奥田氏の内室によく似よつた　供「いかさま、こちらの今笑ひよる女子なぞもよい樣でござります　主「どれか〳〵、ム、、アノ柱のれきに横たはつてゐる女子か、よい〳〵、サア傳介、今すこしある、呑んでしまへ　供「ネイ〳〵　主「サア勘定の致さう、なんぼぢや、コリヤ〳〵、この肴どもは手はつけないぞ　女「ハイ〳〵四十二文でございますチヤ　主「オ、よい〳〵（と、供の

ものに拂はせ、こゝを出かける。北八彌次郎は茶ばかりのんでたちあがり）

喜「サアいかう　彌「アイお世話　女「どなたもようおいで（と、それよりこゝを立出で、二人はかの侍と後になり前になりて、いろ〳〵咄しつれてたどり行くにならの坂といふ所にいたり、千本の松原にて、きた八がこじつける歌）

この景色見ては休まにやならの坂いざ煙草にや千本のまつ

侍このうたを聞きてかんしんし「ヒヤア出來た〳〵、お身たちは江戸者だな

彌「左樣でござります、私どもは夜前の泊でごまの灰に取つかれて、大きに難儀を致します　主「ハア夫は近頃氣の毒ちや、成程ごまの灰のさしたのは痛かろう

喜「イヤごまの灰と申すは、どろぼうのことでござります　主「どろぼうとは何ぢや　喜「ハイ泥坊と申すは盗賊のことでござります　主「ハヽア何か、人のものを取りよる盗賊の事をどろぼうといふか　彌「在樣でござります　主「ソノ又どろぼうをごまの灰といふぢやナ、なるほど解せた〳〵　喜「ときに旦那へ、ちとお

願がございます、私ども右の泥坊に逢ひまして、さつぱり路用はとられてしまひましたから、大きに難儀を致し升、府中まで参ればいかやうとも致しますが、それまでの所に困ります、そこで財は身のさし合せとやら、どうぞ是を賣りたうございますが、お買ひなさつて下さりませぬか（と、腰に下げたる印傳の巾着を出し見せる）士「ホウそれは氣の毒、途中で物を求むるはいかゞしいが、お身たちの難儀とあれば求めてつかはさう、價なゝんぼぢや　喜「ハイ三百ぐらゐにさしあげませう　士「それは高直ぢや　喜「少しはおまけ申しませう　士「しからばソノ巾着共のあたひな、かうと六十文のつかはそか　喜「それはあんまり士「六十一文の遣そか　喜「もちつとお買ひなさつて下さりませ　士「しからば六十二文のつかはそか　喜「イエどうも　士「左あらば清水ちふ舞臺どもから飛んだと思うて六十三文の遣はそか　喜「イヤモウそんなに壹文ヅヽお買ひなさつては御相談が出來ませぬ、かう致しませう、丁度にお買なさつて下さりませ　士「ヤ丁

度とはなんぼぢや　喜「ハイ丁度と申すは百につばまりましたことを丁度と申しますから、百文なら差上げませう　士「ムヽ何か百のことを丁度といふか、然らば丁度に求めてつかはさう　喜「それは有難うございます（と、きんちやくをわたし、百文取り）「モシ是は安いものでございます、捨賣りにしても根付ぐるみでは四五百がものはございます　士「イヤ身ども浮れども兩人罷在るが、是は總領へのよい土産ぢやて　喜「ヘイあなたはまだお若うお見えなさいますに、お子達がお二人とは、よいお樂みでございます、ぶしつけながらもうおいくつでございます士「あてゝお見やれ　喜「ハイあなたはコウト三十七八にもおなりなされますか　士「身ども當年巳のとして四十二歳にまかりなる　喜「それはお若うございます　士「コレハ御挨拶、しかし身ども相役の園原作野ゑもん、米木津甚太夫なども皆同年でまかりあるが、其内で身どもが、いつちえわけ〳〵といひ居るて喜「左樣でございやせう　士「それに又家中うちのわけえ女子どもなぞが、身ど

もがことを澤村宗十郎に似てをるなぞと申す　喜「ハヽアなるほど　吉「ときにお手前はいくつぢや　喜「旦那おあてなさつてごらうじませ　吉「ムウ、お手前歳な、かうと廿七八にも成をるか　喜「イエ丁度でムります　吉「ナニ丁度、アノ百か　喜「イヤ　 　これでございます　吉「ハア三百にはわけえ男だ　みな〳〵「アハヽヽ（この咄に紛れて歩むともなしに、小すは大すはを打過ぎ、ほどなく原のしゆくへ着く。こゝにて連れの侍に別れて）

まだめしもくはず沼津をうち過ぎてひもじき原のしゆくにつきたり

喜「エヽ、おめえまだそんなしみつたれをいふは、今の錢で蕎麥でも喰ふべい　畑「ソレヤアよからう〳〵（と、そばやへ這入り）喜「オイ二ぜん頼みます　そばや「ハイ〳〵（と、やがてそば二ぜん出す）　畑「太い蕎麥だ、喰ひでがあつていゝわえ、北八もう一杯かへようか　喜「イヤ〳〵さういちどきに錢をつかつてはなちね、又先へいつて何ぞやらかしやせうから、湯でもだもいれ飲みなせえ　畑「そ

んならわけえ衆、湯を一つくんな　そばや「ハイ〳〵　畑「アヽうめえ〳〵、きた八飲まれえか、オイ〳〵もう一杯くんな、オツトヽヽ、アツヽヽ、口を火傷した、あんまりあつい、どうぞ蕎麥をちつとうめて貰ひてえもんだ　喜「コレ〳〵わけえしゆ、たび〳〵氣の毒だが、藥をのむから、もう一つ湯をくんな　そばや「ハイ〳〵　喜「コレたつぷりだよ、オツトよし、しかしわしが飲む藥は醤油のは入つた湯でなければきかれえから、とてもの事に、わけえしゆ、醤油を少しさしてくんな、オツトよし〳〵と、鮒の水をのむやうにグツ〳〵（と呑んで）「サアいかう　畑「大分心がたしかに成つた。

今食ひし蕎麥は富士ほど山もりに少し心もうきしまがはら

それより新田といへる建場にいたる。爰は鰻の名物にて、家毎に煽ぎたつる蒲燒の匂ひに、二人は鼻の先をひこつかして

蒲燒のにほひを嗅ぐもうとましやこちら二人はうなんぎのたび

頓て元吉原を打過ぎ、かしは橋といふ所にいたる。此所より富士の山正面に見えて、裾野第一の絶景なり。彌次郎坂あへず、

餅の名のかしは橋とて旅人のあしをさすりて休みやすらん

かくて吉原の驛に着く。棒ばなの茶屋女ども、いづれも黄色なる聲々に 女「お休みなさいやアせ、さけウあがりやアし、米の飯をあがりやアし、蒟蒻のお吸物もおざりやアす、お休みなさいやアし かごかき「駕籠よしかな、駕籠馬かた「ナア旦那衆、馬アどうだ、戻りだからやすい 彌「今迄乘づめに乘つて來たから、ちつと是から徒歩ひやせう 喜「ころびやせうが聞いてあきれらア、(それより宿はづれに、破れ編笠を着たる浪人ものと思しく扇を持て)ゥ丘「いざ〳〵酒を飲まうよ、さてお着はなに〳〵ぞ、頃しも秋の山草木、桔梗、苅萱、破帽額、紫苑といふは何やらん、「道中わづらひまして難義を致します、何卒路錢の御合力を願ひます 喜「イヤモウわつちらア昨宵ごまの灰に路用をとられて壹

文なしだ、どうぞ貰ひ溜めがあらば、こつちへ御合力れがひます 浪人「そんならコレ、つくな〳〵(と、さう〳〵に行過ぎる、二人もをかしさ、打わらひつゝたどり行くに、村はづれに小屋がけして、くわんおん様のかけじをかけ、麻のやぶれ衣を着たる坊さま、ねれぶりをしてねたりしが、旅人を見ると、にはかにりゝをうちならし) 觀音經「妙法蓮華經普門品第始終、忽多聞、世間子息大分遊興毎晩三味線、音曲滅多無正、夜前大食翌日頭痛八百、羅利古灰、笑止千萬、近邊醫者早速御見舞、調合煎藥、呑多羅久多羅腹張多心經 チイン〳〵はなのした空殿の建立、お志をおたのん申します 喜「お經がおもしろえから寄進に付きやせうぼう ハイそれは御苦勞、お名を記しませう 彌「そんなら彌次郎兵衛とつけなさいぼうず「ハイ俗名彌次郎兵衛 彌「エゝまだ死にやアしれえはなぼうず「へイまだ死しやらんのかな、イヤ是へはお志の戒名をしるします 喜「オイそんならそけへ書いてくんな、釋急難取つめた佛果菩提の

ため、ソリヤ壹文（となげだして行過る。松原の中ほどに十四五の前髪どてを崩してやくわんをかけ、菓子などならべて、遊ぶかたてに旅人をよびたつる）

「お休みなさいませ〳〵」　喜「彌次さん菓子でも食はれえか　弥「チトやすまう（と、どてのうすべりの上へ腰をかけ、二人ながら菓子をしてやり）　喜「小僧此の菓子はいくらづゝだ　こぞう「アイ貳文ヅゝ　弥「五ツくつたからいくらだ　こぞう「わしはいくらだか知りましない　喜「そんならかうと五ツで二五の三文か、コレこゝに置くぞ　喜「ヒヤアこいつは安いもんだ、もう一つ食はう、コレヤアいくらだ　小ぞう「ソレヤア三文　喜「ドレ〳〵うめえ〳〵、小僧、せんの錢は濟んだぞあとの菓子が四ツ食つたから三四の七文五分か、エイは、五分はまけろ〳〵　弥「イヤ餅もあるな　喜「ドレこいつはうめえ、この餅はいくらだよ、こぞう「ソレヤア五文どりよ　喜「五文ヅゝならば、かうと二人で六ツ食つたから、五六、十五文、ソレやるぞ　こぞう「イヤこのしゆは、モウ塵劫記ぢやア賣りましない、五文

ヅゝ六ツくれなさろ　喜「ヤア〳〵〳〵錢があるか知らん　こぞう「こゝへ出しなさろ、一ツ二ツ三ツ四ツ（と、五文ヅゝ、一つ〳〵にかぞへて、めのこ算用にひつたくられ　弥「こいつは大笑ひだ　喜「とんだ目にあつた、サアいかう（と、立ちあがり、四五間もゆきすぎ）　喜「アノ小ぞうは如才のねえやつだ、アノ餅がナニ五文取なものか、二文か三もんの餅だらうに、高く賣つて初手の損を塡めやアがつた　弥「いま〳〵しい、今食つた餅が咽喉につまつた、ゲツ〳〵（と、をかしさ半分、子どもと侮つてぢきにむくつたと打笑ひ、たどり行く）それより久澤の善福寺といへるに曾我兄弟の石碑あるを拜みて、北八

今曾我に機縁を結ぶわれ〳〵は外に一家も一もんもなし

富士川のわたし場にいたりて、彌次郎兵衛

ゆく水は矢をいる如く岩角に當るをいとふふじ川のふれ

此渡を打越えけるに、はや日も西の山の端にちらつき、おのづから道急ぐ馬

土唄の、竹にとまる雀色時、やう〳〵蒲原の宿にいたる。

道中膝栗毛後編 巻之上終

東海道中

膝栗毛後編 巻之下

此宿の御本陣に、お大名のお着と見え勝手は今膳の出る最中、北八外より差覗きて 喜「コウ彌次さん、ちよつと此風呂敷包みを持つて居てくんな 彌「どうする 喜「イヤちつとの間だ（と、彌次郎に包みを渡し、御本陣へずつとは入り勝手のどさくさの中へあがり、片隅の方へすわると、本陣の女、だん〳〵膳を持ち運び、大勢へすゑると）喜「オイこゝへも一膳 女「ハイ〳〵（と、すゑる、かゝる混雑の中ゆゑ、人も氣がつかず、きた八思ふさま食つてしまひ、すきまを見て手拭をひろげ、わんに盛りたるめしを一ぜんちやつと打あけて、手拭に引包み、やがてこそ〳〵と逃出し、まごつく内、彌次郎はむかうの軒の下に待ち、たいくつして）「きた八か 喜「オイ〳〵 彌「どけえ行つた 喜「へゝおらア飯を食つて來たが奇妙か 彌「エ、何處で 喜「本陣でどさくさまぎれに五六杯やら

かして來た　爾「ソレヤアいゝことをした、しかし手めえも實のねえもんだ、なぜおいらも連れていかねえ　喜「イヤおめえにやア土産を持つて來た（と、手拭に包みし飯をいだす）爾「なんだ飯か、有りがてえ、イヤなか〳〵手めえ氣がきいてゐるはえ、アゝうめえ〳〵（と、殘さずくつてしまひ、かの手拭をうちふるつて）「ヤヤこれは、手拭に包んで來たな、エゝきたねえ　喜「ナニきたねえものか　爾「それだとつて、手めえが金玉や何かを洗つた手拭だものを、アゝ胸がわるい、ペッ〳〵　喜「ハゝゝゝ、時に宿はづれへ行つて木賃と出よう（と、うちつれて此宿のぼうばなへ出で、そこらあたりをまご〳〵して）爾「コウ、どうぞいきな女のある内へ泊りてえの　喜「ナニ、木賃で泊る内に、いきも瓢箪もあるものか、ハテどこだかしれねえ（と、彼方此方の内を覗きあるき、軒の下に寢てゐる犬の足をふんで大きに食ひ付かれ）喜「アイタゝゝ　犬「キャアン〳〵　すもうりのこゑ「鰺のすウし、鯖のすウし　喜「コウ、すしやさん、此處らに木賃宿

はねえかの　すしや「アイ、向ふのとつばしのうちよ　爾「アイお世話（と、教へられたる内のかど口から）喜「チト御免なせえ、（と、ずつと這入り見れば、壁の四五壁も敗れようといふ内にて、佛壇一つと破れ葛籠一つの身代、主は七十近き爺、圍爐裏の際に藁を綯つてゐる。自在鍵にてつるしある鍋に何かぐつ〳〵煮える側に、六部が一人、順禮二人、一人は六十餘の爺、一人は十七八の娘、笈をきた儘、輝だらけの足をのばし、火にあたつてゐる。此家の婆ア松の枝をへし折り圍爐裏へくべながら）ばゞ「こつちへ這入らしやりませ　喜「わしらを今夜泊めてくんなせえ　おやぢ「上らしやりませ、ソレそこに水がある、足よチゆすぎなさろ、　あしをあらひながら喜多八「彌次さん見れえ、いゝ順禮が泊つてゐる、　爾「ホンニこいつ只はおかれぬ、ひだるい時にやアまづいものなしだ（と、打笑ひ、あしを洗ひて上へあがる）六部「サアこゝへ來てあたりなさろ　喜「コウ彌次さん、もつとそつちへ寄りな（と、娘のそばへわり込んですわる。あるじの

婆は圍爐裏の鍋をおろし）ばゞ「サア粥が出來た、みんな食ひなさろ　舞「ソレはあつたかでよからう　ばゞ「インネ、こんたしゆのことじやござらぬ、コレヤア此衆の粥だアよ　順禮「イヤ今日貰つた米ア粃ばつかし（計り）たんとあつて、そして牛分は石ころだアのし、こりよチ食つたら腹が重たくなるだんべい　ばゞ「六部さんのも三合ばかしやアあつたんべい、そこへ分けて食ひなさろ（と、この內巡禮六部もてん〳〵に茶碗を出しもつて食ふうち、だし合の米なれば彌次郎きた八はたゞ見てゐるばかり手もちなくて、煙草入の底をはたく、六部はやがて食ひしまひて）六部「二人のお衆はさだめしお江戸の衆だらうが、わしどもはお江戸で、てんこちもない目に逢つたアもし　舞「どうしなさつた　六部「わしがハア此六部になつた因緣のウ語り申すべいが、ヤレ扨、人と云もなア、はあ運が無くちやア、もちあげべいにも、あん（何）としてなづき（頭）やアあがり申さない、わしがハア若い時分にお江戸に居申したが、其時何でもハア夏のとつつき

から秋へぶつかけて、毎日〳〵づなく（無上）風の吹いたことがあり申した、其時分ハア何でも金儲のウすべいとつて、いろ〳〵首さアひねくりまはいて、とつけもないことを思ひついたアもし　舞「はての　六部「イヤサ、箱屋をおつぱじめ申したは、あにが重箱だアの、櫛箱だアのと、色々箱どもをづなく買ひ込んで賣る積りだアもし　舞「ハテ風が吹いたによつて箱屋とは、どういふ案じだの　六部「さればさア、わしがハア思ひ付きにやア、あにが扨、毎日〳〵とひやうもなく風が吹いて、お江戸では、がいに砂埃がたち申すから、おのづと人さアの目眼へ砂どもが吹き込んで、眼玉のつぶれる者がたんと出來るだんべいと思つたから、そこではア、わしが工夫のうして、世間の俄盲が外にあじやう（何條）せう事は無し、みんな三味のウ習はしやるだんべい、さうすると三味線屋どもが繁昌して、世界の猫どもが打殺されべいから、そこで鼠どもがづなく（無上）荒れて、あんでも世間の箱共のウ、みんな嚙りなくすべいことア、目の

前だアもし、コリヤハア、こゝで箱屋商賣のウおつ初めたら、賣れべいことア違ひはないと、あにがハア身上ありぎり、箱どものウ仕入れたと思はつしやい 甥「コレヤアいゝ思ひつきだ、大かた賣れやしたら〳〵 ろく「イヤ一つも賣れましない、そこでわしもハア是程までに工夫のウしてぜつぴ(是非)儲かるべいと思つた事がつゞばづれ申したから、所詮ハアあじやう(何條)してもいかないこんだと發起のウして六部になり申した、兎角世界は思ふ樣にやアならないもんだアもし 甥「ハア感心なお咄しだ、時に又順禮さんおめえはどういふ事から思ひついて順禮にやア出なすつた 順禮「コリヤハア、わしも序に懺悔ばなしのウしますべい、この娘はコレヤアふとり(一人)の孫でござるが、わしどもはハア變つたこんで佛緣のウ結び申した、わしは日光の方でござるが、さだめてそれさまたちも咄しに聞いてゐやり申すだんべいが、わしどもが國なぞは雷が澤山で、此二十年ばかしもあとのことであり申したが、ふと夏、でかく

雷が鳴り申して、わしどもが背戸口さアへ落ちたと思ひなさろ、さうするとハア其雷殿が榎のかぶつちい(株)で、でかく尻をうち申して疝氣が起つたと騒ぎやる事よ、あにがそこで天竺のウへ歸るべいことも出來ないから、わし共の内で養生のうしてゐる内、恥さア語り申さにやア理が聞え申さないが、その雷がわしどもの娘と、がらいれんごろのウしまして、互にハア離れべい樣子もおざんないから、すぐにその雷どのを聟に取つたと思ひなさろ、そこでハア天竺の親方どのから、夕立の時分は手傳てくれろとつて、夏の中は賴まれていきやり申したが、ふと夏上方さアへ拝に行くとつて出たなりけりで、歸らぬと思ひなさろ、あまつさい(剩)其時わしが娘はおツ孕んではゐるし、あにがハア案じをるまい事か、大方何處ぞへ落ちて腰骨かなぶん拔いて煩つてでもゐるだんべいと思つたばかし(計り)で便聞くべいにもあてづッぽうなり、コリヤハアあんたるこんだと思つてゐるうち、友達の雷どのが來て、これの聟どのはハア

熊野浦へ落ちて鯨にがらゝ呑まれたとの咄し、ヤレさて悲しいこんだと、娘も泣きやる、わしもハア片腕のウ捩がれた様に思ひをりましたが、あんとすべいせうことがない、そんだい（其代）にやア娘が雷どの〳〵種をおつばらんだから、鬼子でも産みをるべい、それにハア親雷の跡をつがせべいと樂しんで、あんでも鬼の子を産むやうにと氏神さまへ願のウかけて祈つた所が、因果なことア、生れた子が此娘でござり申す、そこでハアわし共も力のウ落して、是ほど祈つたのに、鬼は産まず、しかもこんなに満足な人間の子を産むといふは、よくよくの因果だとあきらめて、罪ほろぼしにこりよヲつれて順禮とおもひ立つたアもし、わしども程因果なものア無いと思やア、はなしよ（咄）ヲするさへ胸がつぶれ申すは（と、涙ながらに咄すうち、はや夜も更けゝれば、あるじの婆それ〴〵にねござなどあてがひ）ば「サアみんなそべらしやいませ、内がかいにせばいから、わしと順禮の女の衆は天井へあがつてれますべい（と、九ツ梯

子を二階へかけて巡禮の娘とつれてあがる。六部は笈のうちより紙帳など出しかぶる。あるじのおやぢも巡禮もうすべらなる蒲團のやうなものをひつぱり、闇爐裏のはたへころげてれる）喜「コレヤア小便がもるやうだ　彌「おいらもいつしよにいかう（と、うら口へ出）彌「アノ順禮め、ぶつちめようと思つたら二階へ行きをつた、いま〳〵しい　喜「さつきから咄してゐる内、そつと手を握つたり尻をつめつたりして、痴話をしてゐたが、おめえ知るめえ　彌「うそをつくせ　喜「うそでない、今夜アノ娘をぶちめて見せよう　彌「早い男だ（と、内へはいり、裏口をしめてれる）かゝる木賃泊りのわびしきも、咄の種とはいひながら凌ぐべきむしろ屏風も破壁を漏る風の音いたくも更けゆく鐘に目覺めて、北八あたりを伺ひ見れば、みな旅疲れのかけ合鼾、ゴウ〳〵スウ〳〵ムニヤ〳〵〳〵（時分はよしと北八そつと起きあがれども、あかりはなく、まつ闇暗、そこらあたりをさぐり廻して、やう〳〵と梯子にとりつき、二階へあがり見れば、天

非は竹簀子にて、その上にむしろを敷きたれば、あるくとミシリ〳〵と鳴るに驚き、やがて四ツ這になつて、さぐりまはり、娘とおもひ、婆が寢でゐるふとんの中へはひこみ、そろ〳〵撫でまはし、ゆすりおこせば、ばゝアめをさまし）ばゝあ「だれだ、あによチする（と、いふ聲に北八うろたへ、さては門ちがへせしと逃げだす拍子に、足へ竹の刺をたてゝ、ばつたりこけると、竹の簀子をふみぬき、下へどつさり落ちる音ミシ〳〵、ガラ〳〵、ストーン、内のおやぢ目をさまし おやぢ「あんだ〳〵 こかいのばゞ「あんだかしらないが、とつぴやうしもない、皆起きなさろ〳〵（此音に六部。順禮もおきあがり）ろくぶ「どえらい音がした、あかりをつけなさろ、まつくろくて、あんだか、かんだか、知れないぞ（こゝに怪しいかな、北八天井を踏抜き、下へ落ちたところが、何か箱の様なものゝ中へ落ちて、一向にわからず。あしにごろ〳〵となんだかひツかゝる故搜りて見れば、佛様のごくわうなり。さては佛壇のなかへ落ちしと、苦しきう

ちにも可笑しさ半分、このまに駈け出でんとするに、はやあかりをともして うちのおやぢ「あんだか佛様のなかへ落ちたさうだ（と、佛壇の戸をひらけば、思ひがけなく北八が這ひ出たるゆゑ、きもをつぶし）おやぢ「イヤ此人は 喜「モシ身延様へはどう参ります おやぢ「馬鹿アいはつしやい、こんたアまあ、アゼニそこへ這入らしやつた 喜「イヤわつちは小便におきた所がツイ戸まどひをして おやぢ「アニ戸まどひをした、イヤこの人は佛壇の中へ小便をしやせぬか（と、佛壇の内をのぞき） おやぢ「ヤアヤアヤア、こんたア天井から落ちめさつたな 喜「アイサ、つひアノ猫に追はれて落ちやした おやぢ「アニこんた鼠ぢやアあるまい、猫に追はれたたア、あんたるこんだ、そしてアゼ天井へあがらしやつた 喜「イヤわしは犢鼻褌を鼠にひかれたから、もしや二階にでもあらうかと、それを搜しに（と、言譯をしてゐるうち、上からばゞアが降りて來り） ばゞ「イヤ〳〵さうぢやアござらない、わしもハア六十になり申すが、どこの國にか、あによチす

べいと思つて、わしがひところ(懐)へ這込みめさつた　おやち「ヤア〳〵こんたア氣が違やアせぬか、わしどもは二十年もこつちイ、そんなあじやらしいことア、中絶のウしてゐますに、アノしわくたな婆アが所へ這込むといふは、イヤはやこんたは見たくでもない人だ　喜「イエもう御免なせえ、コレ彌次さん、寢たふりをしてゐずと、起きてくんな（と、ゆり起されて可笑しさをかくし）彌「どうもわけえものといふものア、あとさきのかんげえがござりやせん、どうぞ料簡してくんなせえ（と、六部や巡禮もとも〴〵口を添へてやう〳〵と治まり、きた八も浴衣一枚うりしろなして、天井の繕ひ賃少々出し、さらりと濟んでしまひければ、ほどなく夜があけて、彌次郎きた八はさう〳〵にこの所をたち出でゆく道すがら）　彌「北八大分ふさぐの、小田原の泊りではすいふろの底を抜いて二朱ふんだくられ、又ゆうべは二階をぶん抜いて三百とられたも智恵がねえぞ　喜「イヤ面目しでえもねえ、いま〳〵しいが一首詠んだ、

順禮の娘とおもひ忍びしはさてこそ高野六十の婆々

彌「ハ、、、、、ゆうべ戸まどひの言譯も可笑しかつたが、ふんどしを鼠にひかれたとはいしこちつけだ、イヤそれで一つ咄を案じたがどうだ　喜「コレヤ面しろえ、聞きてえの　彌「先づかうだ、ゆうべの樣に順禮や六部と一所に木賃泊をしやした時に、手めえが夜中に起きて何かまごつきやす、さうすると、みんなが目をさまして、コレヤおめえ何をしなさるといふと、手めえがいふには、イヤ、わしはふんどしを鼠にひかれやした、たしか二階の方へ引いていつたやうだといふと、順禮も六部もさう云ひなされば、わしも枕元に置いたふんどしが見えぬ、イヤわしがのも此處に置いたが無い、コレヤアみんな鼠にひかれたもんだらう、なんでも二階へ行つて見やせうと、皆伴れだつて梯子を昇りやす、さうすると二階の隅の方で三味線の音がする、イヤこいつは不思議だと、おがり口からすかして見れば、鼠共が大勢寄つて、皆のふんどしを擴げて見て、

一疋の鼠がいふには、おいらが引いて來た六部のふんどしは、振ふと三味線の音がするはどうしたことだやら、合點が行かぬといひ乍ら、其ふんどしを口に啣へて振つて見ると、なる程チ、、、、チン〳〵なぞと鳴りやす、そこて又外の鼠がいふには、六部のふんどしに限つて三味線の音がするも不思議だ、ものはためし、おいらがひいてきた順禮の犢鼻褌をも振つて見よう、と同じく口に啣へてふると、是もチ、、、、チン〳〵と鳴りやした、こいつは妙だと、又一疋の鼠が、おれは北八とやらいふ男のふんどしを引いて來たが、コレヤア越中だから短いだけで皷弓の音がするだらうと啣へて振つてみれば、ヅヽンヅン〳〵と義太夫三味線の音がしやす、そこで鼠どもが、こいつは不思議だ、六部や巡禮のふんどしは皆可愛らしい歌三味線の音がするに、なぜ北八とやらがふんどしは義太夫三味せんの音がするだらうといふと、隅っこの鼠が暫く考へ、ソレヤアその筈だは「ハテ北八とやらは大方太棹だらうよ、

喜「ハ、、、、、奇妙々々、(と、此はなしのうち由井の宿に着くと、兩側より呼びたつる聲)茶屋の女「お這入りなさいやアせ、名物砂糖餅よチあがりやアせ、しよつぱい(鹽辛)のもおざいやアす、お休みなさいやアせ〳〵 彌「エ、やかましい女どもだ。

呼びたつる女の聲は剃刀やさてこそ髮は髮由井の宿

それより由井川を打越え、倉澤といへる立場へ着く。髮は鮑榮螺の名物にて、蛋人すぐに海よりとり來りて商ふ。こゝにてしばらく足を休めて、

髮もとに賣るはさざゐの壺燒やみどころおほき倉澤の宿

それより薩埵峠を打越えたどり行くほどに、俄に大雨降り出しければ、半合羽打かつぎ、笠深く傾けて、名におふ田子の浦、清見が關の風景もふりうづみて見る方もなく、砂道に踏込みし脚も重げに、漸く興津の驛にいたり、こゝにあやしげなる茶店に立ち寄り 喜「オイばあさん、ソノ黄粉を付けた團子を二

三本くんなせえ　弼「さて〳〵久し振でおめえの顔を見たは、いつもお達者で目出度、時にこの子は、ちつさな時見たよりかア、大きくなつた、姉御は達者かの　ばゞ「わしは子どもはおざんない　弼「ハテノ、おめえの孫でなけれやア、たしかどこのか孫でア孫もおざんない　ばゞ「インネ子が無けれやあつた　ばゞ「インネ馬士ちやアおざんない、隣の駕籠屋の子でおざるは　弼「ハアさうか、コウあの子、團子が二つ餘つた、ソレ食ひな　かご屋の子「うらア厭アだ　弼「ナぜいやだ　かど屋の子「ナニ糠ア付けた團子はやアだ　弼「ナニ糠を付けるものか、コリヤ黄粉だ　ばゞ「インネ、わしらがとこちやア糠ア付けて賣り申す　弼「エ、道理でざら〳〵すると思つた、ベツ〳〵、そんなら犬にやらう、コ、、、、犬「わん〳〵　弼「ソリヤやるは、あんといへ　犬「あアん　弼「ア、惜しいもんだ（と、殘らず犬にやつてしまひ、胸をわるくしてこゝをたち出で辿り行くに、猶雨は頻りにふり纏きて、一向酒落もむだも出てばこそたゞとぼ〳〵と歩み惱

みて、程なく江尻の宿をうち過ぎけるに、こゝにて雨も霽れければ）

降りくらし富士の根ぶとを打すぎて江尻にあめの霽あがりたり

雨やみたれば自ら行きかふ人の足も輕げに、からしり馬の鈴の音も勇ましく

シヤン〳〵〳〵　まどのうた「よんべナア、しのんだらアエ、おさんどなアまづいイあせされてゐた、がらいよなべの飯がすぎて、つッぷしたア、エ引エ、このほてッばらア、またばりをこきやアがる、次でにうら（我等）もやらかすべい、シヤア〳〵〳〵（さきへ行く馬かたあとをふりかへり）「次郎ヤイ、にし（主）がおま（馬）アだがおまだ、　あとかちゆくまど「コレヤア下町の酒屋のおまよ、あしこ（彼所）の野郎めが、がいにづなく（上無く）つかやアがつたんで、おまアえづい（強）、きんにより（昨日）も清水へ四歌いつてかへると、役があたつて、府中までとッばしらかしたア、駄賃はみんなうらが呑んでしまつて、がらおまに食はせべいものアなし、丁場の脊戸に繋いで置いたら、雪隱のやにより（屋根を）がら

ちみんな食らやアがつた、（さきへゆくうまかた）「アノ酒屋のかゝあめは、しよつぱい奴よ、うらがあしこに居る時分にやア、食の中へ寸莎を混ぜて食はしやアがつた、それにあんだかハア、うらを見ると、むせうに字を書きならへの、イヤ算盤をかぢれのと、色々な戯言をつきやアがつて、うらをあしこの番頭に仕ようといやアがつた、其手をくふものか、業さらしな、ドウ〳〵」（喜まこどん、）火を貸してくんなせえ（馬士）「アイ〳〵、おまへちやア（御前方）お江戸だな、お江戸衆は氣かつない、きんにより、うらが府中から江尻まで三百で乘せた旦那がお江戸衆で、えい旦那よ、長沼迄來ると、その旦那がいふにやア、江尻まで三百ぢやア安いから、酒手を二百增してやらう、そんだい（其代）酒は別にこツちから買つて呑ませるとて、吉田の的ばでたらふく酒を振廻はしやつた、それから又いはしやるこやア、コリヤまご、にし（主）やア一日おまを引いてあゆんで草臥れたらう、是からうらが降りて、にしを此おまに乘せようといはつしや

る、コレア、ハアあんたるこんだ、うらア乘る事アやアだといつても、きかない旦那よ、ぜつびうらに乘れとつて、そんだい乘賃を二百やらうと、梅の木の立場から、とう〳〵うらをぼい乘せて、江尻へ來ると興津までおまア取るのだが草臥れたらうから、おまアとつた分で駄賃やらうと、又二百下さつた、あんなえい旦那はめつたにやア無いもんだ（ト、はなしのうち、此馬に乘つてゐる旅びと、馬の上にてそら斛をかく）「ゴウ〳〵〳〵」（馬士）「オイ旦那あぶない、目をさましなさろ、たび人起されて目を開き「馬が埒があかぬから、ねぶけが出た、昨日三島から乘つた馬はよい馬であつた、そして馬士がとんだ氣のよい男よ、三島から沼津へ百五十で値をして乘つた所が、馬士がいふには、旦那はこんな早い馬に乘つて、今に落ちようか、イヤめつたに居睡りもならぬなどゝ心遣ひしていさしやるだらう、それが氣の毒だから、駄賃はモウ貰ひますまいといひをる、それから三枚橋へ來ると、旦那は馬の鞍で腰が痛みませう、ちと降りてお休

みなさい、酒でもあがるなら酒手はこつちから上げませうと、馬かたの方から百五十くれて、沼津へ來ると、さきの宿まで送つて上げたいが、わしが馬ははれますから、外に馬をとつて乘つていかしやれ、駄賃はわしが進ぜませうと、又百五十たゞくれた、あんな氣のよい馬士もないもんだ（と、はなしのうち、此馬をひく馬かたあるきながら）「ゴウ〳〵〳〵、ムニヤ〳〵、（此はなしに彌次郎北八も大きに興に入り、歩むともなしに府中のしゆくにつく。先づ傳馬町に宿をかりて、それより彌次郎がしるべの方へ尋れ行く。こゝに金子の才覺調ひ、大きに勇み出して、やどへ歸り、なんでも今宵は、かれて聞きおよびしあべ川町へしけこまんと、きた八もろともに其支度をして、やどの亭主を招き）「モシ御亭主わつちらア是から二丁町とやらへ見物にいきてえもんだが、どつちの方だれてい主安部川の方でござります 喜遠いかれてい主爰から廿四五丁ばかしもあります、なんなら馬でも雇つてあげましようか 喜こいつはいゝ 彌から

尻にのつて女郎買も面白い〳〵。頓て爰より売尻馬に打乘り行く程に、かの安部川町といへるは安倍川彌勒の手前にて、通り筋より少し引こみて大門あり。爰にて馬をおり、廓に入りて見るに、兩側に軒を並べて、ひきたつる清掻の音賑はしく、店つきの趣は東都の吉原町におほよそ似たり。客と覺しきが、黑き木綿に紋の付きたる羽織など着て、手拭の先を結ばずしてかぶり、おくり行く茶屋の女は、燒杉の駒下駄をひきずり、客人の神と見えしは、多くは股引草鞋にて、いづれも祖父端折なり。そゝりてやひに前垂がけの競あれば、棒の先に畚など括り付けてかつぎ歩くひやかしあり。行きかふ男女は開帳參りの人の如く、更に風俗定まらず、又繁昌は言ふばかりなし。向ふより來るは地廻りと見えて、かたのしまがら、縞りたるどてらを着て、山だしの低き角下駄に竹のかはの鼻緒すげたるをはき、晒の手拭を猪頸にかぶり、往來の人に行きあたりて「あんだイ、コノおんぢいは眼をはだけて通りやアがれ、アゼお

れにぶッつかつた（あとから來る地廻り）「ヤイ市イ、あんとしたそいつ、へこたらしてやらずい（これはへこませるといふがごとし）さきのあひて「くらがりてツイ、がらゝ行合ました、堪忍なさい（ト行過ぎる。それより此てやひ格子先を覗き）ちまより「アノ壁のきしにゐる女のつらは、淺間さまの天の面のやうだ、アリヤ立つて行かア、せいの短い女郎だ、梶原の馬がくつた笹葉を見るやうに半分しかア育たないは（今一人の地廻り）「こゝの内の着物はみんな七間町の硯ぶたのやうだナア（この梶原の馬が食つた笹の葉といふは、狐が崎の梶原堂の故事也。又七間丁の硯蓋といふは、きじろ色にあぶらゐのかいてある駿河細工のすゞりぶたの事也。きものゝ模様をあぶらゐに見たゝてゝのしやれなるべし）や「ナントどこぞへあがらうか 喜「待ちなよ、たしかに爰は一分と十匁と二朱だげな、壁の方にしよう、大かた十匁だらう、むかふの暖簾はなんだ信濃屋、こちらが丁子屋、こゝが大和屋だな、しかしどうしてあがるのだか、

勝手が知れねえ、（ト、格子先をうろついてゐる内、客人ひとりあがるを見すまして）喜「よし〳〵サアこゞにしやせう、彌次さん見たてねえ や「オットきまつた、サアあがらう（ト、つれ立ちてずつと暖簾の内へは入ると）わかいもの「コレへよくお出でなさいました、先上へ（ト二階へ案内する。二人は見たてた女郎を註文すると、すぐに其部屋へ連れて行く。あたりを見れば、床のまに琴もあり、花もいけてあり、すべて吉原小店の部屋持ちのごとし。こゝは酒代別にかゝると見え わかいもの「御酒はどう致しませう 喜「酒も出してくんな わかいもの「ハイ〳〵とつてあげませう（ト、此内彌次郎があひかた、名は小ざゝの、うへだの小袖、縞繻子の帯、空色縮緬のうちかけ、北八が敵娼いさ川、縞縮緬にきんもうるの帯、黒縮緬の打かけ、いづれも皆紅絹うらなり。座にゝくと、きじろ色の煙草盆を控へて こさゝの「よくおざいました いさかは「エ、見たくてもないゝ、アノがきやア、まだ煙草も入れないヤア、小さめヤア引〳〵 や「サアおめえ

方、もつとこつちへ寄んなせえ、わけえしゆ、酒をはやく　わかいもの「畏りました、只今（ト、いひすてゝゆく。程なくさかづきだい、てうし、すゞりぶたを持ち出で、おさだまりの盃もそれ〳〵に濟てしまひ）や「わけえしゆ、一ツのみなわかいもの「ハイ や「ソレさかな（ト、南鐐一つはづむ　わかいもの「是はハイ（ト、いたゞいてたつてゆく。入かはりてかぶろ小さめ駈けきたりて）　かぶろ「アノヤ今吉野屋から磯次さんがおざいまして、おまいに用がありますから、ちよつくり來さしやいましとさヤア　いさかは「今いかずに　こさゝの「ハレ小さめやア、久能の仙さんはおざつたかこさめ「インネ　こさゝの「ばあチヤ、おら厭だア、こんちう（此中）からいかず〳〵と云つてよこして、がいに人をつるくるヤア　喜「コウおめえ方ア、もつとこつちへ寄つて一ツ呑みなせえ　いさかは「アイまあおまいち（御前方）あがりまし（此内若い者二人と遣手が伴れだち、八寸のうへに何か重箱をさげて持ち出）やりて「たゞ今は有難うおざりますわかいもの「わたくし金太と申しま

す、是は權右衛門、已後はお賴み申します（ト、丁寧に禮を云つて起つ　喜「ハ、ア爰では花もひつぱらに貰ふ極と見えた。若者に金太、權右衛門といふ名も珍しい　喜「コノ重箱はなんだ、ハハアあべ川の五文どりか、是が二朱のかへし、紀の字やの臺といふものだの、ハ、、、（ト、此内廊下何か騷がしく大勢の聲にて濟むの濟まぬのとわめきて、隣座敷へみな〳〵はいる）喜「そう〳〵しい、なんだ　いさ「なんでもおざりましない、アレヤア性のわるい客衆をめつけて、連れて來たのでおざいますヤア　喜「こいつは面白い、ドレ〳〵（ト、ぶすまをすこしあけて　隣座敷を覗き見れば、大勢の女郎が客一人を中に取りまき）　女郎「おまい、こんぢうから、こつちイはなぜ來ましない　今一人の女郎「丁子屋へばつかしおざるから、とこなつさんが腹アつツたつも、無理ぢやアおざりましないこの客人は山家の人「ヤレさて、わしはハイ、をつとひ（一昨日）もきんにより（昨日）も、來ず〳〵と思つたが、がらい用が出來て、來られなくなつた、ソレヤハイ、

丁子屋へも川なべのおんぢい(伯父)どんの附合で、行かずことア行つたアけれど、アニハイ、爰の常夏あんねえ(姉)と申し交したことアあるし、日天さまかけて、まづい(不味)心ぢやアおざらないヤア　女郎「ばあチヤ、それでも丁子屋の花山さんに馴染でいかずことア、ちがひはおざりましないは　客「アニハイ、そんだことアないこんだが、ずなく(無上)さういやアせず事がない(と、しをれかへつてゐる。爰の内の姉女郎、名はとこなつ、うちかけをつまみあげ、きせる煙草入を持ちそへ、悠々として、座敷へはいり　とこ夏「彌弟さん、こんちうから逢ましないが、よくおざいました　客「よかア來ましない、堪忍しなさろ　とこ夏「何もかんにせずことア、おざりましない、わしもハイ、此内ではあんねえ〳〵と云はれる女郎でおざいます、こんなアに顔をへしつぶされちやア、朋輩衆のまへ〳〵、たゞずやうがおざりましない、とてもハイ、是つきりの縁ならハ、おまいちのやうな性根の悪い客衆は見せしめのため、わしがせずことを見さしやいまし、ソレ夏菊さん、さつきの剃刀を持つておざいまし　客「ヤレそれやアわしよ(私)ヲどうせすと思つて　とこ夏「どうせずもんか、髪をきらずにヤア(と、剃刀を持つて立ちかゝれば、客はうろたへ、あたまをかゝへて)　客「ヤアレ、コリヤさて待ちなさろ〳〵(しんぞうどもくちく〳〵に)「待たずことアおざいましない　客「そんだアとつて、此ちつぽけな髭のちよん先さへ斬らないに、たりよう(夫を)ハイきらずことア免しなさろ　とこ夏「ナニ許さずもんで　きやく「アレこりやとこ夏「ソレきらずに　客「ヤアレこりや〳〵(と逃げ出すをとりまきてにがさばこそ、寄つてかゝつて、あたまをむしりちらかす。一體此客人けんつうにて、みな付がみなれば、髭も鬢も落ちてしまひ、客はあたまを撫で廻はして　客「ヤアこりやハイ、あたまア搓りなくしたは　女郎みな〳〵「ばあチヤ、オホ、、、　客「ヤレ笑所ぢやアない、コレわしはハイ、丁子屋へは、いくまいから、あたまア出してくれなさろ　とこ夏「わしやア知りましない　客「アレハイ、夏菊どのが隠した、

サアあたまア早く出しなさろ　とこ夏「おまいハイ、是でも丁子屋へいかずかきやく「モウいかない〳〵　とこ夏「本統にかやア　きやく「天照皇天神宮さまかけて行かない　とこ夏「すんなら夏菊さん出してあげさしやいまし（ト、とこ夏の指圖に隱したるつけ髪を出し渡せば）　きやく「ヤアまだ足らない　なつぎく「モウそればつかしきやく「アニハイ、まだ片小髪がそこらにやアないか、尋ねてくれなさろ　女郎「コレカ、あるヤア　きやく「それだ〳〵（ト、自身にあたまをさぐり廻して、まげさきを横ちよにくツつけ、ためいきをつきて）　きやく「ヤレ〳〵えずい目に逢つた、みな〳〵「オホ、、、、、、（ト、これよりなかなほりの酒になりて、いろいろあれども、事長ければ略す。彌次郎北八は腹のかはをよぢり）型「いづくの浦でもあるやつだが、よつほど面白かつた、てうど去年の春、一九が中田やの勝山にしばられた時、あんなざまであつた、業晒な（ト、此内若いもの來り）「モウお床にいたしませう、チトあつちらへ（ト、北八は自分の相方の部屋へ行くと、

そのうち若いもの、床をとりて、二人ながらひきわかれてしばらくまどろむ。斯て一すゐの夢は、覺めて曉の名殘を惜み、彌次郎床を起出づれば、北八も目をすりながら、爰に來りて打つれ立ち、梯子を降りるに、皆々送り出て、挨拶そこ〳〵にびきわかれ、傳馬町さして急ぎかへり來りければ、早くも宿には朝飯の用意整へ、膳をすうるに、支度あらましにして、やがてこの驛を打立ちけるが、今戻りしみちを眞直に、程なく彌勒といへるにいたる。爰は名にあふ安倍川餅の名物にて、兩側の茶屋いづれも奇麗に花やかなり）　茶や女「名物餅をあがりやアし、五文どりをあがりやアし〳〵　型「おいらアゆうべ二朱が餅を食つて來たから、モウ爰では食ふめえ　喜「さうさ〳〵（ト、此の内安倍川の川ごし道に出むかひて）「旦那衆おのぼりかな　型「オイさまさま何だ　かはご「川ごしでございます、やすくやらずにおたのん申します　喜「いくらだ　かはご「きんにようの雨で水が高いから一人前六十四文　喜「そいつは高い　かはご「ハレ川をマア

お見なさい（ト、打つれて川ばたに出る）弼「なる程豪勢な水勢だ。コレ落すめえよ　かはどし「ナニおまいサア、そつちをつん向きなさろ（ト、二人を肩車にのせて川へざぶ〳〵と這入る）喜「アヽなんまいだ〳〵、目が廻るやうだ　かはどし「確りわしが頭へとつつきなさろ、アヽコレ、そんなにわしが目をふさがツしやるな、向ふが見えない　弼「なるほど深いは、コレ落して下さるな　かはどし「アに落すもんかえ　弼「それでもひよつと落したらどうする　かはどし「ハレ、落した所が、たかでおまいは流れてしまはしやる分のことだ　弼「エヽ流れてたまるものか、イヤもう來たぞ〳〵、ヤレ〳〵御苦勞々々（ト、肩車よりおりて賃錢を）やり　弼「ソレ、別に酒手が十六文ヅヽ、かはどし「ヘイコレは御機嫌よう（ト、川ごしはすぐに川上の淺い方をわたつて歸る）喜「アレ彌次さん見れえ、おいらをば深い所を渡して六十四文ヅヽふんだくりやアがつた

川ごしの肩車にてわれ〳〵を深いところへひきまはしたり

夫より手越の里に至るに、又もや俄雨降り出して、忽ち車軸を流しければ、半合羽取出し打かづき、足を早めて程なく丸子の宿にいたる。こゝにて支度せんと茶屋へ這入り喜「コウ飯をくはうか、爰は薯蕷汁の名物だの　弼「さうよ、モシ御亭主、とろゝ汁はありやすか　ていしゅ「ハイ今出來ず　弼「ナニ出來ねえか、しまつた　ていしゅ「ハレちつきにこしらへずに、ちいと待ちなさろ（ト、俄に芋の皮もむかずして、さつ〳〵とおろしかゝり　ていしゅ「おなべヤノ〳〵、このいそがしいに、あによヲしてゐる、ちよつくり來い〳〵（ト、けはしく呼びたつるに、裏口より小言をいひながら來るは、女房と見え、髪はおどろの樣に振被りたるが、せなかに乳呑子をせおひ、藁草履ひきずり來り）女房「今彌太アのとこのおんばアどんと咄しよヲしてゐたに、やかましい人だヤア　ていしゅ「アニハイ、やかましいもんだ、コリヤ、そこへお膳を二膳拵へろ、エヽソレ、前垂がひきずらア　女房「おまい箸の洗つたのウ知らずか　ていしゅ「アニおれが知るもんか、コ

リヤヤイ、そのはしよチよこせヤア　女房「これかい　ていしゅ「エ、、はして芋がすられるもんか、擂木のことだは、コリヤ扨まごつくな、その膳へ付けるのぢやアないは、こゝへよこせといふことよ、エ、、らちのあかない女だ（ト、すりこ木を取つてごろごろといもをする）女房「ソレおまい、すりこ木がさかさまだていしゅ「かまふな、おれが事より、うぬがソリヤ海苔が焦げらア　にようばう「ヤレ〳〵やかましい人だ、コノ又がきやア同じ様にほえらア　ていしゅ「コリヤ擂鉢をつかまへてくれろ、エ、さう持つちやア、すられないは、おへないひやうたくれめだ　にようばう「アニこんたがひやうたくれだ　ていしゅ「イヤこのあまア（ト、すりこ木で一つくらはせると、女房やつきとなりて）にようばう「コノ野郎めは（ト、擂鉢を取つてなげると、そこらあたりへとろゝがこぼれる）ていしゅ「ヒヤアうぬ（ト、すりこ木をふりまはして立ちかゝりしが、とろゝ汁に辷つてどつさりところぶ）にようばう「こんたに負けてゐるもんか（ト、摑みかゝりしが、是もとろゝに

すべりこける。むかふのかみさま、駈けてきたり「ヤレチヤ、又見たくでもない喧嘩か、マア靜まりなさろ（と、兩方をなだめにかゝり、これもすべりころんで）「コリヤハイ、何たるこんだ（と、三人がからだ中とろゝだらけにぬるゝして、あつちへすべり、こちへころげて大騒ぎとなる）彌「こいつは始まられえ、さきへいかうか（と可笑しさをこらへて爰を立出て）喜「とんだ手やひだ、アゝとろゝ汁で一首咏みやした

喧嘩する夫婦は口をとがらして蔦とろゝにすべりこそすれ

それより宇津の山にさしかゝりたるに、雨は次第に篠を亂し、蔦の細道心細くも杖を力に十圓子の茶屋近くなりて、彌次郎思はず坂道にすべりころびければ、

降りしゝるあめやあられの十圓子ころげて腰をうつの山みち

岡部のしゆくのやど引待受けて「お泊りでございますか　彌「イヤわつちらア、

けふ川を輕さにやアならねえ　ゃど引「大井川は止りました　喜「なむさん、川がつかへやしたか　ゃど引「左様でございます、さきへお出でなさつても、お大名が五ツかしら、島田と藤枝にお泊りでございますから、あなた方のお宿はござりませぬ、先岡部へお泊りなさいませ　彌「そんならさうしようか　喜「おめえ何屋だゃど引「相良屋と申します、すぐにお供いたしませうト、打つれて急ぎゆくほどに、早くも大寺かはらの坂道をうち越えて岡部の宿に至りければ

豆腐なるをかべの宿につきてけりあしに出來たる豆をつぶして

先づこの驛に宿を取りて、川のあくまで暫く旅の疲れをぞ休めける。

道中膝栗毛後編卷之下　終

東海道中膝栗毛三編序

予多年東海道に遊歴し、其行路中、山川の佳境勝景なるを假書して旅袖に藏めおけるあり。それが中に、風土の異なる遺風を錄し、亦土人の言語都會に替れるくさ〳〵の多かる中に、往來旅客の光景、或は貴遊或は卑賤の患苦、雲駕馬士の木訥なる、出女の姿けはひ、なべて鄙情のをかしげなる概略を、白地にかいつけたる道中の滑稽を、膝栗毛と題號し、初編後編祥にして世に行はれ、撰者が偶中の怡尠からず。由是今書肆の需に三編を輯作し、同志の人の覽に備ふ。將其文の拙きは、予が短才の及ばざるを視ゆるし給へとしかいふ。

于時享和四戌甲子蒼陽日

十返舍一九識

凡例

此編は、道中岡部驛より、舞阪に至り、荒井渡船にして一集終る。其餘草稿大概出來あれども、急迫にしていまだ校正するに遑なし。因て四編に悉く著し、嗣に出す。都て初編後編より、長途の滑稽、其趣にして珍しからず、好士の見るに倦まん事を恐れて、聊趣向の轉變せる事を輯む。猶四編に至つては事繁くして、舞阪驛より漸く四日市に至て終る。其次五編は伊勢路にかゝり、古市の遊樂、相の山の光景を盡し、其餘奈良越より、大阪へ出る迄を記して、全冊此に滿尾せしむ。

東海道中

膝栗毛三編 卷之上

名にし負ふ遠江灘浪平かに、街道の並松、枝を鳴らさず、往來の旅人互に道を讓合ひ、泰平をうたふつゞら馬の小室節ゆたかに、宿場人足共町場を爭はず、雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのづから獨行し、女同士の道連、ぬけ參りの童まで、盜賊誘拐の愁にあはず。かゝる有難き御代にこそ、東西に走り南北に遊行する雲水の樂み、得も言はれず。爰にかの彌次郎兵衛北八は、大井川の川支にて岡部の宿に滯留せしが、今朝御狀箱わたり、一番越しも濟みたる由、聞くとひとしく、そこ〳〵に支度して、旅籠屋を立出でけるに、はや諸家の同勢、往來の貴賤、櫛の齒を挽くがごとく、問屋駕宙をかけり、小荷駄馬飛んで走る、街道の賑はひ勇ましく、二人も共に浮かれ辿り行くほどに、朝比奈川をうち越え、八幡鬼島をすぎ、白子町に至る。爰は建場にて、兩側の茶屋女

「おちやアまゐるはア、一ぜんめしよヲまゐるはア、お休みなさいまアし〳〵

馬士の歌「うらがお長松のかゝアは、蛸よナア、あぜさ蛸だとおもしやるえ、八間まなかに足だらけ、しよんがえ、ドウ〳〵 馬「ヒイン〳〵 馬方「且那衆お馬いらないか、二百だが安いもんだイ、なんなら錢さへくんさりやア、只でもいかずに 喜「エ、二百出しやア夜の馬にのらア、糞垂れめが 馬方「ヤイ糞ツたれたアあんだイ、うらがいつ糞を〳〵 馬「ヒヽヒン〳〵 喜「ナントちよつぽり飲んでいかうか、コウ姉さん、いゝ酒があらば、ちつと計り出してくんな(ト、ちやや屋へは入る、茶やの女)「ハイ燗をしてあげずかヤア 喜「さうさ、時に肴は何がありやす 亭主「アイ葱と鮪の煮たの計かし 喜「イヤねぎまのふろふき、ソレよからう 亭主「インネ、ふろふきちやアござらない、たんだ(只)醤油で煮たのだアのし(トいひつゝてうし、盃をもち出で、まぐろを皿にもりて、もち來る)

喜「ハヽア、ねぎまといふから江戸でするやうだと思つたら、コレヤアきじやきを煮たのだな、よし〳〵 喜「はじめよう、オト、、、、、イヤ此肴はお陀佛だぜ、コリヤ昨日の鮪だな 亭主「インネ、ハイきんにより(昨日)のいを(魚)ちやアござらない 喜「それでもさつぱり食へぬ〳〵 亭主「ハアきんにようのがわるかア、をつとひ(一昨日)のを進ぜませうか、そんたい(其代)にやア醉ふことアうけ合だもし 喜「エ、醉つてたまるものか、そして此酒は半分水だ、ベツベツ、時にいくらだの 亭主「ハイ肴が六十四文、酒が二十八文 喜「うまくねえ代りに高いもんだ、サアいかうと、錢を拂ひ、髮を立出で、早くも鐙が淵といふ所に至り、例の好の道なれば、彌次郎兵衛取あへず、

髮もとは鞍の鐙がふちなれど踏またがりて通られもせず

それより平島口田中を打過ぎ、藤枝の宿近くなりて、

街道の松の木の間に見えたるはこれ紫の藤えだの宿

此しゆくの入口にて、風呂敷包みちよいと肩にかけたる田舍のおやぢ、馬の

はれたるに驚き逃げる拍子に、北八へ衝き當ると、北八水溜りの中へころげて大きにあつくなり、起き上つて山舍者をひつとらへて　喜「コノ親仁め、まなこが見えねえか、寒烏の黒燒でもくらやアがれ　おやぢ「コリヤハイ御免なさいい　喜「ヤイ御免なさいぢやアぢまれえわえ、コレ野郎は小粒でもぎやつといふから、金の鯱をにらんで産湯から水道の水をあびた男だ　おやぢ「イヽネハイ、水を浴びたならようござるが、そんた(其方)のこけた所はおま(馬)の小便溜りだもし　喜「エヽ、その小便の溜つた所へ、なぜつツこかしやアがつたえ　おやぢ「そりやハイ、わしもがらい、おまにつツばれられて、そんたにいきやつたのだ、どうもせずことがない、堪忍さつしやい　喜「なんだ堪忍しろ、いやだわえ、ほんのこつたが、大江山の親分が鐵棒ひいてわたりにこようが、石尊さまが猪の熊の側づらを書かせた提灯で、路次口から溝板の上へはひかがんで來ても、聽かれえといつちやア、久米の平内を居催促にやつたよりかア、まだびつくとも

せぬ奴さまだア　おやぢ「ソレヤアハイ、あにかしち六ケしいことをいはつしやるが、わしらにやアハイ、かいもくに知れ申さぬ、わしもハイ、此の近在の長田村ぢやア名のし(主)役も勤めた家筋だんて、今でもお地頭さまの年頭にやア、上席ノウせる男だ、あにも、がいにけゝれ(心)なく雑言ノウしめさることアござんないヤア　喜「エヽ、惡く洒落れらア、尻がかいゝわえ、あたまのかけでも拾はせてやらうか　おやぢ「エレ〳〵、そんたアづない人だヤア、わしにもハイ荒神様が付いて居ずに、がいに頤ノウたゝかしやんな　喜「エヽ、此すりこ木め(トくらはせにかゝる。彌次郎兵衛見かねて、やう〳〵に引きわけ)喜「きた八もう了簡しろえ、とつさん、おめえが全體竈相しながら氣がつえゝ、もういゝからいきなせへ(と、北八をなだめるうち、おやぢはつらをふくらかし、ふせう〳〵に行過ぎると、)彌次郎兵衛

頭にのつてきた八に今たゝかれし藥鑵あたまの親仁へこんだ

打笑ひつゝ瀬戸川を打越え、それより志太村大木の橋を渡り、瀬戸といふ所に至る。爰は建場にて、染飯の名物なれば、

やきものゝ名に負ふせとの名物はさてこそ米もそめ付にして

斯てこの町端れの茶屋に、さきの田舎親仁休みゐたりけるが、二人を見つけて呼びかけ　おやぢ「エレ〳〵、さつきやア（最前）無禮ノウしました、わしもハイ、ありようは一杯飲んだ元氣で、づない事もいひ申したが、そんたしゆが了簡ノウしてくれさつたから、へこたらずに歸村ノウしますは、マアあんでも禮にさけウ一つ進ぜませう、こゝへ寄らつしやいまし　彌「ナニ、わつちらア酒も飲んで來やした　おやぢ「エレチヤア、折角わしが思ひだアのし、ぜつぴ一ツよからずに、コリヤ〳〵御亭の、味よいさけウ出さつしやいまし　喜「イヤお志は忝ないが、サア彌次さん行かう　おやぢ「ハテコリヤ、情のこはい人だヤア、ぢつきにやちずに、ちよつくり寄つてくれされヤア（ト無理に彌次郎北八が手を取つてひ

きずりこむ。二人もなる口ゆゑ、酒ときゝて少し心ひかされて）彌「えいは、北八一杯やらかさう、しかし親父さんおめえの御馳走ぢやア氣の毒だ　おやぢ「ハテコリヤ、よいといふのに、御亭の〳〵、肴アじやうにつん出してくれさい、時にコリヤハイ、こゝはあんまりはしつぼだ、奥座敷へいかずかやア　茶屋玄「サアあつちイござらしやいまし（と、出しかけた銚子盃を奥へ持つて行くと、三人も中庭からまはり、奥座敷の縁側に、わらぢのまゝあぐらをかき）彌「サア親父さん始めなせえ　おやぢ「アイすんだら、毒見ノウしませず、オト、、、よからずゝ、さて先若いのへ進ぜませう　喜「アイわつちやア酒よりかア腹がへつたおやぢ「アニ腹がへつた、ソレヤア飯を食はつしやい、ぢつきによくなる　喜「イヤ先づ酒にしよう、オツトあります〳〵、時にこの吸物は何だ、蠶鰯のせんば煮か、大方此跡ぢやア、南瓜の胡麻汁か、薩摩芋のよごしが出るだらう　彌「サア悪くいふぜ、コレ此海老を見や、かう跳れかへつた所は、合天井の天人と

いふ身がある　喜イヤ豐後節のことかアいなア、引といふ所もありやす、ハ、、、時におやぢさん、あげやせう　おやぢ「インネ、へさいませう、今肴が來ずに、コリヤあんれい〳〵、さつきから、ハイ〳〵し折れる程、腕をたゝくにあぜ肴アつん出さない　玄ハイ〳〵只今あげずに(と、やう〳〵に大ひらとはち肴を持つてくる)　おやぢ「やらやつと持つて來た、平はなんだ、卵のぶは〳〵かい　弼「遲い筈だ、今産むのを待つてゐたと見えた　喜「こいつは無鹽だ、奇妙々々　おやぢ「たんと飲んでくれさつしやい、そんたアわじがた(爲)にやア命の親だ、よくさつきやア(先刻)了簡ノウしてくれさつたのし　喜イヤわつちも、ツイ蟲の居所が惡くて、言ひ過しました、まつぴら御免　弼「そこは旦那どんも野暮ぢやアれえ、モシこいつはどうせ味噌べつたり燒生薑といふ男だから、せうどはなしさ(と、只飲む酒故、追從たら〳〵、やみくもにひつかける、このうち勝手よりもいろ〳〵持ち出し、膳も出て、彌次郎北八少しは氣の毒ながら、これも

食つてしまふと、おやぢ小べんに立つて行く跡にて)　喜「コウ彌次さん、おめえ此處のわり合をおれによこしなせえ、おいらがアノおやぢをいぢめたればこそ、おめえごうてきにやらかしたぜ　弼「おきやアがれ、さういつてもまんざらぢやアれえ、アノ親仁の來ぬうち、後に飲む分もやらかさう　喜「おらア此茶碗についでくんな、オツトきた〳〵、きたさの〳〵〳〵、讃岐の金比羅、たかゞ高瀬の船頭の子ぢやもの、おさへてどうする、ジア、ジャン〳〵〳〵　弼「エ、、、引、山にきつころばした松の木丸太のよ(樣)でも妻と定めたら、まんざら憎くくもあるまいし、やとさのせ〳〵、面しろえ〳〵、時にこのおやぢのべらさくめはどうした　喜「ホンニ長い雪隱だ、モシ女中、爰に居た爺樣はどけへ(何所へ)行つたの　玄「たしか表の方へ　弼「ハテノ、こいつどうか、へんちきだはえ(と、待てども〳〵、此おやぢ何處へ行つたか、一向に歸らず、雪隱をさがせども、行き方知れず)　喜「モシ女中、今の親仁が爰の拂をして行つたかの　玄「イ、

エ、まだ頂きませぬ　四「ヤア〳〵〳〵　喜「いつべい、おこはにかきやアがつたな、追駈けてぶちのめさう(ト、とんで出でたれども、どつちへ行きしやら、一向雲を摑むが如く、殊におやぢは此近在の者ゆゑ、わき道へはいりしにや、更に行方知れず。北八しよげて立歸り)「彌次さん、どうも知れねえ、とんだ目にあつた　四「しかたがねえ、手めえ拂をしや、アノ親仁めがくやしんぼうで、手めえに意趣げえし(返)をしたのだはな　喜「それでもナニおればかりかぶるもんだ、いま〳〵しい、折角醉つた酒がみんな醒めてしまつた　四「次郎どんの犬と太郎どんの犬と、みんな醒めてしまつたか　喜「エ、酒落なさんな、そこ所ぢやアねえ、まあなんにしろ、いくらだれ　亭主「ハイ〳〵九百長五十でございます　喜「騙に逢つたと思つて往生して拂ひやせう、いやア(言)いふ程、智惠のねえ咄しだ　四「さういつても乙なおやぢだ、いゝ(能)ことをしやアがつた、コウ北八手めえの顔で一首浮かんだ。

御馳走と思の外の始末にて腹もふくれた頬もふくれた

喜「へ、、ごうはらな、生馬の目を拔きやアがつた、

有難い忝いと禮いうて一杯たべし酒の御馳走

斯く詠みて北八も笑を催し、田舍者と侮りて、とんだ意趣返しをしられたるも可笑しく、爰を出でて行く程に、大井川の手前なる島田の驛に至りけるに、川ごしども出迎へて　川「旦那衆、川をたのんます　四「貴様、かはごしか、二人いくらで越す　川「ハイ今朝がけにあい(明)た川だんて、かたぐま(肩車)ぢやアあぶんない(浮雲)蓮臺でやらずに、お二人で八百下さいませ　四「途方もねえ、越後新潟ぢやアあんめえし、八百よこせも凄じい　川「すんだらいくら下さるヤア　四「いくらもすりこ木もいらねえ、おいらが直に越すは　川「オヽ川ながりやア(流)二百つけて寺へやるから、なんならさうさつしやい、流れた方がやすくあがらア、ハヽ、、、　四「馬鹿アぬかせ、問屋へかゝつてお越しなさるは(と、云

ひすて、、足早に行きすぎ）彌「ナン、ト北八、あいつらにからかふが面倒だから、いつそのこと問屋へかゝつて越さう、手めえの脇差を借しやれ　喜「なぜ、どうする　彌「侍になるは（と、北八が脇差を取つてさし、おのれが脇差の蛭肌を、あとの方へ延ばし長くして大小差したやうに見せかけて）彌「ナント出來合のお侍よく似合つたらう、此風呂敷包みを手めえ一しよに持つて供になつて來や　喜「こいつは大笑だ、ハ、、、（と、彌次郎が荷物をいつしよにして、北八肩にひつかけ、やがて川問屋にいたり、彌次郎奥に言葉の聲色にて）「コンリヤ、とん屋ども、身ども大切な主用で罷り通る、川ごし人足を賴むぞ　とひや「ハイ畏りました、御同勢はお幾人　彌「ナニ同勢なお馬か、お荷物は幾駄程ござります　とひや「左様でござります、旦那はお駕か、をるが、道中邪魔だから、江戸表に置いて來た、其代り身ども駕の陸尺が八人、そこへ記しめさろ　とひや「ハイお侍衆は　彌「侍共が十二人、鎗持、挾箱、草履取、

よいか〳〵、合羽かご竹馬、都合上下三十人餘りぢや　とひや「ハイ〳〵、その御同勢は何處に居ります　彌「イヤサ江戸表出立の節は殘らず召連れたが、途中で追々瘧疹を致しをるから、宿々へ殘し置いた、そこで只今川を越さうといふ同勢は、上下合せてたつた二人ぢや、臺ごしに致さう、なんぼぢや　とひや「ハイ、お二人なら蓮臺で四百八十文でござります　彌「それは高直ぢや、ちとまけやれとひや「エ、此川の賃錢にまけるといふはないヤア、馬鹿ア云はずと早く行くがよからずに　彌「イヤ侍に向つて馬鹿ア云ふなとは何ぢや　とひや「ハ、、、、がいにづないお侍だヤア　彌「こいつ武士を嘲弄しをる、不届千萬な　とひや「こんた武士か、刀の小じりを見さつしやい（と、いはれて彌次郎振返り、うしろを見れば、刀のこじり、柱につかへて蛭肌ばかりの所、二つに折れてゐる。皆々どつと笑ひ出せば、さすがの彌次郎面目なく、しよげかへつてだんまり）とひや「かたなの折れたのをさす武士がどこにあるもんだ、こんた象問屋を騙りに來たな、そん

ではハイすませないぞ　彌「イヤ身共は三保の谷四郎國俊の末孫だから、それで刀の折れたのを差し居るて　とひや「たはこと云ふと、くゝし上げるぞ　喜「コウ、彌次さん、をさまられえ、早く行かうと手をとつて引ずられ、彌次郎それをしほに、こそ〳〵と逃げいだす)とひや「ハ、、、、途方もない氣狂ひだ　彌「ツイ遣損なつた、いま〳〵しい、ハ、、、、。

出來合のなまくら武士のしるしとて刀のさきの折れて耻かし

此狂歌に双方大笑ひとなり、彌次郎兵衛北八爰を追れ、急ぎ川端に至り見るに、往來の貴賤際間もなく、此川の先を爭ひ越え行く中に、二人も直段取極めて、蓮臺に打乘り見れば、大井川の水逆卷、目も眩むばかり、今や命をも捨てなんと思ふほどの恐しさ、喩ゆるにものなく、まことや東海第一の大河、水勢早く、石流れて渡るに惱む難所ながら、程なくうち嘆て蓮臺を下りたつ嬉しさ云はん方なし。

蓮臺に乘りしは結句地獄にて下りた所がほんの極樂

斯うち興じて金谷の宿に至る。兩側の茶屋をんな「お休みなさいまアし〳〵　かごかき「戻り駕乘ていちやござい　喜「コウ、彌次さん駕籠はどうだ　彌「イヤ氣がない、手めえ乘るなら乘つて行かつし　喜「そんなら日坂まで乘らうかト、かごの直段極て打乘りたるに、折節雨ふり出しければ、古蓆一枚かごの上からうちかぶせ、擔ぎ出して早くも菊川の坂にかゝると、順禮が二三人「普陀落や岸打つ波は三熊野の、アイ、おかごの旦那一文下さい　喜「つくな〳〵　順禮「御道中御繁昌の旦那、この中へたつた一文　喜「エ、つくなといふに、べらぼうめ　順「それにべらぼうが入るもんか、其方がべらぼうだ　喜「コノ乞食めがト、力む機會に、如何しけん、かごの底がすつぽり拔けて、北八どつさり尻餅をつき「アイタ、、、、　順「ハ、、、、　かごかき「エレ〳〵、怪我アさつしやりませぬか　喜「コレ手めえ達やアなぜ此樣かごに乘せた　かごかき「許さつしやりませ、あんとせるも

んで　喜「何處でへ行つていゝかごを借りて來さつし　かどかき「こゝア坂中で借りず處が御座らない、イヤよか(能)ことがある、棒組、のし(主)のへこ(褌)をはづせ　はうぐみ「アゼ、どうせる　かどかき「ハテ俺がせることがある、見され(と、自分の犢鼻褌をはづし、棒組の犢鼻褌と二筋にて蓙の上からかごの胴中を括りて)

かど「サア乘つていぢや御座れ　喜「とんだことをする、これで乘られるもんかかど「ハテ外にせることがない、そんだいにやア睡たくならしやつても、此のへこで落ちず樣が御座らない、不肖して乘らつしやいませ(ト氣の毒さうにいふ、北八も可笑しく、此も咄の種と打乘れば、彌次郎)「ハ、、、、白い犢鼻褌てかごの胴中を括つた所は、悉皆お屋敷の葬禮といふものだ　喜「エ、、いまいましい、そんなことを云ひなさんな　彌「ハ、ア、かごの内で物を言ふから佛でもねえ、此奴聞えた、科人だな　喜「エ、、猶いま〳〵しい、おらアもう降りて行かう、(ト此處よりかごを降り、こゝ迄の賃錢を拂ひ、かごを返し、辿り行くに、

雨は頻りに降り出しければ、坂道辷りてやう〳〵と小夜の中山建場に至る。こゝは名に負ふ飴の餅の名物にて、白き餅に水飴をくるみて出す。この二人酒のみなれば、漸く一ッ二ッ食ひける內、雨强くなりたるに)

爰もとの名物ながらわれ〳〵は降り出すあめのもちあましたり

傳へ聞く無間の鐘はその寺に名のみ殘りて今は無しと、

この寺に無間の鐘もつきなくし今は晦日に嘘やつくらん

それより此坂を下り、日坂の驛に至る頃、雨は次第に强くなりて、今は一足も行かれず。あたりも見えわかぬ程頻りに降りくらしければ、或旅籠屋の軒に休み　彌「いま〳〵しい、がうてきに降るは〳〵　喜「花屋の柳ぢやアあるめえし何時まで人の門に立つても居られめえ、ナント彌次さん大井川は越すし、もうこの宿に泊らうぢやアねえか　彌「ナニとんだことをいふ、まだ八ッにやアなるめえ、今から泊つてつまるものか　はたごやのばゝ「この雨ぢやア、いかれましない、

泊らしやりませ　喜「イヤこりや泊りたくなつた、彌次さん見れえ、奥にたぼがでえぶ(大分)泊つてゐる　彌「オヤ、ドレ〳〵、こいつ談せるはえ　はたごやのばゝ「サアおまいち、泊らしやりませ　彌「さうしやせうト、こゝにて彌次郎北八足を洗ひ、すぐに奥の次の間へ通り　彌「コレ〳〵女中、素湯があらば一杯くんな　女「ハイ〳〵、いんま(今)あげ(上)うずず　喜「ひりやうずが聞いてあきれらア　女「ハイお素湯　彌「よし〳〵、きた八、昨日の薬をくりやな　喜「何だ、しんりいあんかん丹か、待ちなよ、ありのとわたりから、ひねり出してやらう　彌「エヽ馬鹿ア云やんな、腹が痛くてならぬ　喜「ソレヤア、おめえ、ないらの起つたのだ、豆を食やア癒る　彌「エヽ、悪く酒落ずと早く出してくれろえ　喜「そんなら眞面目に、ソレ田まちの反魂丹、手を出しな　彌「二つ計りくりやれ、ガリ〳〵、コリヤ胡椒だは、アヽ辛い〳〵　喜「ハヽヽヽヽ、待ちなよ、イヤもう無い、イヤこゝに錦袋圓が有る、ソレよしか　彌「唐紙の陰で眞闇だ(ト、包み紙をあけて、藥

をとり出しガリ〳〵〳〵)彌「、ア、又何をか食はしやアがつた、ペツ〳〵　喜「ドレ見せな、イヤア是は觀音様だ　彌「ほんに觀音様の頭ア嚙み碎いてしまつた、ハヽヽヽ　女「御膳を上げませう　喜「イヤ三膳食ヤア澤山だ　彌「よく口を叩く男だ、やかましい、默つて喋舌れ　喜「靜かに騒げが呆れらア(ト、此内膳も出て、色々酒落れながら食ひかゝり)彌「ときに女中、奥の客人は女ばかりだが、ありやア何だ　女「みんな巫女でおざりまさア　喜「ナニ巫女だ、コリヤ面しろえ、ちと生口を寄せて貰ひてえもんだ　彌「もう遲からう、七ツからは寄らぬといふことだ　女「ナニまんだ八ツ少し過ぎておざりまさア　彌「そんならきいて見てくんな、おいらが山の神をよせて貰はう　喜「コリヤ可笑しい　女「いんまきいて上ようずに(と此うち膳もすみ、女奥の間へ行き、かの巫女に、そのことを聞合す。巫女承知の由なれば、やがて彌次郎北八奥の間へ這入り頓むと、いちこ例の箱を出して直すと、さし心得て宿の女水を酌み來る。彌次郎すぎさりし女房のこ

とゐ思ひだして、榊の葉に水をむけると、いちこは先づ神下しゐはじめる）いちこ「抑も謹み敬つて申し奉るは、上に梵天帝釋、四大天王、下界に至れば閻魔法王、五道の冥官、我朝は神國のはじめ、天神七代、地神五代の御神、伊勢は神明天照皇大神宮、外宮には四十末社、内宮には八十末社、雨の宮、風の宮、月讀、日讀の御尊、北にべんくう鏡の社、天の岩戸、大日如來、淺間ケ嶽ふく一まん虛空藏、其外日本六十餘州總じて神のまんどころ、出雲の國の大社、神の數が九萬八千七社の御神、佛の數が一萬三千四れいの靈場、冥道を驚かし、此に請じ奉る、ハア恐れありや、この時に、この〳〵かたのそしやうりやう、だい〳〵のぶつてうし、弓と矢のつがひの親、一郎どのより三郎どのばんも變れ、水も變れ、變らぬ物は五尺の弓、一打うてば寺々の佛壇に響くのうじゆ、ヤアレハア懷しや〳〵、よく水を向けて下さつた、わしが弓取のまくらぞひどのも出やらうけれど、裟婆に居た時、精進が嫌ひで、肴は骨まで食や

つた報い、今は牛鬼になつて、地獄の門番をしてゐるゝゆゑ隙が無い、それでわしばかり出ましたぞや　彌「おめえだれだ、わからねえ　いちこ「ハアわしは、水を手向けどんの爲には、からのかゞみぢや子だからどの　喜「からのかゞみとア、彌次さんおめえのおふくろのことだ　彌「ハヽア、おふくろか、そんたにやア用はない　いちこ「ハアレからのかゞみどんぢやア用はおざらないか、わしやアそなたの枕ぞひぢや、あつかましくも能くぞ問うて下さつた、そなたのやうな意氣地なしに連れ添つて、わしや一生食ふや食はず、寒くなつても袷一枚着せて呉れた事はなし、寒の冬も單物一つ、アヽうらほしやヽヽ　彌「堪忍してくれ、おれも其時分は面工がわるくて、可憐さうに苦勞をし死にしやつたが、殘り多い　喜「オヤ彌次さん、おめえ泣くか、ハヽヽヽヽ、こいつは鬼の目に涙だいちこ「忘れもせない、そなたが瘧をわづらはしやつた時、わしは生憎濕瘧をかく、瓜の蔓の次郎どのは、よい〳〵病、たつた一人の子寶は脾胃虛して骨許りに痩

せこけろ、来はなし、日なしはせがむ、大屋どのゝ店賃やられば路次の犬の糞に辷つても小言は云はれず 弼「もう〳〵云つてくれるな、胸が裂けるやうだ いちこ「それにわしが奉公して折角溜めた着物まで、そなた故に置きなくしたが口惜しい、質は逆にやア流れ申さぬ 弼「その代り手めえは結構な所へ行つてゐるだらうが、おれは未だに苦勞が絶えぬ いちこ「ヤアレハア、何が結構でござらう、友だち衆の世話で石塔は建てゝ下さつたれど、それなりて墓參りもせず、寺へ附屆もして下されば無縁同然となつて、今では石塔も塀の下の石垣となりたれば、折節犬が小便をしかける許り、つひに水一つ手向けられた事はござらぬ、ほんに長死をすれば色々な目に逢ひますぞや 弼「尤もだ〳〵 いちこ「その辛い目に逢ひながら、草葉の陰で其方のことを片時忘れぬ、どうぞそなたも早く冥途へ來て下され、やがてわしが迎ひに來ませうか 弼「ヤアレ、とんだ事をいふ、遠い所を必ず迎ひに來るにやア及ばぬ いちこ「そんならわしが願を叶へて下

され 弼「オヽ、何なりと〳〵 いちこ「この巫女殿へ錢をたんとやらしやりませ 弼「オヽ、やるとも〳〵 いちこ「アヽ、名殘惜しや、語りたいこと、問ひたい事、數限りは盡きせれど、冥途の使ひ繁ければ、彌陀の淨土へ(と、うつむきて、巫女梓の弓をしまふ)弼「コレハ御苦勞でござりました(と、鳥目貳百文はりこみ、紙にくるみて出す)喜「くらやみの耻をとう〳〵明るみへぶちまけてしまつた、ハヽヽヽ、時に彌次さん、おめえとんだふさぐの、ナント一杯飲まうぢやアねえか 弼「それもよからう(と、手を叩き、女を呼び、酒肴をいひつける)いちこ「今日はお前様方ア何處からお出でなさりました 弼「アイ岡部から來やした いちこ「それはお早うおざりました 弼「ナニ、わつちらア歩くことア韋駄天様さ、サアといふと十四五里ヅヽは歩きやす 喜「その代り後で十日程は役に立ちやせぬ、ハヽヽヽ(と、此内酒と肴を持出る)弼「ちとあがりませぬか いちこ「わたしは一向下さりませぬ 喜「彼方のお方はどうだ いちこ「かゝさん、お出でサア、おかまさん

もお來なさいまし　喜ハ、ア、おめえのお袋か、エ、こいつはめつたなことア云はれぬわえ、まづ上げやせう、(と之より酒盛となり、さへつ、おさへつ、此巫女共、思ひの外の食ひぬけにて、いくら飲んでも酒蛙々々としてゐる。彌次郎兵衛きた八は大きに醉が廻り、色々可笑しき酒落あれども餘りくだ〳〵しければ略す。北八卷舌にて)「ナントおふくろさん、今夜おめえのお娘をわつちに借してくんなせえ　彌「イヤ俺が借りるつもりだ　喜「とんだことをいふ、おめえこそ今宵は精進でもしてやりなせえ、可愛さうに死んだ嚊衆があれ程に思つて、どうぞ早く冥途へ來い、頓て迎に來ようと深切にいふちやアねえか　彌「ヤレそれを云つてくれるな、迎ひに來られてたまるものか　喜「それだからおめえはよしな、サアお袋、おいらに極つた、(と巫女の娘にしなだれかゝるを突き放して逃る)いちこ「およしなさりませ　いちこのばゝ「娘がいやならわたしでは　喜「もうかうなつちやア誰彼の見さかひはない、(と無中になつて酒落る。此内勝手より

膳も出で、色々こゝにもあれ共略す。はや酒も納り、彌次郎北八も次の間に歸り、日が暮れるや否や、床をとらせ寢かける。奥の間にも旅草臥にやもう寢かける樣子、北八小聲にて)喜「なんでも巫子の新造めがイツチ此方の端に寢た樣子だ、後に這ひかけてやらう、彌次さんおめえ寢たふり抔は通り者だぜ　彌「おきやアがれ、俺がしめるは　喜「氣の强え、大笑ひだ(といひつゝ兩人ながらぐつと夜着を被り寢る。)已に夜も五ツすぎ四ツ廻りの拍子木の音枕に響き、聲所に明日の支度の味噌磨る音もやみければ、只犬の遠吠のみ聞えて、物淋しく更け渡るに、(北八時分はよしと、そつと起き出でゝ奥の間を窺へば、行燈消えて眞暗闇、そろ〳〵と忍び込み、搜り廻してかの巫女の懷中へ躙り込むと、思ひの外、此巫女の方よりものをもいはず、北八が手をとつて引ずりよせる。北八こいつはありがたいと、北儘夜着をすつぽり手枕の轉び寢に、假の契を込めしあとは、二人とも前後も知らず、鼻突合はせてぐつと寢入る。彌次郎兵衛一寢入

して目を覺まし起き上りて「もう何時だ知らぬ、手水に行かう、コリヤ眞暗で方角が知れぬ、(と小便に行くふりにて、是も奥の間へ這ひこみ、北八が先を越したとは露知らず、捜り寄つて夜着の上からもたれかゝり、暗がり紛れにかの巫女と思ひ、きた八がムニヤ〳〵いふ唇をねずり廻し、わんぐりとかみつく。北八膳を潰し、目をさまし)「アイタヽヽ、弼「オヤ北八か 喜「彌次さんか、エヽ、汚れえ、ペッ〳〵(此聲に北八と寢てゐたる巫女も目をさまして)「コリヤハイ お前ちは何だ騒々しい、靜かにしなさろ、娘が目を覺すに、(といふ聲は婆アの巫女、北八は二度びつくり、此奴取違へたか、いま〳〵しいと、這ひ出して、こそ〳〵と次の間へ逃げ歸る。彌次郎も逃げんとするを巫女手をとつて引ずりながら)「おまへ、此年寄を慰んで今逃げる事はござらぬ 弼「イヤ人違へだ、俺ではない ばゝあ「インネ、さういはしやますな、わし共はこんなことを商賣にやアしませぬが、旅人衆の伽でもして、ちつと計りの心づけを貰ふが世渡、腹さ

ん〳〵慰んで只逃るとはあつかましい、夜の明ける迄私が懐中で寢やしやませ 弼「これは迷惑な、ヤイ北八〳〵 ばゝあ「アレハイ、おつきな聲さしやますな 弼「それでも俺は知らぬ、エヽ北八めがとんだ目に逢はしやアがる(とやう〳〵無理に引離して逃げんとすれば、又取付くを突倒して、がたひしと蹴ちらかし、早々次の間へ這込みながら)

いち子ぞと思ふてしのびきた八に口を寄せたることぞ悔しき

道中膝栗毛三編 卷之上 終

東海道中膝栗毛三編 卷之下

東雲まだき驛路の急がしげに、ひきつるゝ朝出の馬の嘶に、旅勞れの目をこすりながら、彌次郎北八起き出て支度するうち、相宿の巫女が顏膨らかしてゐるも可笑しく、袋を立出で、ふるみや碧田の八幡を打過ぎ、右にしうとの畑、嫩が田といへる見ゆれば、彌次郎兵衛

干からびししうとの畑に引かへて水澤山のよめが田ぞよき

それより鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨强くして橋落ちけるにや、行きかふ人自ら股引をとり、裾まくりあげて、袋を渉るに、彌次郎北八もいざや引き連て渉りなんとする折から、京上りの座頭二人連れ、此川の歩わたりなることを聞きけるにや、一人の座頭 犬市「モシ川は膝きりも御座りますかな 喜左様／＼、しかし水が早いから、おめえ方アあぶない、用心して渉りなせえ

犬市「ハアなる程、水の音がよつぽど早い（といひつゝ石を拾ひ、川の中へ投げ込んで考へ）犬市「イヤ此處らがどうか淺いやうだ、コリヤ猿市、二人ながら啣牛を取るも面倒だ、おぬし若役におれをおぶつて渉れ　さる市「ハヽヽヽヽ、つるいことをぬかす、拳でまゐらう、なんでも負けた者がおぶつて渉るのだがよしか　犬市「コリヤ面白い、サアこんさんなむめで　さる市「りやん、ごうさい〳〵（と片手で拳をうちながら、兩方から左の手を出し、互に拳をうつ手を握りあひ）いぬ市「サア勝つたぞ〳〵　さる市「エヽいま〳〵しい、そんなら此風呂敷包みを貰樣一しよにしよはつ（脊負）せえ、ソレ、よしか、サア來い〳〵（と、支度して背中を向ける。彌次郎是は有難いと、さる市におぶされば、さる市は連れのいぬ市と心得て、さつ〳〵と川へはいり、難なく向ふへわたると、こなたの岸に殘りたるいぬ市）いぬ市「イヤ猿よ、どうする、早く川をわたさぬか、（さる市むかふの岸にてきゝつけ、腹を立て）さる市「コリヤ串戲な奴だ、たつた今おぶつて渡し

たに、又そつちへ行つておれを嬲るな　いぬ市「馬鹿アいへ、おのればかり渡つて、太い奴だ　さる市「イヤ、太いとはそつちのことだ　いぬ市「コリヤおのれ兄弟子にむかつて言語同斷な、早く來て渡さぬか（と、白い目をむき出し、腹立つる故、さる市仕方なく、又こちらへ渡りてかへり）さる市「サアそんならおぶさりなさろ（と背中を出す。北八しめたと手をかけておぶされば、さる市又さつ〳〵と川へは入る。犬市は大きにせきこみ）いぬ市「コレさる市、何處にゐる、（さる市、川中にて）さる市「イヤこいつはだれだと、北八を川の中へどんぶり落す）　喜「ヤアイ救けてくれ〳〵（と、手足をもがき流れる故、彌次郎とびこみ、引上ぐれば、頭から骨まで腐るほど濡れ）喜「エヽ、座頭めが、とんだ目にあはしやアがつた　彌「ハヽヽヽヽ、まづ着物を脱ぎやれ、しぼつてやらう　喜「ぜんてえ（全躰）彌次さんが悪い、なんのおぶさらずともいゝ（能）ことに、おめえが手本を出したから、ツイおれも　彌「川へはまつたか、氣の毒な、ハヽヽヽヽ、夫で一首やらかした、

はまりけり目のなき人と侮りし報いは早き川の流れに

喜「エ、聞きたくもねえ、よしてくんな、ア、寒い〳〵（と、裸になり、がたがたふるへながら、着物をしぼる。此内座頭は川をわたり行過ぎる）彌「こゝで干しても居られめえから、着替を出して着やれ、何處で火を焚いて貰つて、あぶるがいゝ　喜「エ、いま〳〵しい、風をひいた、ハアクッシャミ（と、ぶつ〳〵小言を云ひながら、着替を出して着かへ、腐つた着物はしぼつて引さげ出かけると、ほどなく掛川のしゆくにいたる。）棒ばなの茶屋女「おめしよヲあがりまアし、鰶と蒟蒻と干太根のお吸物もおざりまアす、鮒のせんば煮もおざりまアす、お休みなさいまアし〳〵　長持人足の唄「吹けばナア、吹く程ナアヽンエ、持つもな輕いナアヽンエ、綿をサア入れたやナア、長持にわたをナアヽンエヨウしつたかどうだか〳〵　馬のいなゝき「ヒイン〳〵　彌「オヤ北八見さつし、さつきの座頭めらがあそこに呑んでけつかるは　喜「こいつはいゝことがある、おいらを

川へはめた意趣返しをしてやらう（と作り聲にてかの座頭の酒を飲んでゐる茶屋へはいる）喜「オイ御免なせえ　茶屋の女「おいでなさいまし（と茶をくんでくる。北八かの座頭のわきへ腰をかける）女「お支度でもなさいますか　彌「まだ〳〵腹がぽんぽこなだ、（先刻の座頭二人此所に休み、酒を飲み居たるが、かの二人とは氣もつかず）いぬ「ハアれつから酒が足らぬやうだ、もう二合やらかさうさる市「いかさまなア、御亭主〳〵、もうちつと賴みます　女「ハイ〳〵　いぬ「ときに今の川へはまつた箆棒どもは、どうしたらう　さる「それよ、ハヽヽヽヽ、先づ代り目をやらかさうと、猪口に一杯ついで、一口のみ、下におくと、北八そつと手を出し、猪口の酒を飲んでしまひ、ちやつと本の所へ置く）さる「イヤ太い奴等であつた、ちやんとおれにおぶさりやアがつて、そのかはり水をくらやアがつた時は、救けてくれろと、悲しいおとぼれを出しをつた、何でもかすりをとる事ばかり心がけてゐる奴だから、大方あいつは護摩の灰だらうよ　いぬ「さうさ、